
ムーン・ライト

武池 柁斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムーン・ライト

【Nコード】

N3014S

【作者名】

武池 柊斗

【あらすじ】

《第一編》 完結！ ……満月の夜だけ霊が見えてしまう男子高校生、山坂浩二やまさかこうじはバレンタインデーにある少女と出会う。

その少女、月影香子つきかげきょうこは十年前に壊滅したという退魔一族の生き残りだった。

十年前に山坂浩二と退魔師として活動していたと彼女は言うが、山坂浩二にはその記憶はなく、また彼女が退魔師であるということ

も信じなかった。

月影香子は自分が退魔師であることを証明するために、山坂浩二と満月の夜に会うことを約束するが……………？

ブローグ

「はあ、はあ、はあ」

息を切らしながら一人の男子高校生が、まるで何かに怯えているかのように、薄暗い河川敷を走っている。

左側に川。百メートル走ならば余裕で直線コースを作ることができるくらいの幅。『銅鏡川』と呼ばれるそれは、静かに水面を揺らしている。

川の側面には水面から二メートルほどの高さの堤防がある。堤防の上の端には、幅一メートルほどの細長いコンクリートの道が銅鏡川に沿って続いている。

また、その道の横には、コンクリートの道の二倍ほどの幅の草むらが、少し盛り上がって細長い道と同様に川に沿って続いている。

草むらには木が等間隔に並んでいて、その木の一本一本には『ソメンヨシノ』と書かれた小さな板が掛けられている。

その木は現在、枝を見せるだけだ。

そして草むらの横には、乗用車の一台分か二台分かの幅をした、アスファルトの道が銅鏡川に沿って続いている。高さはコンクリートの道とほぼ同じくらいだ。少年はこのアスファルトの道を走っている。

薄暗いなかを走る男子高校生の右側には、低い石垣を土台とした

二階建て、もしくは三階建ての民家が並んでいる。

そして東の空、少年の後ろ側の夜空には、黄色に輝く満月が浮かんでおり、夜の闇を取り払っている。

少年は走り続けた。

平均的な体つき。目と耳にしかかるくらいの、ところどころが逆立った髪。中の上程度の顔立ち。上下黒の制服を着ていて、上は学ラン。一番上のボタンは外されている。肩には黒色のスポーツバッグが掛けられていて、背中に回されている。バッグ自体はそれほど大きくなく、背中に収まるぐらいの幅をしている。

少年は髪を揺らし、冷たい風を頬に浴びながら走る。

「あー！ ちくしょー！ わけわかんねえっての！」

少年は叫んだ。

そして、走り続けながら辺りを上下左右に見渡す。

まるで何かに怯えているかのように彼は両足を前へ前へと向かわせる。

「あー！ もう！ いやー！」

少年は再び叫んだ。

「なんで俺が！ こんな目に遭わなきゃいけないんだよ！」

彼は荒い呼吸を繰り返す。

「意味わかんねえー!!」

少年は再び辺りを見渡した。

この少年の名は、山坂浩二^{やまさかこうじ}という。

ある県の中心地、圭市^{けい}にある県立の高校に通う、普通の高校一年生男子。

……と言いたところだが、彼には変わった点がいくつかある。

一つ目は、六歳以前の記憶がないこと。

二つ目は、異性からは絶対に避けられてしまうこと。

そして三つ目は。

「なんで満月の夜だけ幽霊が見えるんだよ!」

そう。『満月の夜だけ』幽霊が見えること。

「絶対、こっち来んな！ 近寄るな！ そのままでいろ！」

今、山坂浩二の目には、この世のものとは思えない存在が映っている。

透けた姿。人のかたちをしたもの。球体。ウナギのようなもの。姿をさまざまに変えるもの。

それらが、山坂浩二から少し離れたところで宙に浮いたり、その場で佇んだりしている。山坂浩二には近づかない。

それでも、山坂浩二は走った。

逃げるように走った。

「ちくしょー！ 女の子には理由もなく避けられるし、親はいないし、記憶もない！ おまけに満月の夜は幽霊が見える！」

山坂浩二は走りながら夜空を見上げて叫んだ。

「もう、こんな人生嫌だあああああ！！」

山坂浩二は走り続けた。

彼の後ろの遙か遠い空で、長い髪のようなものを揺らしながら、一つの黒い影が満月の前を横切っていった。

これは、満月の夜だけ幽霊が見える少年と、とある少女が紡ぐ物語である。

第一章 その出会いは偶然か必然か

二月一四日。といえば何の日かご存じだろうか。

そう、バレンタインデー。

その日は日頃お世話になっている人に感謝のしるしとして、また愛する人にチョコレート等を贈る日だ。

世界では男性から女性に贈るのが一般的だが、ここ日本では女性から贈ることが通例となっている。

そしてその日、チョコを何個貰うことができたか、ということが世の男性にとってステータスになる場合もある。

だが、貰うことができた男の人がいるのならば、貰うことができなかった男の人もいるのは当然のことである。

そして、微妙な公立の進学校に通う男子高校生、やまざかこうじ山坂浩二も貰えない男の一人である。

今、彼は夕日に染まる河川敷を歩いている。

「あーあ、今年も収穫なしなあ。一度だけでもいいから、貰ってみたいもんだよなあ」

と呟きながら、彼は学校からの帰り道をとぼとぼと歩いていく。

彼、山坂浩二は顔はおそらく中の上に入る部類であり、平均的な

体型、平均的な身体能力、平均的な成績の、いわゆる普通の高校生。髪は目と耳にかかるくらいの長さをしている。

人との接し方もよく、明るい性格で、一見女の子の友達もいそうなのだが、

「まあ、女友達もないし、当たり前か」

と彼が呟いたとおりに、山坂浩二は女友達が一人もない。

「なんで、女子のみんなは俺に近づかないんだ？ 何か悪いのか？ だとしても、一人くらいは友達がいてもいいはずだ。じゃあ、なんで俺には女友達が全くいないんだ？ 何で女に縁がないんだ？それに、女子のみんなから『仲良くしてみたいけど、なんか仲良くしちゃいけない気がするから近づきたくない』って言われてるってどういうことだ？ たまには女の子と接したい。俺だって健全な男子高校一年生のつもりなんだよ」

と、なにやらぶつぶつ言いながら歩いている山坂浩二は、他人からは完全にアブナイ人にしか見えない。

そして、彼は橋のあるところまで着くと歩くのを止め、立ち止まった。

その橋は「未来橋」と呼ばれていて、二車線道路があり、両脇に歩道がある。橋の上には街灯が等間隔で並び、橋の両端は朱く塗られている。

彼の住む地域では割と大きな橋だ。

山坂浩二は上を向いて空を見た。

まだ暗くはなっていない。

そして、彼はため息をついて、

「あーあ、確かもう少ししたら満月だよな。満月の夜って幽霊が見えてしまうから嫌なんだよなあ」

と独り言を言った。

そう。彼の言った通りに、山坂浩二は満月の夜だけ霊が見えてしまつという難儀な体質の持ち主だ。

おまけに彼は事故か何かが原因で、六歳以前の記憶を失っている。今の彼には両親がいない。

気がつけば遠い親戚と名乗る人の家にいたという過去を持つ。

そのため、彼は六歳以前の自分自身のことを全く知らないのだ。

彼は上を向いたまま、

「あーあ、俺の人生ってよくわかんないなあ。せめて彼女でもいてくれたら、少しはマシなのに」

と言った。彼はまだ独り言を続ける。

「でも、出会いがないからなあ。出会いが。でも俺に出会いなんて

あるわけないし」

彼はそう言い終えた後、大きく息を吸って願うように言った。

「空から女の子が落ちてきたりしないかなあ」

彼はその言葉の後、一分ほど動かずにいた。

その間、彼は空から女の子が落ちてくることを切実に願った。

しかし、何も起こらない。

目の前にあるのはいつもの見馴れた光景。

「まあ、当たり前か。どっかのマンガやアニメじゃないんだし。ばかか？ 俺は。ありえねえっての」

と彼は首を横に振りながら言った。

そして再び歩き出し、そのまま橋の横を通り過ぎていった。

彼の家はその「未来橋」から歩いて五分のところにある。

彼は育ての親から、

「一人暮らしもできるようになっておかないかね。一人で暮らせるようになると後々便利だから」

と言われ、今は家賃の安いボロアパートに一人で住んでいる。

ただ、風呂が狭いながらもついているので、山坂浩二としては銭湯に行く手前が省けて嬉しい。

そろそろ暗くなり始め、だんだんと寒さが増してきた。彼は早く家に帰りたいと思うようになってきた。

一刻も早く風呂に入って暖まりたい。

そんな思いが込み上げてきたのだ。

彼は家に向けて走り出そうとした。

しかし、一歩踏み出したところで、

後ろから、何かが水に落ちたような大きな音が聞こえた。

山坂浩二はその音を聞いて後ろに振り向いた。

「何かあの川に落ちたのか？」

と彼は言つて川の水面をじつと見た。

すると、ちょうど橋の下に何かが浮いているのが彼の目に映つた。

「なんだ、あれは？」

と彼は言つて、川の水のそばまで歩いていった。

彼はその「何か」をさらにじつと見た。

すると、彼はその「何か」がなんなのかに気づいた。

「人だ！！ 人が溺れてる！！ 早く助けないと！！」

と彼は大きな声を上げ、川のそばを走り出した。

何かを探しているようだ。

五。メートルほど走つたところで、彼は足を止め、

「あつた！！」

と声を上げてその場にしゃがみ込んだ。

彼は何かを掴んで立ち上がり、もと来た道を走り出した。

寒い風が彼に吹き付けてきた。

しかし、彼は全力で走る。

冷たい水の中で溺れている人を助けるために。

彼はもとの場所まで戻ると、何かを川の水面に向けて放り投げた。彼の手から何かが延びていく。

彼が探していたものとは、ロープだった。

その今にもちぎれそうなほど古いロープは、溺れている人の目の前に着水した。

「それにつかまって!!」

と彼は腹の底から叫んだ。

すると、水の中にいる人はそのロープを掴み、山坂浩二のいる岸に向かって水しぶきを上げながら泳ぎ出した。

彼も必死でロープを引っ張る。

その人が岸の近くまで来ると、山坂浩二は地面に伏して腕を伸ばした。

「つかまって!!」

と彼は思い切り叫んだ。

その人は山坂浩二の腕を掴み、山坂浩二はその人を川から引き上げた。

「はあ、はあ、だ、大丈夫ですか？」

と彼は引き上げた人のほうに向きながら尋ねた。

その人は、髪は腰まで届き、紺色のセーラー服を着ていた。身体は川の冷たい水ですぶぬれになっている。端正な顔立ちをした、見た目十五、六歳の少女だった。

その少女は、

「……なんとか、助かりました」

とつらそうに言った後、

その場に崩れ落ちるように倒れた。

「っ！！　だ、大丈夫ですか！！　返事をしてください！！」

彼は倒れた少女を揺さ振りながら声を上げた。

少女からの応答はない。

彼は少女の状態を確かめた。

唇は紫色に変色し、体は震えている。

体に触れると、人の肌とは思えないほどに冷たくなっていた。

「な、なんとかしないと」

彼は焦るように言った。

周りを見渡してみたが、誰も通りがかったりはしなかった。

彼は少女を見ながら固まっていた。

今、彼女を助けられるのは彼しかない。

しかし、彼は動かない。

山坂浩二の脳裏に、女の子に避けられてきた日々が浮かんだ。そのトラウマが彼の行動を妨げる。

「俺が女の子に触れて大丈夫なのか？」

彼は動かない。

「この人は俺に触れたりして、嫌じゃないのだろうか」

彼は動かない。

「でも、今この人を助けられるのは俺だけ」

少女の震えはひどくなっていく。

「何を立ち止まっているんだ」

彼は動かない。

「この人を助けられるのは俺だけだろうがあああああああ
！！！！」

彼は動き出した。

彼は少女を背負い、走り出した。

目指すは彼のアパート。

風呂つきのアパート。

「待っててください。すぐに暖かくしてあげますから、それまで我慢してください」

彼は少女に向かって言った。

少女からの返事は無い。

事態は一刻を争う。

彼は走った。

この出会いが彼の運命を大きく変えることになるとは知らずに。

第二章 奇跡的な再会（？）

山坂浩二は自分の住むアパートの部屋の前まで来ると、鍵を開け、ドアを勢いよく開けて部屋の中に飛び込んだ。

一人の少女を背負ったまま彼は靴を脱ぎ捨て、部屋のなかにあるドアを開けた。

彼は狭い脱衣所まで来ると、少女を背中から降ろした。

そして、彼は狭い風呂のある部屋に入り、ガスのスイッチを入れ、蛇口を限界までひねり、お湯を風呂桶に流し始めた。

風呂桶はかなり小さい。

体育座りをしてようやく入れるくらいだ。

彼はお湯を流しっぱなしにして、風呂場から出た。

「もしもし！？ 聞こえますか！？」

彼は脱衣所に横たわっている少女に話しかけた。

すると少女は閉じていた目をうつすらと開けた。

「……はい。聞こえます」

「今、お風呂にお湯を入れてますから、今すぐに入ってください！
！」

「……わかりました。ありがとうございます」

少女はそう言うと、震えながらも立ち上がった。

そして、そのまま風呂場へと向かう。

「あの！！ 服を着たままで入るんですか！？」

彼は困惑していた。

すると少女は振り返り、

「……大丈夫。何も持ってませんし、服もそこで洗わせてもらいますから」

と落ち着いた様子で言い、風呂場へと入っていった。

ボタン。

扉が閉まった。

山坂浩二は固まっていた。

自分は今何をすればいいのだろう。

お風呂上がりに必要なもの。

……拭くもの。

……タオルだ!!

彼は脱衣所から出て、狭い部屋に入った。

一応、リビングである。

彼は部屋の隅にあるタンスから一枚のタオルを取り出した。

「他になにか必要なものは……」

彼はしばらくタオルを一枚持ったまま固まっていた。

「……そうだ!服だ!服」

彼はタンスの別の引き出しから上下一組のジャージを取り出した。

彼が中学生の頃使っていたものである。

彼はタオル一枚とジャージを持って脱衣所に入った。

まだ、あの少女は風呂に入っているようだ。浴室で水が弾かれる音がひっきりなしに聞こえてくる。

彼は持ってきたものを床に置いてあるカゴに入れた。

「すいませーん。タオルと着替え、ここに置いておきますからねー」

彼がそう言うと、扉越しに少女の声が聞こえた。

「あ、はい。ありがとうございます」

彼はその声を聞くと、さっさと脱衣所から出ていった。

ボタン。

彼は脱衣所のドアを閉めた。

そしてそのまま床に座り込む。

彼はドアにもたれていた。

「はあー、いったいなんなんだよこの展開は」

彼は天井を見上げる。

「だいたい俺が女の子と話してる時点でおかしいんだよ」

彼はため息をついた。

「今まで女の子とろくに話なんかしたことなかったのに」

彼は床を見る。

「どうして今、俺が女の子と話したりできてるんだろっ」

彼はタンスを見る。

「もしかして俺にもモテ期がやって来たとか……」

ため息。

「……んなわけないだろ。馬鹿か俺は」

もう一度、ため息。

「こんな状況だからに決まってるだろ。どうせ風呂から上がったら知らん顔されるに決まってる」

彼は目を閉じる。

「でも、ほんの少しでも女の子と話すことができて、俺は嬉しい」

彼は下を向く。

「めったにない経験だよな」

彼は笑っているようにも見えた。

しばらくすると、脱衣所の扉が開いた。

山坂浩二は部屋の真ん中にあるコタツに脚を入れている。

彼は脱衣所へ目を向けた。

するとそこには、ジャージを着た少女が立っていた。

少女は彼に頭を下げ、

「ありがとうございます。助かりました」

と言った。

「い、いえ、そんな、感謝されるほどのことでは……………」

彼は顔の前で両手を振りながら言った。

緊張しているようだ。

少女は頭を上げた。

「いえ、本当に助かりました。もしあなたがいな……………」

少女は彼を見たまま固まってしまった。

「あ、あの、どうしたんですか？」

少女は返事をしない。

立ち尽くしたまま。

少しの沈黙の後、少女は口を開いた。

「……………浩二？」

「えっ!？」

彼は驚いた。

まだ名前も教えていないはずなのに。

初対面のはずなのに。

名前を呼ばれたのだから。

しかも下の名前で。

少女は彼に近寄り、彼の両肩に手を置いた。

「ねえ、あなた浩二でしょ」

と少女は言った。

「えっ、な、なんで俺の名前を……?」

「あなた、覚えてないの!? わたしよ、わたし!! 香子よ!」
きょうこ

「は?」

「だから、わたし! 月影香子だつてば!」
つきかげきょうこ

山坂浩二は戸惑った。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ!!」

彼は少女の手を肩から離し、

「と、とりあえず、そこに座ってください!!」

と、コタツを指差して言った。

「なにがあつたか知りませんが、とりあえず最初から最後まできちんと話してくれないと、僕も困るんですよ!!」

彼は初めて女の子に対して大きな声を出した。

「……………わかった」

少女は渋々立ち上がり、彼と向かい合うように座った。

コタツに脚を入れる。

「うわぁ、あつたかーい」

少女は気の抜けるような声で言った。

山坂浩二は何か言いたそうな様子だったが、何も言えずにいた。

少女はしばらくすると、姿勢を正し、口を開いた。

「あの子、浩二」

「……なんですか」

「本当に忘れちゃったの？」

「っ！！」

彼は言葉を発せずにいる。

「……どうしたの？」

少女は心配そうに言った。

すると彼は重い口を開いた。

「……時期によります」

「えっ！？ どういうこと？」

「だから、いつ、僕とあなたが知り合いだったのかが重要なんです」

「え、なんで？」

「……そういうものなんですよ」

二人の間に沈黙が訪れた。

やがて、少女が口を開いた。

「……………今から十年ほど前かな」

「……………そうですね」

彼の表情が曇る。

「じゃあ、覚えているわけじゃないじゃないですか」

「……………なんで？」

彼は少し間を置いた。

「……………僕は記憶喪失だからですよ。」

「えっ！？　いつから！？　いつからなの！？」

少女は平静を保てずにいた。

彼は彼女の質問に、いつもの調子で答えた。

「……………六歳からですよ。つまり、今から十年ほど前に、です」

「そんな……嘘でしょ」

少女は頭をかかえた。

「……本当なんですよ。気付いたら、遠い親戚だと名乗る人の家にいました」

少女は何も喋らない。

「記憶喪失の原因は自動車事故、両親は死んだと言われました」

少女は無言のままだった。

「でも、それが真実なのかということを、僕はずっと疑っていました」

彼はコタツの上に手をつき、

「あなたは何か知っているんですよね。十年前の僕について」

と言った。

少女はわずかに首を縦に振った。

「だったら」

彼は頭を下げた。

「十年前の僕とあなたの関係を、そして十年前に何があったのかを、知ってる限りでいいので教えてくれませんか？」

少女は黙って彼を見つめていた。

「お願いします」

彼は深く頭を下げた。

やがて、少女は口を開いた。

「わかった。話してあげるよ」

山坂浩二は顔を上げた。

「ただし」

少女は彼の目を見る。

「どんな内容であっても、絶対に信じると約束できるならね」

彼は少女を見つめた。

そして両目を閉じ、しばらくしてから両目を開けて言った。

「わかりました。約束します」

ほんの少しの沈黙の後、少女は口を開いた。

「わかった。話すよ。わたしと浩二について、十年前に起こったあの事件についてをね」

十年前。

『退魔村』と呼ばれるところに私と浩二は住んでいた。

そこで生まれた人は強い霊力を持つようになるの。

『退魔村』というのはあだ名みたいなもので、本当の村の名前は他にあったの。

で、『退魔村』という名前の由来は、村人全員が魔物を退治する能力を持つところからきているの。

普段は農業をしてたんだけどね。

で、基本的に私たちは男女二人組で戦うの。

なんでかって言うとね。

男と女じゃ霊力の種類が違うからなんだ。

女は霊力による身体能力の向上、空中浮遊、武器の精製。

男は靈力による魔物の浄化、遠距離攻撃。

あと、普通の人には見ることができない状態、つまり『不可視』の状態は男も女もなれるの。

でも、女だけじゃ浄化、つまり魔物を『本来あるべき場所』にかえすことはできないし、男だけじゃ魔物を浄化する前に魔物から身を守ることはできない。

だから、お互いの不足している点を補うために、男女二人組で戦うの。

それで、私と一緒に戦っていたのがあなた、浩二なのよ。

私たちは六歳を迎えると、男女でペアを決められ、戦うようになるの。

私はあなたと戦うことを決められたの。

最初、あなたと組むという話を聞いたとき、私は怖くなったのを覚えている。

だってあなたは『例外』だったから。

あなたは男でありながら女有能力も持っていた。

それだけじゃない。

あなたの霊力は普段はとても弱かったのだけれども、

満月の夜だけは、とても強くなったの。

魔物たちの力が大幅に高まる満月の夜に。

だから私は最初、あなたのことを魔物のような人だと思っていた。

でも、違っていた。

初めて出会ったとき、あなたは怯えている私に優しく話しかけてくれた。

あなたは魔物なんかじゃなかった。

普通の優しい人だった。

ある事情で村のみんなから虐げられていた私に優しくしてくれた。

あなたは私を受け入れてくれた。

だから私もあなたを受け入れた。

一緒に『退魔師』として生きていくことに決めた。

それから私たちは退魔師として活動した。

あなたの霊力は満月の夜以外は最弱だったけど、それでもあなた

は強くあろうとした。

戦い方がとても上手くて、霊力の強さは私のほうが断然上だったのに、いつも私を助けてくれた。

満月の夜はとても頼もしかった。

私たちはまだ五歳だったけど、退魔師として充実した日々を送っていた。

でも、それは突然終わりを迎えた。

私たちの退魔師になってから一年ぐらい経ったあの満月の夜、大量の悪霊が村に攻め込んできたの。

それで、大人たちはまだ成人を迎えていない子供たちを村の外に逃がした。

もちろん、私たちも逃がされた。

でも、あなたは、

「今日は満月だから、今日だけ僕は村で最強だから、僕は戦わないといけない」

と言って私から離れていってしまった。

私も一緒に行こうとしたんだけど、あなたに止められた。

正確に言つと、あなたは私を殴って気絶させたの。

「ごめん、香子。必ず戻るから」

とあなたは言つて村に戻ってしまった。

私はそこで意識を失った。

しばらくして、私は大きな音で目を覚ました。

でも、何の音なのかはわからなかった。

私はずっと浩二を待ち続けた。

でも、いつになつても帰つては来なかった。

私は遠い親戚と名乗る人物に引き取られた。

その人からは、突然の土砂崩れによつて、山の中腹にあつた私たちの村は壊滅したと聞かされた。

つまり、退魔村は滅んだんだと私は思った。

突然の土砂崩れなんかではなく、悪霊たちによって。

生き残った大人はいなかった。

逃がされた未成年者たちは再び集まって、退魔師として活動しているという噂が耳に入った。

でも、もしそれが本当だとしても、私はそこに加わりたいとは思わなかった。

私は嫌われ者だったから。

退魔村が滅んでから私はしばらくは平和に暮らせた。

でも、いつかは忘れたけど、魔物に襲われるようになった。

私は逃げ回った。

何度も死にそうになった。

今日だってそう。

空から叩き落とされたときは死ぬかと思った。

川に落ちたときはもうだめだと思った。

でも、助けてくれた人がいた。

それがあなただった。

「こんなところかな」

少女は話し終わるとほんのすこしだけ笑った。

一方、山坂浩二はというと、

「……………は？」

困惑していた。

退魔村？

退魔師？

魔物？

男女二人組？

悪霊？

村が壊滅？

俺とこの人がペア？

空から落ちてきた？

彼は固まっていた。

「どう？信じられないだろうけど、信じてくれる？」

少女はやや上目遣いになって言った。

その言葉に山坂浩二は一言。

「……………無理」

再び沈黙が訪れる。

少女は震えていた。

やがて、コタツの上をバン！！と両手で叩き、

「信じるって言ったでしょうがこのバカ！！」

と叫んだ。

この行為に、さすがの山坂浩二も堪えられなかった。

「コタツを叩かないでくださいよ！！ 壊れたらどうするんですか！！」

と叫び返した。

「うつさい！！ 浩二のくせに！！」

少女も叫び返す。

やはり、山坂浩二も叫び返す。

「だいたい、なんですか！！ その話は！！ 人を馬鹿にしてるんですか！！」

「馬鹿になんかしてないわよ！！ 本当なんだってば！！」

「こんな現実から遠ざかった話を信じるほうがおかしいんですよ！ 意味がわかりません！！」

「うるさい！！」

少女は叫んで立ち上がり、何かをコタツに突き刺さした。

よく見ると、それは日本刀のように見えた。

「っ！？」

山坂浩二は驚きのあまり固まってしまった。

少女は彼を見下ろして言う。

「……わかった？　これが事実。あなたが信じようが信じまいが、
事実は事実よ」

「じ、事実ってなんですか？」

彼の声は震えていた。

「私が退魔師であること」

そう言つと少女は何も持っていない手からもう一本、日本刀を出
現させた。

「いい？　この二本が私が退魔師であることの証明なの」

「……そう簡単に信じられますか」

彼は震える声で言い返す。

「……なにかのトリックに決まってるじゃないですか」

その言葉に少女はニヤリと笑い、

「じゃあ、これも何かのトリックなのかしら？」

と言い、突然姿を消した。

「嘘だ！　それも何かのトリックだ！！」

彼は震える声で必死に叫んだ。

すると、少女は姿を現し、

「さっきのは不可視の状態になったんだけど、信じてくれなかったのかな？」

と彼を見下ろして言った。

「……当たり前です」

彼は少女と目を合わせずに言った。

「……ただ」

「なによ？」

「あなたは退魔師で、魔物と戦ってるんですよね」

「それがなに？」

「魔物ってのは、幽霊もその部類に入りますか」

「入る」

少女は頭をかきながら言った。

「だったら」

「だったら？」

「僕にその話を信じさせたいのであれば」

「信じさせたいのであれば？」

「満月の夜、あなたが戦っている姿を見せてください」

「満月の……夜？」

少女は言葉に詰まった。

山坂浩二は少女と目を合わせ、

「僕は満月の夜だけ、幽霊が見えますから」
と言った。

「ふん、満月の夜ね」

と少女は言った。

「……やっぱり浩二だ」

彼女は呟いたが、その声は小さすぎて彼の耳には届かなかった。

少女は続ける。

「わかった。満月ってもうすぐよね」

「はい」

「じゃあ、見せてあげるわ。私の戦いを」

と胸を張って言った。

再び沈黙。

しばらくすると、山坂浩二が口を開いた。

「あの、話変えますけど、あなたが着ていた制服って、僕と同じ高たか原高校のですね？」

少女はその言葉を聞いて少しの間固まり、

「……………え？あんだ、私と同じ学校だったの？」

と、驚いたような顔をして言った。

その言葉に山坂浩二は、

「……………みたいですね。僕は一年ですけど、あなたは？」

「……………一年」

「何組ですか。僕は五組ですけど、あなたは？」

「……………一組」

再び沈黙。

ちなみに彼らの高校は一学年に七クラス。

一組から四組は文系。

五組から七組は理系。

文系か理系かは入学当初から決まっており、変更はできない。

「……つまり、私がずっと探していた浩二はすぐそこにいたってことなの？」

少女は天井を見ながら言った。

「……そうみたいですな」

山坂浩二は呟く。

すると、少女はなぜだか嬉しそうな表情になった。

そして、風呂場へ向かう。

しばらくすると、制服を持って出てきた。

「じゃあ、お風呂ありがとう。また明日ね」

と少女は言つて玄関へと向かう。

「あの、家は？」

山坂浩二が聞くと少女は振り返り、

「私も一人暮らしなの」

と言つて、彼に背を向け、彼の家から出て行つてしまった。

バタン。

部屋には山坂浩二ただ一人になつてしまった。

彼は月影香子と名乗る少女の話を思い返した。

（「十年前の自分は、あの人と一緒に魔物と戦っていた」ってか）

彼は天井を見る。

「俺が退魔師ねえ……」

ため息。

「……わけわかんねえ」

彼の独り言が部屋の中でむなしく響いた。

第二章 奇跡的な再会（？）（後書き）

月に一章のペースで投稿していきたいと思います。

いつまで続くかわかりませんが最後までお付き合いしてくださると嬉しいです。

物語はまだまだこれからです。

第三章 壊れ始めた日常

翌朝。

山坂浩二は午前六時に目を覚ました。

彼はコタツに脚を腰まで入れ、上半身には分厚い冬用の掛け布団をかけた状態で眠っていた。

彼は横になった状態のまま、充電器のプラグを挿した携帯電話を手に取り、それを開いて液晶画面を見た。

待受画面には赤い色をした『未来橋』と、その下を流れる『銅鏡川』の水面が映っている。

彼は画面右上に映し出されている日付と時刻を見た。

2月15日。6時01分。

彼は携帯電話を閉じ、上半身を起こし、周りを見渡した。

六畳半ほどの狭い部屋。

フローリングの床。

小さなテレビ。

彼の背丈の半分ほどの高さの冷蔵庫とタンス。

風呂場と洗面所に繋がるドア。

小さなガスコンロ。

トイレのドア。

コタツ。

いつもの光景が彼の目に映った。

彼は玄関に背中を向けて座っている。

彼の目の前には部屋の隅にテレビがあり、壁にはやや薄汚れたカーテンがある。そのカーテンの向こうには窓があるが、まだ外は暗いので朝日は差し込んでこない。

彼はそのカーテンを見ながら、昨日のことを思い出していた。

『月影香子』と名乗る少女との出会い。

六歳のある時から記憶喪失の彼が、彼女から聞いた、自分の過去のこと。

退魔師という、にわかには信じがたい存在。

記憶喪失以前の彼はその『退魔師』であつたという話。

さらに、月影香子と山坂浩二は退魔師としてペアを組んでいたという話。

彼女が自分が退魔師であることを彼に証明するために、二人は満月の夜に会う約束をしたこと。

山坂浩二は満月の夜だけ霊的存在である幽霊が見えるのである。

彼は昨夜のことを思い出すと、ため息をつき、

「あれって夢だよな」

と呟いた。

彼は一度目を閉じ、また開いて、

「うん、夢だ夢。現実なんかじゃない」

と自分に言い聞かせるように言った。

彼の表情は、そう言った時は明るかったが、次第に暗くなっていた。
った。

自然と視線も下に落ちる。

「じゃあ、あの人、月影さんも夢だったのかなあ」

と彼は呟いた。

「女の子と話したり、ケンカしたり、今度会う約束をしたりしたの

も夢だったんだ」

彼は目を閉じた。

「でも、女の子と、しかもあんなにかわいい人と接したということが夢であっても、俺は嬉しい」

彼の目から、一粒の水滴が流れ落ちた。

「現実じゃ、女の子と話すこと自体無理なんだから」

と彼は小さく、低い声で言った。

山坂浩二は記憶喪失後、理由は不明だが、異性から極端に避けられてきた。

周りの女性から話しかけられることはなく、育ての親である人でさえ、彼と長い時間接することはなかった。

彼は幼い頃、何度も女の子に話しかけようとしたが、いつも最初の一言で逃げられてしまっていた。

その最初の一言も、「おはよう」や「バイバイ」など、普通の挨拶だった。

彼は次第に異性に対して心を閉ざしていった。

だが、彼は中学生になると思春期を迎え、異性への関心も芽生え

てきた。

それでも、周りの女性は彼を避けるままだった。

彼には、なぜ自分が異性から避けられているのかはわからなかった。

避けている女性たちでさえも、その理由はわからなかった。

彼は異性への関心を捨て切れないうまま、再び心に深い傷を負ってしまった。

しばらくすると、彼は顔を上げて立ち上がり、洗面所へと向かった。

蛇口をひねり、水を流し、流れる水を両手ですくって顔を洗う。

四、五回ほど水を顔にかけると、彼は、

「冷た！」

と声を上げた。

「まあ、冬だからな」

彼は独り言を言い、横に掛けてあったタオルで顔を拭いた。

その後、洗面所に置いてあるプラスチック製の青色のコップに水

を注ぐ。

そして、三回うがいをした。

彼は再びコップに水を注ぎ、目の前にある歯ブラシを右手に取る。

その歯ブラシは毛先が開き始めていた。

彼はそれを使って舌についている汚れを磨き落としていく。

力はあまり入れていない。

彼は一通り汚れを落とし終わると、歯ブラシを水で洗い、コップに入っている水で口をゆすいだ。

彼は口をゆすぎ終わると、歯ブラシをもとの場所に立てかけて、コップも もとの場所に置いた。

そして再び水を流し、両手で水を溜めて、顔に一度水をかける。

また彼の「冷た!」という声が聞こえた。

彼は顔を同じタオルで拭くと、洗面所から部屋に戻り、冷蔵庫の前に立った。

冷蔵庫を開けて中のものを見る。

そして、彼は卵のパックを取り出した。

その七個の卵が残っている八個入りパックから彼は一つ卵を取った。

彼はパックを冷蔵庫に戻し、ドアを閉めた。

次に野菜室の引き出しを開け、そこから赤いリンゴを一つ取り出し、引き出しを閉めた。

彼は卵とリンゴを一つずつ持って、部屋の隅にある小さな流しの前に立つ。

そして立てかけてあったまな板を置き、その上に卵を置いて、包丁を手に持ち、リンゴの皮をむきはじめた。

慣れた手つきだった。

皮をむき終わると、次にまな板の上でリンゴを八等分に切った。

芯は生ごみ入れに捨てる。

すると彼は、

「いっけね。皿出し忘れてた」

と言って、まな板の上に包丁を置いて、彼の左側にある食器棚から、茶碗、皿を二枚、箸を取り出した。

彼はそれらをコタツの前まで持っていき、その上に茶碗と箸と皿一枚を置いた。

そして皿を一枚持ってまな板の前に立ち、切り分けたリンゴを皿に乗せると、それをコタツの上に置いた。

次に彼は流しの横のガスコンロの前に立った。

火をつける。

フライパンに油をひき、それを青く揺らめく火の上に置いた。

まな板の上の卵を手にとり、フライパンの上で割った。

フライパンの中で、黄身が白身に囲まれる。

彼はそれに少量の水を加え、フタをした。

彼はコタツの上に置いてある茶碗をとり、炊飯器のフタを開け、御飯を盛る。

それをコタツの上に置き、皿を一枚手に取る。

ガスコンロの前まで歩き、フライパンのフタを開ける。

すると、半熟の目玉焼きがパチパチと油を弾く音をたてていた。

彼はそれを皿に移し、火を消す。

フタを流しに置き、フライパンとまな板はそのままにする。

彼は皿を手を持ったまま冷蔵庫を開け、ケチャップの容器を取り出す。

冷蔵庫を閉め、彼はコタツに皿と容器を置いた。

そしてその場に座り、コタツに脚を入れる。

彼は顔の前で両手を合わせ、

「いただきます」

と言い、ケチャップを目玉焼きにかけ、それを一口で食べ終えた。

次に茶碗を左手に持ち、御飯を一気に口へと送る。

すぐに茶碗は空になってしまい、米粒一つ残っていなかった。

彼は箸を置き、コタツの上のリモコンを手にとって、テレビの電源を入れた。

爽やかな男性のアナウンサーが画面に映る。

彼は朝の情報番組を見ながらリンゴをかじる。

先ほどとは違い、ゆっくりと味わうように食べていく。

「はあ、世の中大変だなあ」

と彼はたまに呟いたりした。

しばらくすると、彼はリンゴを食べ終え、

「ごちそうさまでした」

と顔の前で手を合わせて言い、食器を持って立ち上がった。

それらを流しに置き、手を洗う。

石鹸をつけて。

指の間、爪の間を。

丁寧に、丁寧に。

洗う。

彼は手を洗い終わると、新しく一枚の皿を食器棚から取り出した。

それを手に持ったまま、炊飯器のフタを開け、中身をすべて皿に移す。

その皿をコタツの上に置いて、彼は米を拳一つ分の大きさで握っていく。

具はなにも入れない。

握り終わると、四つの握り飯が出来上がっていた。

彼は立ち上がって、流しで手を洗い、ラップの箱と、食塩の瓶を持ってコタツに戻る。

握り飯一つ一つに塩をふりかけ、ラップで包んでいく。

包み終わると、彼は皿と食塩の瓶を持って立ち上がり、流しの前

に立つ。

そして、食塩の瓶をもとの場所に戻し、食器を洗い始めた。

やはり手慣れている。

起きてからの彼の動作はまるで一連の流れのようだ。

彼は皿洗いを終えると、食器棚からプラスチック製の容器を取り出し、フタを開け、四つの握り飯を入れ、フタを閉める。

彼はそれをコタツの上に置き、トイレへと向かった。

彼は用を足し終えると、洗面所へと向かった。

石鹸をつけて手を洗い、タオルで拭いた後、歯を磨き、顔に水をかけた。

顔を拭くと彼は鏡に写る自分と向き合い、寝癖のついた髪の毛を整髪料は使わずに整えていく。

山坂浩二の髪は目と耳に少しかかる程度の長さで、ところどころが逆立っていた。

彼は髪の毛を整え終えると、鏡に写っている顔をじっと見つめ始めた。

そして、一言。

「そこまでブサイクでもないよな。俺って」

むしろいいほうである。

そして彼はため息混じりに、

「やっぱり顔じゃないのかなあ」

と言い、洗面所をあとにした。

彼は部屋に戻ると、コタツの上に置いてある、おにぎりを入れたプラスチック製の箱を手にとった。

そして、スポーツバッグにそれを入れる。

そのなかには、学校で使う教科書やノートなども入っている。

彼は運動部はおろか部活動にさえ入っていないのだから、「スポーツバッグはたくさん入るから便利」という理由でそれを使っている。

ただ、さすがに体操服は別の袋に入れるようだ。

彼はバッグのチャックを閉めると、部屋の電気を消していく。

電灯。テレビ。コタツ。

そしてガスの元栓を閉め、戸締まりの確認をし、バッグを肩にかけ、少し汚れたスニーカーを履いて玄関のドアを開けた。

そして、外から鍵をかけ、自分の部屋から遠ざかっていく。

彼の部屋はアパートの二階の一番奥に位置する。

アパートは築十年で、耐震性も十分保証されている。また、彼の住む地域は土地の価格が安いいため、家賃もそこそこ安い。

だが、彼の育ての親からの仕送りの半分はその家賃で消えてしまうので、彼には贅沢ができない。

ただ、必要最低限の暮らしはできているので、文句は言ったりしない。

むしろ、仕送りが届く度に、彼は育ての親に電話をかけて感謝の言葉を言っている。

彼は他人への感謝を忘れない人物なのだ。

彼が階段を下りると、銅鏡川とその河川敷にある広場が彼の目に映る。道路沿いに木が並び、広場には芝生が植えられている。

彼はその横を通り過ぎていく。

その途中、ウォーキング中の何人かの年配の方とすれ違った。

このとき、彼は挨拶を欠かさない。

彼の挨拶に年配の方も挨拶をかえす。

どうやら、年配の女性には避けられないらしい。

それが彼の疑問でもあった。

広場の近くにある時計の針は七時過ぎを指している。

ようやく明るくなった頃だ。

冬なので、ところどころに霜が落ちている草や葉が見える。

山坂浩二は白い息をはきながら、制服のズボンのポケットに両手を入れて歩いている。

マフラーはしていない。

彼の住む圭市^{けい}は温暖な地域であり、雪はめったに降らないが、冬は寒い。着込めば暑い。かといって脱げば寒い、といった、少々厄介な気候なのである。

彼は体を縮めながら歩いていく。

しばらくすると、赤い色をしたやや大きめの橋が見えてきた。

『未来橋』。

彼はその橋の近くまで歩くと、歩くのを止め、川の水面を眺めだした。

昨日、あの少女、『月影香子』が溺れていた場所。

彼はそこをしばらくの間見ていたが、首を横に振り、

「夢だ、夢。あれは現実じゃない」

と自分に言い聞かせるように呟いて、再び歩きはじめた。

未来橋からもう少し先に行き、そこから道を北に行くと国道に出る。

国道を横断し、さらに北に進んで十分ほどすると、学校が見えてきた。

彼、山坂浩二の通う学校、『高原高校』である。

県内公立高校のトップではあるが、私立高校が圧倒的に支持されているその県では影が薄い。

また、全国的に見ても、進学校と呼べるのかということさえ怪しいのである。

彼は校門を抜けると、建物の中に入っていく。

この学校は『土足禁止』ではなく『土足』なのである。

もちろん靴箱など無い。

彼は土足のまま入り、階段を上がり、二階の廊下を右に曲がった。すると、そこには一年五組の教室があった。

その先には、六組、七組の教室が並んでいる。

そして、彼の五メートル後ろからは一組から四組の教室が並んでいる。

彼は五組の教室の扉を開けた。

中には誰もいない。

時計を見ると、時刻は七時半だった。

彼は窓際の自分の席に着くと、机の上に教科書とノートを広げ、勉強を始めた。

これが彼、山坂浩二の『日常』。

退魔師などとは一切関係のない。

ただの高校一年生の男子としての。
日常。

八時を過ぎると、教室に入ってくる生徒の数も増えてきた。

彼は一度顔を上げ、教室を見渡す。

彼の隣に座るはずの女子生徒が、他の席に座って友達と話しており、また他の女子生徒も彼の近くの席には近づこうとはしない。

男子生徒は「なにもおかしいことはない」といった様子で、山坂浩二の近くの自分の席に座っている。

彼はため息をついて、再び視線を机の上に下ろした。

これもまた、彼の『日常』である。

やがて、朝のホームルームが始まる時間となり、教室内の生徒は全員自らの席についていく。

山坂浩二の隣の女子生徒も、渋々といった様子で席に着いた。

チャイムが鳴りはじめると、教室に駆け込んで席に着いた男子生徒のあとに、担任の教師が教室に入ってきた。

「おはよう。今日も一日頑張ろう!」

男性の低い声が教室に響いた。

なかばやしまさゆき
中林正之。

山坂浩二のクラスの担任である。

身長は一八〇センチを超え、筋肉質な身体の持ち主。

坊主頭で、見た目は恐いが、意外と穏やかで優しい。

ただ、怒ると相当恐いらしい。

担当教科は日本史。あと、柔道部の顧問でもある。

中林は出席を確認すると、連絡事項を伝えていく。

山坂浩二は連絡事項を頭に入れていく。

これもいつもの光景だった

授業が始まると、山坂浩二はたまに気を抜きながら、たまに外に目を向けたりしながら時間を過ごしていく。

女性の教師は彼を避けるようにしていたが、彼は気にも留めなかった。

これも、いつものことだったから。

やがて、午前中の授業が終わり、昼休みとなった。

山坂浩二はバッグの中から、プラスチック製のパックを取り出し、机の上に置いた。

（あの変態六人衆は、今日も食堂で、変な話題で盛り上がるんだろ
うな）

彼はそんなことを思いながら、パックのフタを開けた。

ラップに包まれたおにぎりを手に取るうとしたところで、

「おい！ 山坂。ここ、使ってもいいか」

という男の声が聞こえた。

山坂浩二が顔を上げると、そこには二人の男子生徒が立っていた。

永山と村田。

特徴といえば、くせ毛としか言いようのない二人だった。同じく
らしい身長で、横幅もほとんど同じ。顔も他人とは思えないほどそ
っくりだ。

「いいぜ。でも、いつものことだろうがよ」

山坂浩二は口元を緩ませて言った。

すると、二人は近くの机から椅子を山坂浩二の机のそばに持って
きた。そして山坂浩二の机に弁当箱を置いて座る。

山坂浩二はラップをはがし、おにぎりを頬張り始めた。

くせ毛の二人も、弁当箱を開け、箸を使って口に食べ物を運んでいく。

やがて、彼ら三人はたわいもない話を始めた。

最近読んで面白かったマンガや小説のこと。

授業のこと。

課題のこと。

いいなと思う女の子のことなど。

彼らは彼らなりに楽しく昼休みを過ごしていた。

これも、いつもの光景。

しかし、

その『日常』を壊す存在が、

一年五組の教室に近づいていた。

くせ毛の村田が山坂浩二に話を振った。

「山坂、お前ってさ、全くモテないよな」

これに永山も続く。

「いや、もはや『モテない』ってレベルじゃねえ」

そのように言われた山坂浩二は、

「確かにな」

とうなずくだけだった。

山坂浩二の『日常』を破壊する存在は、

廊下で足音をたてながら歩き、

やがて彼の教室の前に立った。

「嫌われすぎだよ。なんで山坂みたいな、顔も頭も運動神経も良く、性格のいいやつがあんなに避けられてるんだ？」

「でも、山坂に女が寄り付かないのは事実」

「男には評判いいのにな」

「理系クラス最大の謎だぜ」

山坂浩二は二人の話に、ただうなずくだけだった。

「まっ、山坂に彼女ができないのは俺らにとっては救いだかな」

「どっという意味だよ、それ」

山坂浩二はムツとした表情をした。

「まあ、そっぴライラするな、同志よ」

「うるせえ」

山坂浩二は永山と村田の話に呆れる。

二人は勝手に話を盛り上げていく。

「まあ、山坂に彼女ができたとしたら、天変地異が起きるだろうな」

「じゃあ、女が寄り付いてきたらあれか、日本が沈没するのか」

「アッハハハハハハハハハハハ！」

（こいつら、人のトラウマを何だと思ってやがる！）

山坂浩二のイライラは段々と増していく。

とうとう彼も限界を迎えたのか、立ち上がり、

「テムエらああああああああ！！」

と叫んだように、

教室後方のドアがゆっくりと開いた。

教室内の全員の視線がドアに向く。

そこには、背の高い一人の女子生徒がいた。身体の線は細く、ポニーテールにされた髪は腰にぎりぎり届くほどの長さだった。

「見たことないよな、あの子」

「文系クラスじゃないの？」

「一組の人じゃない？」

「そう言われると、見たことあるような気がするな」

と、教室中からささやき声が発生し出した。

永山と村田も、

「かわいいな、あの子」

「いったい何の用だ？」

とそれぞれの反応を示していた。

山坂浩二は立ったまま、その女子生徒を見ながら固まっていた。

声も出せないようだった。

「……あのー」

教室中の視線を浴びている女子生徒が口を開いた。

「……山坂浩二、いませんか？」

その言葉と同時に、教室内にざわめきが起こる。

「山坂だって!？」

「あんであいつに!？」

「おかしいわ!」

「山坂に近づくななんて無理よ！」

村田と永山は固まってしまった。

二人の手から箸が落ちる。

カラン。

その乾いた音と同時に、山坂浩二が震えながら声を出した。

「……月影さん？」

そして、今度は教室中の視線が一気に山坂浩二へと向けられる。

ある者は驚きとともに。

ある者は虚無感とともに。

そして、

ある者は殺意とともに。

山坂浩二は視線の集中放火を浴び、そしてついに耐えられなくなった。弁当をそのままにして、彼は急に席を立て机と机の間をかくぐり、教壇を駆けて教室前方のドアから飛び出して行った。

教室内の生徒は固まっ たまま。

教室の外では、

「待つて浩二！ どこ行くの！？ ねえ！ 待つてっばー！！」

という声と大きな足音が聞こえる。

教室は再び騒がしくなった。

会話内容は、山坂浩二とあの女子生徒について。

ただ、教室内の生徒、特に男子生徒のなかには、

「……………山坂許すまじ」

と殺意を込めて呟く者もいた。

教室内はただならぬ雰囲気をただよわせていた。

後に食堂から帰ってきた生徒たちを驚かせるほどに。

そして、『彼ら』を動かすほどに。

第三章 壊れ始めた日常（後書き）

今回はファンタジー要素がほとんどありませんでしたが、これも演出の一つと思って、暖かい目で見てくださると嬉しいです。

後の展開にご期待ください。

第四章 山坂・月影騒動

一年五組の教室。教卓周辺。

そこには、山坂浩二に殺意を抱く男たちが三十人ほど集まっていた。

理系三クラスの男子のほぼ半数である。

なにやら話し合いをしているようだ。

このようになった原因は、ある一人の女子生徒が山坂浩二を訪ねてきたことにあつた。

彼ら、モテない組の男たちにとって、山坂浩二という存在は救いだった。

山坂浩二は彼女ができて何の不思議もない人物なのだが、何度も言う通りに、彼には女性に避けられるという特性がある。

それゆえ、彼らは山坂浩二に絶対の信頼を置いていた。

『山坂浩二に彼女ができないのなら、自分たちにはできなくても不思議ではない』という思い。

すなわち安心感。

『山坂浩二には彼女が一生できないだろうが、自分たちにはできるかもしれない』という思い。

すなわち優越感。

『山坂浩二も自分たちと同じ、モテない組の一員である』という思い。

すなわち連帯感。

これらが今日、すべて崩れてしまった。

女の子にモテない彼らを支えるものが。

彼らにとって、今の山坂浩二は敵でしかない。

そんな思いが彼ら、モテない組を行動に移させる。

やがて、リーダー格と思われるくせ毛の男子生徒が口を開いた。

「さあ、みんな。行こう」

その言葉を聞き、男子生徒たちは教室からゆっくりと出ていく。

「作戦通りに行くぞ」

リーダー格の男子生徒は先頭を歩きながら言った。

「……裏切り者には死の制裁を」

その言葉と同時に、彼らは走り出した。

標的は山坂浩二。

ただ一人。

「待つて、浩二！　なんで逃げてんのよー！」

彼女に背を向けて走っている山坂浩二に向けて、月影香子もまた、走りながら叫ぶように尋ねた。

しかし、山坂浩二は振り返りもしなければ返事もしない。

ただ、ひたすら走るだけ。

「ああ、もうなんなのよ！？　いったい何から逃げてんのよ！？　もしかしてあたしから！？」

彼女は山坂浩二に向けて叫んだ。

「違います！　あなたじゃありません！　誤解しないでください！」
山坂浩二は月影香子に背を向けたまま叫んだ。

「じゃあ誰からよ！？」

「変態です！」

「……は？」

彼女はその場に立ち止まってしまふ。

「……変態ってなによ。変態って誰のことよ」

彼女は山坂浩二の背中を眺めながら少しの間考え、

「もしかして私のこと！？ 許さないわよ浩二！」

と怒鳴って再び走り出した。

「違いますって！」

彼は叫んだ。

ただ、彼は殺意に駆られた『変態たち』から逃げているだけでなく、『月影香子』からも逃げていた。

彼女の存在。つまりそれは昨日の出来事が現実であることの証明であつた。

（くそっ！ あれは夢じゃなかったのかよ！ なんているんだよ！）

彼は心の中で叫びながら走った。

非日常から逃げるように。

やがて、彼は階段へと差し掛かった。

上は上級生の教室。

下は職員室や校長室がある一階。

山坂浩二はどちらに行くかで迷ってしまつた。

どちらも行きにくい。

その迷いが、彼の脚を止めてしまつた。

その直後、彼は右肩に人の手が置かれたような感覚を覚えた。

おそろおそろ後ろを振り向く。

「捕まえたわよ。山坂浩二」

そこには彼の肩を掴んでニヤリと笑う月影香子がいた。

「ひっ!!」

彼は思わず悲鳴をあげてしまつた。

（な、なんでこの人は平気で俺に触れるんだ!?!）

彼は心の中でも驚きの声を上げる。

「なんで、私から逃げるのよ……浩二」

月影香子は笑った表情のまま、彼の肩を握る手に力を入れていく。

（痛い！ 痛い！ な、なんなんだよこの馬鹿力は！？）

彼は心の中で叫びながら彼女から顔を背ける。

「……そ、それは、その……。……げっ！」

「……なによ」

月影香子は力をさらに加えていく。

だが、山坂浩二は何も答えない。

それどころか、他のなにかに呆気にとられているようにも見えない。

「あ、……あ」

彼の声は震えていた。

何かを見ながら。

月影香子是不審に思い、山坂浩二の目線の先に目を向けた。

するとそこには、

階段をゆっくりと下ってくる、耳が隠れるほど長い髪の男子生徒。

階段をゆつくりと上ってくる、スポーツ刈りの髪型の男子生徒。

その二人がいた。

「くそ、陸上部の二人に先回りされていたか」

山坂浩二は「チツ」と舌打ちをする。

月影香子は彼がなぜ動揺しているのかわからないでいた。

ゆつくりと階段を下ってくる長髪の男子生徒は階段を山坂浩二を見下しながら、

「やまさかくくん？ どうしてこんな所で女の子とイチャついたりしてるのかなあ？」

と笑顔を浮かべて言った。

「ちつ、違う！ 誤解だ！ イチャついてなんかない！」

彼は必死に反抗した。

しかし、階段をゆつくりと上ってくる短髪の男子生徒は彼を見上げながら、

「じゃあ、その右肩に置かれている手はなんなのかなあ？」

と微笑みを浮かべて言った。

山坂浩二はその言葉を聞いて、すぐさま月影香子の手を振りほどこうと自分自身の右肩に左手を向ける。

彼の手は月影香子の手に触れた。

しかし、びくもしない。

逆に掴んだ手を振りほどかれてしまう。

彼は少しの寂しさとともに大きな安堵を覚える。

（これであの変態どもから命を狙われずに済……）

が、その安堵も一瞬にして終わる。

振りほどかれたはずの彼の手が何かに掴まれてしまう。

そして、彼の体はくるりと半回転した。

山坂浩二は月影香子と向き合う形になってしまった。

月影香子は彼の左手を自分の左手で握り、ほんの少し頬を朱く染めている。

山坂浩二の思考は一瞬停止した。

（……………えっ、どっ、どっということ？　なんか、ちっちゃくて柔らかくて暖かくて……………）

彼は思考停止した頭を必死で働かそうとした。

そして、ある程度の思考能力が戻り、彼は今までに感じたことのない感触のする自らの左手に目を向けた。

（えっ！？ えっ！？ うそ！？ 女の子と手え繋いじゃってる！？）

この『女の子と手を繋ぐ』という行為は、彼の記憶にあるうちでは初めての経験であった。

彼が強い憧れを持っていたこの行為。

それが、不意に実現してしまった。

本来、これは彼が喜ぶであろう状況なのだが、今の彼には喜びなどない。

ただ驚きだけ。

女の子と触れ合うことなど絶対に不可能であった自分が、女の子と手を握りあっていることへの驚き。

彼は呆気にとられ、口を半開きにしたまま、視線を上げる。

月影香子と目が合う。

彼女は山坂浩二と目が合うと、頬を朱く染めたまま満面の笑みを浮かべた。

「……こうやって手繋ぐの、十年ぶりだね。浩二」

彼女の顔は、普通の女の子にしか見えなかった。

ずっと同じ人を一途に想い続ける少女の顔そのものだっただ。

山坂浩二も彼女の笑顔を見て、顔を真っ赤にしていた。

うまく彼女と目を合わせられずに、顔をうつむけてしまう。

しかし、彼はもう一度顔を上げた。

彼女に何かを言うために。

顔を上げ、再び彼女と目を合わせた彼は口を開こうとした。

突然こみあがってきた何かを。

何かを。

確かに言おうとした。

しかし、月影香子の後ろに人影があるのを彼は見てしまった。

開きかけた口が閉じる。

彼が見たのは、自分の命を狙うクラスメイト。

ただし、一人ではない。

三十人ほどの男子生徒がそこにいた。

理系クラスの男子生徒たち。

その先頭には、リーダー格と思われるくせ毛の男子生徒。

山坂浩二はその人物の言葉を思い出す。

- 「理系は三クラスで一つ。その結束は絶対的」 -

ということはつまり、山坂浩二が絶対に異性と関わることができないことも、理系クラス内ではすでに知られているということの意味する。

他クラスのモテない組の男子生徒たちも山坂浩二になんらかの感情を抱いていたに違いない。

そして今日、裏切られた。

彼らの怒りは簡単には収まらない。

山坂浩二に制裁を下さない限りは。

だから、彼らは団結した。

同じ思いを持つ者同士。

協力しよう。

「さてさて、山坂。何の時間かわかるかなあ？」

リーダー格の男子生徒が山坂浩二に向かって歩きながら尋ねた。

やはり、怒りを笑顔で隠しながら。

山坂浩二は震えあがった。

（まずい！ 逃げないとマジで殺される！）

彼は逃げ道を見つけようと、この学校の構造を頭の中に思い浮かべる。

現在位置が、一組の教室を少し通り過ぎたところにある階段の踊り場。

同様に、七組の教室を少し通り過ぎたところにも階段がある。また、四組と五組の教室の間にも階段がある。

彼が今いるのは四階建ての本館の二階。

一階が職員室、二階が一年生の教室、三階が二年生の教室、四階

が三年生の教室。

また、この学校には特別教室のある四階建ての別館があり、本館と各階に渡り廊下がある。

山坂浩二はここまで思い出すと、握る力が弱くなっていた月影香子の手を振りほどき、走り出した。

（そうだ！ この階段を左に、というより左にしか行けないけど、行けば、渡り廊下があるはず！）

彼はかすかな希望を胸に走る。

やがて、渡り廊下に足を踏み入れた。

しかし、その瞬間。

彼の希望は崩れ落ちる。

彼が見たのは渡り廊下の中央で立っている一人の男子生徒。

平均的な身長で、ツンツン頭の、変態六人衆の一人。

その男は頭をかきながら、あごを少し上に突き出し、山坂浩二を嘲るような目つきで睨む。

「計算通りってか。まったく、テメエなんか女とイチャつきやがって」

ツンツン頭の少年は目を閉じてため息をついた。

「こっちは四ヶ月前に『あいつ』と別れたつてのによ」

山坂浩二は幅五メートルの渡り廊下に立ち塞がる男に尋ねる。

「『あいつ』って誰？」

すると、その男子生徒はまたため息をついて、

「お前の知らねえ奴だよ。だいたいこの学校にはいないし、それに一つ年下なんだぞ。聞いても無駄だ、ムダ」

と頭を掻きむしりながら答えた。

「とにかく、お前が女とイチャつくってことだけでイラつくんだよ」

「なんだよそれ！ 理不尽なだけじゃねえかよ！」

山坂浩二は苛立った様子で、ツンツン頭の男子生徒の言葉に反論した。

「理不尽？ なにが？ お前自分で言つてたよなあ？」

ツンツン頭の少年は鋭い目つきで山坂浩二を睨みつける。

「『俺には彼女なんか絶対にできない。でも、お前らにはいつか絶対彼女ができる。俺が幸せになれる分、お前らが幸せになつてくれ』ってなあ！！」

彼の声は渡り廊下に響き渡った。

あまりの気迫に山坂浩二は言葉を発することができなくなってしまった。

なんて言い返せばいいんだろう。

彼は悩みながら辺りをキョロキョロと見渡した。

渡り廊下の両端には、彼の肩ほどまでの高さのフェンス。

上には天井。

ちなみに、この上にも、また下にも渡り廊下がある。

(……どうすりゃいいんだ)

彼は悩み続ける。

ツンツン頭の男子生徒は山坂浩二に近づきながら口を開いた。

「お前のあの言葉には理系男子の約半数、いやそれ以上がが涙したに違いない」

彼は両手をズボンのポケットに入れたまま、首を左右に傾けた。

コキッ、コキッ、と音が鳴る。

「みんな、こう思ったぜ？」

彼は深く息を吸う。

「お前の分までしっかりと幸せになってやるよ」と

山坂浩二は思わず、後ずさりをする。

彼の頭には「怖い」の二文字しかなかった。

彼が三步後ろへ下がると、彼の後ろから足音が聞こえた。

彼は振り向いた。

すると、そこにはキョトンとした表情をしている月影香子の姿があった。

「何してんの、浩二？」

彼女は首をかしげる。

山坂浩二は彼女を見て思った。

この人は今、自分にとっての唯一の味方であると。

その思いが彼に口を開かせる。

「……………たすけて」

彼は震える声で言った。

「えっ、いまなんて言ったの？」

月影香子は彼に聞きかえす。

「……………たすけてください」

彼の声は震えていた。

「……………あの変態たちに殺される」

月影香子は目の前に立つ彼の言葉に対して、

「情けないなあ」

と呆れたような表情で言った。

彼自身もそう思った。

なんて情けないんだろう。

昨日知り合ったばかりの女の子に助けを求めるなんて。

なんて情けないんだろう。

彼は崩れるようにその場に腰をついてしまった。

（ああ、情けない）

彼はまた心の中で呟いた。

そんな彼を見た月影香子は呆れるというよりはむしろ微笑んで、

「仕方ないなあ。まっ、せつかくの浩二からの頼みなんだし、断る理由もないからね」

と嬉しそうに言った。

そして彼女は後ろに振り向いた。

腰まで届くほど長い髪が彼女の動作とともに揺れる。

彼女から少し離れたところには十五人ほどの男子生徒が山坂浩二に対する殺意のこもった目を光らせて立っていた。

（あれ？ さっきの半分しかないじゃない……………まさか）

月影香子はツンツン頭の少年のほうへと体を向けた。

彼の後ろには、先程彼女の後ろにいたと思われる男子生徒が十五人ほど立っていた。

やはり、殺意のこもった目で山坂浩二を睨みながら。

ツンツン頭の少年は頭をかきながら、

「山坂浩二。お前が先に幸せになってどうするんだよ」

と、とてつもなく恨みを孕んだ声で言った。

さらに、月影香子の後ろから、

「さて、作戦通りいったわけだし、処刑、開始しようかねえ」

と、おそらくリーダー格の男子生徒と思われるものの声がした。

そして、

その言葉と同時に、

男子生徒三十人が山坂浩二に向けてゆっくりと歩き出した。

獲物を追い詰めた肉食獣のように、

ゆっくりと。

山坂浩二は震え上がった。

（まずい！ こいつら本当に俺を殺す気だ！）

そして、彼は床に腰をつけたまま月影香子を見上げて、

「すみません！ さっきのは前言撤回！ たった一人であの人数を相手にするのは無理です！」

と叫んだ。

月影香子は何も言わず、ただ彼を見るだけ。

「それに、あの変態六人衆は今年のスポーツテストで全員A判定だったんですよ！ 他にも運動能力の高いやつらはいっぱいます！」

山坂浩二は月影香子に向けて叫んだ。

しかし彼女は首を左右に振って、

「それがなによ。私だってA判定よ。しかも満点。男子の基準でもA判定いけるみたいよ」

と笑みを浮かべて言った。

ちなみに、彼らの言うスポーツテストとは、毎年五月に行われる学校行事であり、国が決めた基準に従って行われている。

測定するのは、五十メートル走、立ち幅跳び、ハンドボール投げ、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈の八種目。

各種目十点満点で、全種目で八十点満点である。

全種目の得点からA、B、C、D、Eの五段階で判定される。

最高の『A』をとるには八十点満点中六十五点以上でなければならない。

また、持久走は男子が1500メートル、女子が1000メートルであり、持久走の代わりに「20メートルシャトルラン」というものを行うこともできる。

ただ、それはいろいろと面倒なのでこの学校では行わないことになっている。

ちなみに言うまでもないが、『C』が標準レベルである。

「えっ、満点？ 男子の基準でも『A』？」

山坂浩二は口を半開きにしたまま困惑していた。

月影香子は床に腰をついて啞然としている彼を見ながら、

「なに驚いてんのよ。それぐらい私たちにとっては普通よ」

と言い、さらにほんの少し目を細め、

「そっいうあんたはなんなのよ」

と尋ねた。

すると、彼は月影香子からほんの少し目をそらして、

「恥ずかしながら、……『C』です。普通です」

とやや声を小さくして言った。

それを聞いた月影香子は腰に両手を置いて“ふう〜”とため息をついた。

「まっ、浩二らしいっちゃ浩二らしいわね」

彼女は片目を閉じ、

「立ちなさいよ、ほら。そんな格好じや的になるだけよ」

と優しく言っ、山坂浩二に右手を差し出した。

「えっ？」

彼は月影香子が差し出した手から、のけぞるように少し離れた。

「なにやってんのよ。早くつかまりなさいよ」

月影香子はややイライラした様子で言う。

彼女は差し出していた手を突き出した。

（まずい、逆らったら殺されそうな気がする。でも、従ったら従ったで変態どもに殺される）

彼は戸惑った。

（ええい！ もうどうにでもなれ！）

彼は心の中で叫び、月影香子が差し出している右手を勢いよく掴んだ。

彼女と同様に、右手で。

その瞬間、彼の腕がとてつもない力で引っ張られ、それにつられて彼の体も重力に逆らう。

気づけばもう、彼は二本の脚で立っていた。

二人の腕は繋がれたまま。

再び向かい合う。

山坂浩二は月影香子と目を合わせた。

しかし、その瞬間。

彼は突然の頭痛に襲われ、左手で頭を押さえた。

（……なんだ！？ この感じは！？ どこか、遠い昔に見たことのあるような……。デジャヴか？ でも、なにか違う気がする）

苦しそくに顔を歪める山坂浩二を見た月影香子は、不安げな表情になって彼の顔を覗き込んだ。

「ど、どうしたの!? 浩二!？」

彼女にしては珍しく取り乱していた。

山坂浩二は頭を押さえたまま無理矢理表情をもとに戻し、

「……だ、だいじょうぶです。……なんでも、ありませんよ」

と言い、彼女より後ろのほうを睨みながら、

「……それより、あいつらをどうにかしないと」

と言った。

「そうね、はやいとこ片付けておこうかしらね」

月影香子は彼から手を離し、その手を彼の頭に伸ばす。

彼女の手が彼の頭に触れた。

月影香子は山坂浩二の頭を撫でながら、

「あんたは休んでなさい。あいつらなんか私の敵じゃないわ」

と微笑を浮かべて言った。

そうしている間に、三十人の男子生徒たちは山坂浩二から二メートル離れたところに来ていた。

彼らはそこで、山坂浩二を半円状に囲むようにして立ち止まる。

そして、リーダー格の男子生徒が口を開く。

「山坂浩二。俺たちを裏切った罪、死をもつて償え」

その言葉と同時に三十人の男子生徒が一斉に、

山坂浩二に襲い掛かった。

「はあ、バカなんじゃないの？ あんたたち」

月影香子は振り向くと同時にしゃがみ込みながら回し蹴りを繰り返した。

彼女の脚は男子生徒たちの脚を薙ぎ払っていき、前方にいた男子生徒は全員床に腰をついてしまった。

その数およそ十人。

月影香子はすぐに立ち上がり、床に腰をついた男子生徒たちを飛び越え、後方にいた男たちを一撃で沈めていく。

ある者には拳で。ある者には蹴りで。

彼女の動きには無駄がなかった。

繊細で、

優美で、

そしてなにより強い。

ケンカ慣れしているなどという程度ではなく、

まさに、いくつもの修羅場をくぐり抜けてきた者のようだった。

彼女の突然の攻撃に、男子生徒たちはうまく対応することができない。

殴ろうとしても避けられ、カウンターを喰らい倒れていく。

後方の彼らは誰一人として彼女にダメージを与えることなく、床に倒れてしまう。

彼女は続けて、先程床に転ばせた男子生徒のほうに体を向けた。

彼らは山坂浩二に襲い掛かるために起き上がるうとしていた。しかし、彼女はすぐさま彼らのもとに走り、一人一人の頭に拳や脚で打撃を与えていく。

一瞬のうちにして、彼らは床に倒れ、渡り廊下には月影香子と山坂浩二の二人だけが立っていた。

「食後だからお腹だけは勘弁してあげたわよ、感謝しなさい」

彼女は倒れている男子生徒たちに向けて言い放った。

彼らからの返事はない。

月影香子は山坂浩二に顔を向け、誇らしげな表情をして、

「どう？　これが私の実力よ。こいつらなんて相手にもならないわね」

と言った。

一方、山坂浩二はというと、頭痛はおさまってはいたものの、彼女を見たまま震えていた。

「なによ？　霊力なんて使っていないからね。これが私の普段の実力よ」

彼女は両手を腰に当てながら、ほんの少し目を細めて言った。

（霊力？　そんなの関係ねえよ！　男三十人を一瞬で倒したことはかわらないだろうがよ！　俺でも一人倒せるかどうかもわからないよ）

山坂浩二は口に出すことができず、心の中で叫んだ。

フェンスに背中をもたれて立っていた彼は、さらに強くもたれた。

月影香子はため息をついた後、ほんの少し笑いながら、

「怪我はない？」

と彼に尋ねた。

「あ、えーと、一応ないみたいです」

「そう、ならよかったわ」

彼女はそう言っつて山坂浩二から目線を外し、渡り廊下から見える景色をどこか遠い目で見つめ始めた。

山坂浩二はそんな彼女を、「いったい何を考えているんだろう？」
と思いながら見る。

彼の体は少し震えていた。

彼は月影香子に対して恐れを抱きながらも、心のどこかでは興味が沸いてきているのを感じる。

自分とほとんど同じくらいの身長、すらりとした肢体、すれ違った男性の十人中九人が思わず振り返ってしまいそうなほど綺麗な顔立ち。

見た目はもちろんのこと、彼が彼女に対して興味を持つ最大の理由はなんと言っつても、山坂浩二に対する態度である。

どう考えても彼には『異常』であると思えなかった。

今まで女の子に近寄られもしなかった自分に積極的に接触して
ることが、山坂浩二にとっては異常でしかなかった。

だから、山坂浩二は月影香子に『興味』を持った。

彼は彼女を見つめ続ける。

(……きれいだ)

彼は思わず心の中で呟く。

月影香子は相変わらず外の景色を見つめ続け、山坂浩二は彼女を
見続けていた。

やがて、風が吹く。

とても冷たく、それでいてどこか優しさを感じさせるような風が。

「痛てえな、おい、不意打ちとはやってくれるじゃねえかよ、ああ
!?!」

その声のした方向に二人は一斉に振り向く。

すると、そこには、ふらふらになりながらも立ち上がる六人の男子生徒の姿があつた。

右から見て、短髪。長髪メガネ。くせ毛。ツンツン頭。オールバックメガネ。長髪。

彼ら六人の姿を見た途端、山坂浩二は震え上がり、彼の口から震え声が漏れる。

「……へ、変態六人衆」

その言葉に六人は、

「おいおい、山坂。今さっき俺たちのことを漢字の『変態』で呼んだら？」

「違うよなあ、漢字じゃなくてカタカナの『ヘンタイ』で呼んでもらわないと」

「性的嗜好が特殊な人じゃないんだから」

「ノーマル。いたって普通」

「ただ、昼休みに食堂で変な話をしてるからそう呼ばれているだけなんだぜ」

「あだ名みたいなもの。俺たちも意外と気に入っている」

と言った。

月影香子は山坂浩二に顔を向け、

「ねえ、浩二。ヘンタイ六人衆ってあいつらのこと？」

と尋ねた。

「……そうです、あいつらです」

彼ははまだ震える声で答えた。

「ふうん。でも、あの人たちどこかで見たことあるんだよね……」

月影香子は少しの間あごに手を当てて考えた。

そしてひらめく。

「あ、あの人たち、食堂でいつも変な話をしている人たちだ」

彼女は独り言のように呟いた。

すると、その言葉に六人全員が反応した。

「俺たちを知ってくれているなんて嬉しいね」

オールバックメガネは嬉しそうな顔をして言った。

「だって、私いつも食堂でお昼ご飯食べてるから。それに、席もあんたたちと近いみたいだし。たまにあんたたちの話聞いたりしてるけど、結構面白いと思うよ」

月影香子は長い髪を風で揺らしながら言った。

「なんだって！？　こんなに可愛い女の子がそばにいたなんて！」

「妄想話に夢中になりすぎて気がつかなかった！」

「不覚！」

「「チキシヨーー！！」」

六人は全員悔しがっていた。

「……ただ」

ツンツン頭が口を開く。

「なによ？」

月影香子はどこか不満そうな声で尋ねた。

すると、ツンツン頭は彼女を睨みつけた。

「山坂浩二は今や俺達の敵。ならば、それに味方するものも敵」

彼の言葉に他の五人も続く。

「ということとは、あなたも敵」

「いかにあなたがお美しいといっても」

「山坂浩二に味方するのなら事情は別」

「処刑されるべきなんですよ。山坂浩二と同様に」

「というわけで覚悟してください」

彼ら六人は身構え、口を揃えて言った。

「くたばれ月影!!」

その叫びとともに。

彼らは月影香子に襲い掛かった。

「あんたたちねえ、少しは学習しなさいよ」

彼女は襲い掛かる六人の動きを見極め、一番近くにいたメガネ男の頭部に蹴りを入れた……はずだった。

さっきの彼らならば、一撃で気絶するほどの威力を秘めていた。

だが、メガネ男は片腕で彼女の蹴りを受け止めていたのだった。

「……………え？」

月影香子は予想外の出来事に目を丸くさせていた。

彼女にわずかな隙ができる。

そして、残りの五人が彼女に攻撃を仕掛ける。

しかし、彼女は二回バク転をして彼らから遠ざかる。

五人の攻撃は空を切る。

月影香子の表情から先程までの余裕が完全に消え去っていた。

「あんたたち、意外とやるわね。私、少し油断してた。」

六人は彼女にゆっくりと近づく。

その内の一人、ツンツン頭の男子生徒は強気な表情を見せ、

「あんまり俺達をナメてもらっちゃ困るなあ。真のヘンタイはケンカも強いんだぜ」

と言った。

「関係ないでしょ、それ」

月影香子は呟く。

そして、彼らは睨み合う。

倒れている男子生徒から遠ざかった位置で。

山坂浩二を完全に無視して。

「なんか、俺、脇役より酷くなってないか？」

そんな彼の呟きも、彼らには聞こえないし、何よりそれは気のせいです。

主人公はあなたですよ、山坂浩二さん。決してヘンタイ六人衆ではありませんのでご安心ください。

山坂浩二を無視して熱くなっている彼らはお互いの様子をつかがい合う。

下手に動けば隙が生まれるからだ。

ある程度の時間がすぎたとき、長髪が動き出した。

それと同時に月影香子も動き出す。

両者激突。

この時点では彼女が圧倒的に優勢である。

そして、また一人、また一人と戦いに加わっていき、最終的には一対六の戦いになった。

それでやっとのこと、均衡のとれた戦いとなった。

「ふっ、やるわねあんたたち！ 見直したわ！」

「あなたこそ、戦う姿が美しい」

「揺れるポニーテールが最高だぜ！」

「スカート丈がまさかの膝下五センチ」

「校則をしっかりと守られておられます！」

「背は高いけど、胸は小さい」

「でも、また、そこがいい！」

彼らの表情は楽しそうにも見える。

「うるさいわね！ まだ成長期よ！ これから大きくなるのよ！」

月影香子は少しムキになる。

「胸が小さいのを気にする女の子」

「まさしく『萌え』！」

「ちなみに身長は一六八センチとお見受けする！」

「っ！ 当たりよ！」

「ちなみに山坂浩二の身長は一七一センチ」

彼らは戦いながらも本当に楽しそうな顔をしていた。

「なんでわかるのよ!？」

「俺たちを誰だと思ってる！」

「やろうと思えばスリーサイズだってわかるぜ！」

「プラスマイナス五センチの誤差はあるがな！」

「何言ってるのよ！ 五センチって結構重要よ！」

月影香子は六人による蹴りやパンチを避けながら叫んだ。

「ちなみにあなたのスリーサイズは、上からな……ぐはああ！」

くせ毛の男子生徒が何かとても大切なことを言いかけたが、月影香子の拳による強烈な一撃を受けて吹っ飛び、背中をフェンスに激突させ、そのまま動かなくなった。

それを見た残りの五人は攻撃を止め、後ずさりして彼女から遠ざかった。

月影香子は彼らに攻撃を浴びせようとはせず、ただそこに立っていた。

彼女は引き攣った笑みをつくる。

「それ以上言うとは本気であんたたちを殴るわよ。あのくせ毛の野郎のようになりたいの？」

彼女の静かな声で発せられた言葉に五人は一斉に首を横に振る。

彼らの表情からは『怯え』のみが感じられる。

月影香子は一度ため息をつき、

「私、自分の身体にけっこうなコンプレックスがあるのよ。……あんたたち、ひどい」

と言つて、目を潤ませ始めた。

五人は一斉に顔の前で片手を左右に振りながら、

「いえいえ、そ、そんなことはありませんよ！」

「そうです！ あなたはとても魅力的です！」

「大きければいつてもんじゃないですよ！」

「「そうですよ！」」

と、月影香子を必死で慰めようとした。

彼女は彼らの言葉を聞いた後、右手の指で目を拭う。

「ありがとう、あんたたち。でも、その言葉、できるなら浩二から聞きたかった。」

笑顔で言つた彼女の言葉に、五人は後ろにいるであろう山坂浩二のほうへと体を向ける。

突然、一斉に視線を向けられた彼は右手の人差し指で彼自身の鼻を指し、

「えっ、なに？」

と困った様子になった。

五人は何も言わず、ただじーっと山坂浩二を見続けていた。

そして、五人の後ろにいる月影香子は一度大きなため息をつき、

「それに、浩二ったらヒドイのよ」

と言って、腰に両手を当てて小さなため息をついた。

五人は彼女に半身を向ける。

月影香子は続ける。

「俺はずっとそばにいるって私に言ったくせに、十年前に私をほったらかしにして、どこかに行っちゃったのよ。そのまま帰ってこなかったし」

その言葉を聞いて、五人の眉がピクツと動いた。

「それに、昨日、偶然にも浩二と十年ぶりに再会したってのに、あいつは私のことを覚えていなかったのよ！」

彼女は五人の後ろに立っている山坂浩二を指差して叫んだ。

五人は彼に体を向け、怒りでみちあふれた目を彼に向ける。

そして、月影香子、

「私、どれだけ傷ついたと思ってのよ！　ずっと浩二のことを想ってたのに！」

トドメの一撃！

その言葉で、五人の表情は笑みに変わる。

「そうか」

「山坂は幸せ者だな」

「こんなに想ってくれる人がいて」

「「うんうん」「」

だが、彼らの笑みは次第に邪悪なものへと変わっていく。そして彼らは一斉に手の指の関節をポキポキと鳴らし始めた。

「まあ、でも」

「そんな人を十年間もほったらかしにして」

「しかも、こんなに素晴らしい人のことを忘れていて」

「しかも、傷つけて」

「とぼけた顔して」

彼らは一步前へ出る。

歪んだ笑みはそのままで、

一斉に言い放つ。

「「「「お前みたいなやつは処刑だよなあ？」「「「「「

そして彼らは一步、また一步と山坂浩二へ近づいていく。

彼は顔の前で手の平を左右に何度もふりながら、

「えっ！？ ちょっと待つて。この展開なんかおかしいから！ それに、俺の言い分も聞いてくれよ！」

と必死であがく。

だが、五人の脚は止まらない。

「言い分？ やだね。聞いてやんない」

「女の子を傷つけるとは言語道断」

「俺たちは一途に人を愛することを美德とする」

「『性行為は一八歳から』が信条」

「女の子は最上の存在だぜ？」

彼らは山坂浩二を取り囲む。

「いや、絶対におかしいから。ねえ！……あつ、月影さん！
お願いだから助けてえー！」

山坂浩二はつま先立ちになり、遠くにいる月影香子に向けて両手を大きく振った。

だが、彼女は笑って、顔の横で小さく片手をふりながら何かを呟いた。

山坂浩二には聞こえなかったが、彼は彼女の言葉は唇の動きから何であるのかがわかってしまった。

「バイバイ」と。

その瞬間、彼は静かに両目を閉じて心の中で呟いた。

（ああ、もう、終わりだ）

そして、五人は拳を握り、自らの顔の前にその拳をもっていく。

深呼吸。

そして、一言。

「……安らかに眠れ。山坂浩二……」

その言葉の後、

五つの拳が一齐に、

山坂浩二を襲い、

鈍い音とともに、彼は床に倒れて動かなくなった。

「さて、処刑完了っ」と

ツンツン頭は両手をパンパンとはたきながら満足げに言った。

「教室戻るか」

彼らは床に倒れた山坂浩二をあとにして後ろへ振り向いた。

だが、そこには、

笑ってはいるが、どこか怒りを感じさせる表情の月影香子がすぐそばに立っていた。

「ヒッ!?!」

彼らは思わず上半身をのけ反りさせ、一步後ろへ下がってしまった。

「ねえ、あんたたち」

彼女の静かな声が渡り廊下に響き渡る。

彼女は笑顔のまま、

「誰が浩二に手を出していいって言っただのかしら？」

と言った。

「えっ、でも、あなたは僕らを止めようとはしなかったじゃないですか！」

長髪メガネは叫んだ。

「うるさいわね、それとこれとは別よ。」

月影香子は彼らに冷ややかな目を向ける。

そして、彼女は床に倒れている男子生徒たちを指差し、

「それに、あんたたちだけ仲間外れってのも嫌でしょ。仲間外れってつらいもんね」

と、どこか哀しみを含んだ声で言う。

「だから」

彼女は一呼吸置く。

「あんたたちも仲間に入れてもらいなさいよ」

その言葉とともに、彼女は両手で手刀をつくり、目にも留まらぬ速さで、五人のうなじの下にそれを叩きこんだ。

五人の体が、一斉に崩れ落ちるように床に倒れていく。

そうして、渡り廊下には三十人ほどの男子生徒が倒れ、そのなかでただ一人の女子生徒が立っているという光景ができた。

そこで一人立つ月影香子はぽつりと呟く。

「……ちょっと……やり過ぎちゃったかなあ」

彼女は右手の人差し指で頬をかく。

そして彼女はおもいきり背伸びをした。

「ん、まっ、いいか」

彼女はそう言うと、渡り廊下から去っていった。

彼女が渡り廊下を抜けると同時に、午後の授業の予鈴が校内に鳴り響いた。

渡り廊下で横たわっている男子生徒は、誰一人として起き上がることはなかった。

これが、後に『山坂・月影騒動』と呼ばれることとなった事件（？）の結末である。

余談ではあるが、山坂浩二を含む理系の男子生徒約三十人は、当然のごとく午後の授業に遅れた。

彼らの言い訳はこういうものだった。

「渡り廊下で『何秒間息を止められるか』という勝負をしていたら、全員我慢の限界を超え、気絶してしまいました」

彼らは全員放課後に生徒指導室に呼ばれ、こっぴどく叱られたそう
うだ。

ただ、彼らは一度も『月影香子』の名前を口にはしなかった。

それが、女の子は巻き込まないという、彼らなりの優しさだった

のかもしれない。

ただ、山坂浩二は全員にそのイベントの首謀者であるとして突き出され、これまた特別に叱られたそうだ。

山坂浩二は、この事件の一番の被害者と言って間違いないだろう。

(……………不幸だ)

説教中、彼は心の中で嘆き続けた。

第四章 山坂・月影騒動（後書き）

今回はファンタジーとは全く関係のない話になってしまいました。

しかし、今回にも大事なポイントがあります。

それはずばり、「月影香子の身体能力」です。これが後々重要になってきます。

今回は『二月一日』に関係する話になると思います。

そして、その次の章から、いよいよ本格的に物語が動き出します。

最終まで読んで頂けると嬉しいです。

第五章 月影香子

「……今日はマジで疲れた」

山坂浩二は銅鏡川の河川敷を歩いていた。

夕日が反射し、水面はきらきらと輝いている。

彼はいつもよりも重く感じられる脚を懸命に動かして、一步一步前へと進んでいく。

彼の右側には建物が並んでおり、左側には桜の木が河川に沿って一列に並んでいる。

この銅鏡川の両岸には桜の木が植えられており、春になるとこの県で有数の桜の名所となる。

ただ、今は葉を一つたりともつけていないので、それらは人々にどこか寂しさを感じさせる。

もちろん、山坂浩二も例外ではない。

「はあー」

彼は大きなため息をついた。

「今日は本当にひどい目にあった。抵抗したあげく、結局殴られたし、気絶して授業に遅れるし、生徒指導の先生には三十分も説教されるし、相変わらず女子は俺から遠ざかるし、月影さんは意味がわ

からないし、『捨てチョコ』も貰えなかったし。ついてないなあー」
と、彼は昨日と同じくして、なにやらぶつぶつと呟きながら歩いていく。

歩いていると、彼は自分の体がさらに重くなったと感じた。

「あ、もうこんな所か」

彼の目の前には、距離の短い急な坂道がある。

その坂道を上ると、すぐそばに『未来橋』が銅鏡川の上に架かっており、そこを過ぎるとすぐに急な下り坂がある。

山坂浩二は少し息をあげながらも、やっとのことで上り坂を制覇し、橋のそばを通り過ぎ、下り坂を歩いていく。

下り坂を歩き終えると、彼は後ろへ振り向いた。

赤い色をした未来橋が、夕日に照らされてオレンジ色を帯びているのが彼の目に映る。

彼の頭には昨日の出来事が鮮明に浮かんできていた。

月影香子との出会い。

そして、彼のたわいもない願い。

「出会い、か」

彼は呟く。

昨日、彼が願ったこと。

それは『空から女の子が落ちてくること』。

すなわち出会い。

「そうか、忘れてたけど、あのくだらない願いは叶ったんだ」

じゃあ、俺はどうするべきなんだろうか。

あの人に対してどう接するべきなんだろうか。

わからない。

女の子とともに接したことのない自分に、わかるはずもない。

それに、俺は女の子が怖い。

自分の存在が否定されそう。自分が傷つきそう。相手を傷つけそう。

だから、あの人のことも怖い。

だからといって、自分に対して積極的に接してくる月影さんを、邪険にするわけにもいかない。

……どうすればいいんだろう。

彼は未来橋を見つめながら考えた。

だが、やがて彼は首を横に振り、

「だめだ。考えても仕方ない。とりあえず早く帰ろう」

と言って歩き出した。

「そうだ、買い物しに行かないと」

彼は思い出したように呟き、歩くスピードを上げた。

彼は彼自身の家へと歩いていく。

ただ、疲労のせいか、彼は走ることができず、また、速く歩いているつもりであっても結局はいつもと同じ速さであった。

三分ほど歩くと、山坂浩二は河川敷の広場の隣を通る道路に着いた。

広場の道路側にはこれまた桜の木が並んでいる。

ただ、今はその枝のみを見せるだけである。

山坂浩二は一度立ち止まって、その広場を横目で見る。

そして、再び歩き出した。

いつも一人で暮らしている場所へ。

彼が十歩ほど進んだとき、彼の耳に女の人のもののような声が聞こえた。

わりと大きな声が、

後ろから。

山坂浩二の名を呼んだようにも聞こえたが、彼は振り返ることなく歩いていく。

（そうだ。月影さんは『空から』は落ちてないから、あの願いは完全には叶ってないんだ）

もう一度、彼の後ろから声のようなものが聞こえてくる。

しかし、山坂浩二はそれを無視して歩いていく。

（まつ、いいか。とりあえず『出会い』はあつたんだし。でも、変な人だよな）

もう一度声が聞こえるが、山坂浩二は無視する。

（俺と十年前に『退魔師』やってたなんて言うし、身体能力は高すぎるし、第一俺に近寄るなんてね）

彼は歩いていく。

もう一度、声が聞こえる。

山坂浩二は、その声が自分の名前を呼んでいるかのように聞こえた。

彼は立ち止まる。

「浩二！」

今度ははっきりと聞こえた。

自分の名前を呼ぶ、

女性の声。

彼は後ろへ振り向いた。

そこには、小さな箱のようなものを胸に抱えて走ってくる人の姿があった。

長い髪をポニーテールに留めている、紺色のセーラー服姿の女の子。

（あれ？ あの人つてもしかして……月影さん？）

山坂浩二はその女の子をじっと見る。

やがて、はつきりとその姿が見えるようになった。

（あ！ やっぱり月影さんだ。いったい何の用なんだ？）

彼はそこから一步も動かない。

そしてその女の子、月影香子は山坂浩二に追いついた。

息は少しもあげていない。

「ど、どうしたんですか。月影さん」

山坂浩二は一步身を引く。

月影香子は胸に抱いていたものを胸から離し、それを持つ両手を

へその位置まで下げた。

山坂浩二は彼女が抱えているものをじっと見た。

彼が箱だと思っていたそれは、紙でできた袋だった。

黄色と白のチェック模様で、口は赤いリボンでくくられ閉じられている。

「ごめんね、浩二。遅くなっちゃって」

月影香子は柔らかな微笑みを浮かべて言った。

ほんの少し、頬が朱く染まっている。

「えっ？ 遅くなっちゃって、なにがですか？」

山坂浩二はまぶたを何度も開けたり開いたりしながら尋ねた。

月影香子は少し体を揺らしながら答えた。

「……バレンタインデー」

「えっ？」

「だから、バレンタインデーよ。昨日は二月二十四日だったじゃない」

「えっ、バツ、バレンタインデー！？」

山坂浩二は大声を上げる。

「なに驚いてんのよ」

「えっ、だって……」

山坂浩二は戸惑った。

『バレンタインデー』は自分とは無関係なものばかり思っていたのだから。

「はい、これ」

月影香子はそう言って、小さな紙袋を両手で彼の胸の前に差し出す。

山坂浩二は驚きのあまり声が出せない。

「昨日、浩二の家から帰った後に作ったの。今日学校で渡そうと思っただけ、あんなことがあったから無理だったから」

彼女は一呼吸置いて、

「ストーカーみたいになっちゃったけど、受け取ってくれるかな？」

微笑む。

「……あ、あ？」

山坂浩二はしばらく目を見開いて固まっていた。

(う、嘘だろ。俺が、貰うなんて……どうしよう)

彼は差し出された紙袋を凝視していたが、やがて両手を伸ばして紙袋に触れる。

「あ、ありがとうございます」

月影香子の手から紙袋が離れる。

彼女は伸ばしていた両手を引いて、背中の後ろで組んだ。

「あまり上手くできなかったけど、全部食べてね」

夕日に照らされた彼女は満面の笑みを浮かべる。

とても幸せそうに。

「……あ、はい」

山坂浩二は紙袋を持った両手を伸ばしたまま立っていた。

「じゃあ、今日はすることあるから、もう帰るね」

彼女はそう言うと、顔の横で右手を振って、

「またね、浩二」

と言うと、山坂浩二に背中を向けて走り出した。

とても、速かった。

すぐに彼女の姿は見えなくなった。

山坂浩二は彼女の姿が見えなくなるまで両手を胸の前で伸ばしたままだった。

そして、彼は紙袋を左手に持って体の横に両手を戻す。

彼は月影香子の走っていった道を眺めながら、昔のことを思い出し始めた。

記憶にある時点では、彼がバレンタインデーを初めて経験したのは七歳のときだった。

もちろん、チョコレートを買えるはずもなく、その日は過ぎていった。

その次の年も貰うことなく二月―四日は過ぎていった。

彼は、日頃女性から遠ざけられている自分が、チョコレートを買うことなど無いとわかっていた。

わかってはいた。

わかってはいたのに。

その日は心に穴が空いたようなむなしい気持ちでした。

それが毎年、毎年。

そして、今年もそんな気持ちになって帰り道を歩いていた。

バレンタインデーは今年も『暗黒の日』のまま過ぎ去って行くはずだったのに。

今、彼の手には小さな紙袋が握られている。

女の子からの初めてのプレゼント。

自分の手に決して渡るはずのなかったもの。

彼は嬉しかった。

とても嬉しかった。

涙が出るくらい嬉しかった。

彼は立ち止まったまま、月影香子が走っていった道を見つめ続ける。

「ありがとう、月影さん」

そう言つと、彼は後ろを向いて歩き出した。

自分が暮らす家へと。

紙袋を握り締めたまま。

今日は二月十五日。

一四日に贈り物を貰えなかった男性たちが、「昨日は渡し損ねただけで、今日こそは貰えるかもしれない」と淡い期待を持ってしまう日。

その日の贈り物は、この地域では余り物の意味を込めて『捨てチョコ』と呼ばれる。

また、『捨てチョコ』を渡されることなど滅多にない。

それでも、希望を持ってしまふ。

だから、貰えたら嬉しいのだ。

女性に縁のない男性にとっては。

それが例え『義理』でも『いたずら』でも、

『贈る』という行為自体が最も大切なことから。

山坂浩二は家に着くと、鞆を床に降ろし、紙袋をコタツの上に置いた後、冷蔵庫と財布の中身を確認めた。

そして、何を買うべきかを小さな紙にメモをとりながら決めていく。

メモを書き終えると、彼はデパートなどで使われる大きな紙袋を二つ持って脱衣所に入った。洗濯物カゴに入っている衣類を紙袋に入れていく。

もちろん一つ一つ丁寧に畳んでから。

全て入れ終わると、紙袋は二つとも少し膨らんでいた。

彼は紙袋を両手に持って脱衣所から出ると、メモを制服のズボンのポケットに入れ、電気を消して家から出ていった。

ドアの鍵を閉め、歩き出す。

アパートの階段を下りて、河川敷広場の前の道路に出ると、辺りはすでに暗くなっていた。

街灯には明かりが灯り、月と数多くの星が夜空で輝いている。

山坂浩二はほとんど欠けていない月を見つめる。

まだ満月ではない。

「確か、今月は一八日が満月だよな。また、『あれ』が見えるのか。

見たくもないのに」

彼は立ち止まったまま、夜空を見上げて呟く。

「まあ、見えるだけだからいいか。べつに襲われるわけでもないし」

山坂浩二はそう言うと、夜空を見上げるのを止め、河川敷を歩き出した。

いつも学校へ行くときに使っている道を歩きながら、彼は満月の夜のことについて思い出していた。

彼が、初めて霊を見たのは、小学一年の夏のことだった。

その夜、山坂浩二は育ての親から、

「今日は満月だから、外に出て見てきたら？ とてもきれいよ」

と言われ、一度は「別にいい」と断ったが、何度も薦められ、仕方なく外へと出て行った。

「まあ、あんなに言うんだからすごいきれいなんだろうな」とか、「蚊に刺される」といった考えしか彼の頭にはなかった。

だが、外に出た途端、彼は悲鳴をあげた。

その悲鳴を聞いて、彼の育ての親はすぐさま家の外へ駆け込んだ。

彼女の目には、玄関先で尻餅について空を指差しながら震えている山坂浩二の姿が映った。

「浩二君！？　なにがあつたの！」

彼女は山坂浩二のもとへ駆け寄った。

ただ、彼女も山坂浩二には触れようとはしない。

彼女が見た山坂浩二の顔は、目は見開いて、口は大きく開かれたまま顎が震えていた。

「あ、……あ、……あれ、……なんなの？　……なに……あれ」

山坂浩二は震える声で必死に訴えていた。

彼女は不審に思つて、山坂浩二が指差す方向を見上げた。

そこには夜空に浮かぶ満月。

何もおかしいところはない。

「え？　お月様以外なものもないじゃない。なにをそんなに怖がつてんのよ。きれいじゃない」

彼女は山坂浩二に向けて優しく言った。

だが、山坂浩二の怯えは止まらない。

（違うんだよ、ちがうんだよ、おばさん！）

彼は目を見開いたまま、

（月はきれいだよ！ 確かにきれいだ！ でも！）

口を大きく開いて、

（そうじゃないんだよ！）

ガタガタ震えながら、

（あれは……）

心の中で叫んだ。

声に出せない。

（なんなの！？）

彼が指差していたのは満月ではなく、

ヒトや蛇や深海魚のような姿をした、夜空に漂う異形のものだった。

彼はしばらく震えた後、気を失って倒れた。

その次の日の夜、彼は恐る恐る外に出てみたが、昨日見たようなものは見当たらなかった。

その次の夜も、その次の夜も、

結果は同じだった。

しかし、次の満月の夜にはそれらの姿が見えた。

だが、次の日からはまた見えなくなった。

その次の満月の夜も異形のものたちの姿が目映った。

それでも、次の日からは見えなくなった。

そうしたことを何度も繰り返すうちに、彼はようやく確信した。

自分は満月の夜だけ霊が見えるのだと。

それからずっと、彼は満月の夜を怯えながら過ごしてきた。

山坂浩二は回想しながら歩き、やがて小さなコインランドリーの

店にたどり着いた。

彼は店の中に入り、奥に置かれているやや大きめの洗濯機へと脚を進める。

目的の洗濯機まで着くと、彼はそのとびらを開け、紙袋から衣類を取り出して中に入れた。

そして、とびらを閉め、とびら横の硬貨入れに百円玉を数枚入れ、洗濯開始のスイッチを押した。

スイッチ上のモニターに時間が表示される。

「あと一時間ぐらいか。スーパー行って帰ってきたらちょうどそれくらいの時間だな」

彼はそう呟くと、運転を開始した洗濯機に背中を向け、店から出て行った。

二十分ほど歩くと、彼は駅前のスーパーマーケットに着いた。

この店は、彼が住む地域では商品の価格が最も安く、品揃えも良いことで有名である。

そのため、学生からお年寄りまで、幅広い年代層に支持されている。

山坂浩二もまた、その一人である。

彼は店に入ると、買い物カゴを手にとった。

一階建てで、店内はあまり広くないので、山坂浩二にとってカー
トを使う必要はない。

彼はズボンのポケットからメモを取り出し、それを見ながら店内
を歩き、商品をカゴへ入れていく。

カゴの中には、肉類や野菜、果物、缶詰などが入っている。

店内を歩いていると、彼はパンコーナーに見覚えのある人物の姿
を見つけた。

セーラー服に腰まで届くポニーテール。

（あれ？ 月影さん？）

彼はそう思うと、その人物に近づき、

「月影さん、何してるんですか？」

と尋ねた。

すると、その人物、月影香子は山坂浩二に顔を向けた。

彼女の顔が驚きに変わる。

「えっ、わっ、わっ、こ、浩二！？ いきなりなによ、驚かさないでよ！」

彼女は山坂浩二から一步距離を置いた。

「いや、そんな、驚かすつもりなんて……」

山坂浩二はほんの少し苦笑いをして言った。

彼が月影香子の顔をじっと見つめると、彼女の顔は段々と赤くなっていた。

「な、なによ」

「い、いや、月影さんもこの店に来ているんだなと思ひまして……」

山坂浩二はカゴを持っていない右手で、自分の後頭部を掻いた。

すると、月影香子は少し不機嫌そうに口を尖らせた。

「なによ、来ちゃいけないの？」

「いや、そんなことはありませんよ。むしろ大歓迎です」

「そう？」

「そうです」

「……………」

二人の間に沈黙が訪れる。

（なんか、気まずいな……）

山坂浩二はパンコーナーに並べられている菓子パンに目を向ける。

すると、月影香子は呆れたように一度大きなため息をついて、

「まあ、いいわ。あたしはもう買う物無いから。浩二はまだ買い物するの？」

と尋ねた。

「いえ、もう必要なものは全部カゴに入れましたから」

山坂浩二は自分が持っている買い物カゴに視線を向けて答えた。

「ふうん。じゃ、一緒に帰ろっか」

「あ、はい。……………えっ!？」

「なに？」

「……………な、なんでもないです」

山坂浩二は視線を月影香子に向けた後、首を左右にブンブンと振った。

「じゃ、レジ行くわよ。浩二！」

「は、はい！」

山坂浩二は背筋を伸ばして言った。

「……ったく、なにやってんだか」

月影香子は小さくため息をつき、山坂浩二に背中を向けて歩き出した。

彼女が五歩ほど進んだところで、山坂浩二も遅れて歩き出す。

彼は月影香子の後ろ姿を眺めながら歩く。

彼女の身体は起伏には乏しい。

だが、平均よりも高い身長や、

動きのしなやかさ、

腰まで届く、さらさらの髪など、

世の男性を魅了する要素は十分にあった。

もちろん、山坂浩二とて例外ではない。

正直に言えば、

(……っけっこう、好みのタイプかも)

である。

彼は五メートルほど距離を置いて歩いている。

彼は月影香子の後ろ姿を眺めた後、彼女が左手に持っている買い物カゴに目を向けた。

（月影さんは何を買ったんだろう？）

彼はその買い物カゴをじっと見つめる。

肉のパック。

生活雑貨。

お菓子。

野菜。

そして、

（……………ハチミツと大量の食パン？）

山坂浩二は目を疑った。

食パンとハチミツ自体は問題ない。

ただ、その量が問題なのである。

（食パンがカゴの半分を占領してるってどづいつこと！？ 明らかに買い物の比率がおかしいから！） 明らか

彼は心の中で叫んだ。

ただ、声に出してツツコミを入れることはなかった。

なんか、

怖かったから！

山坂浩二は疑問を抱いたまま月影香子の後ろをついて歩いていると、やがてレジに着いた。

十つほどレジが並んでいる。

月影香子は手前から五つ目のレジに列んだ。

順番待ちの客が最も少なかったからである。

山坂浩二もその後ろに列ぼうとしたが、レジ係の店員が女性だとわかると、列ぶのをやめ、レジ係の店員を一通り見渡した後、男性の店員がいるレジへと歩いていった。

彼はレジに列ぶときも、なるべく男性の店員がいる所へ行くようにしている。

初対面の女性も彼からは距離を置くからである。

当然のことながら、山坂浩二はそれを快く思っていない。

店員についても同様であろう。

ただ、女性の店員しかいないときは、仕方なくレジを選ばずに列ぶ。

店員の顔が、不快そうに見えるのを我慢しながらだ。

これも、彼の日常である。

山坂浩二がレジ袋を持ってスーパーマーケットから出ると、出口にはレジ袋を片手からぶら下げ、もう片方の手を腰に当てて立っている月影香子がいた。

彼女は目を細めて山坂浩二を睨むように見る。

「……………遅い」

彼女は普段よりも低い声で言った。

「す、すいません！」

山坂浩二は腰を曲げて頭を深々と下げた。

「いいって、もう。恥ずかしいから」

月影香子はそう言うのと山坂浩二に背を向けた。

そして、首だけを動かして後ろにいる彼を見る。

「ほら、さっさと帰るわよ」

「は、はい」

山坂浩二は頭を上げ、腰を伸ばし、彼女のもとへと歩き出した。

店内から漏れる人工の光が二人を照らしている。

山坂浩二は月影香子のメートルほど後ろに來ると、そこで立ち止まった。

月影香子の顔にシワがよる。

「なにやってるのよ」

「……はい？」

「なんで後ろに立つのよ」

「えっ？」

月影香子はレジ袋を持っていない手で頭を激しく掻き、

「ああ、もう、イライラする！」

と言って、空いているほうの手で山坂浩二の腕を掴み、

「隣にきなさいよ！」

と叫び、彼を自分の隣へ引き寄せた。

そしてそのまま歩き出す。

「……………つたく、女の子にこういうことさせないでよ」

彼女は非常に小さな声で呟いた。

山坂浩二には聞こえていない。

彼はキョトンとした表情のままなんの反応も示さなかったが、十

メートルほど歩いたところで、

「……わっ、わ!？」

ようやく事態が飲み込めたようだ。

「っ!？」

月影香子は山坂浩二の突然の発声に驚き、その弾みで彼の腕から手を離してしまった。

「なっ、なによ! いきなり!」

月影香子は山坂浩二と向き合って叫んだ。

「びっくりするじゃない!」

「……すいません」

月影香子は山坂浩二を睨みつける。

山坂浩二は彼女から目をそらす。

しばらく二人はそのままだったが、月影香子はこの状況に耐え切れなくなり、両目を閉じて両肩を上下に大きく動かしながらため息をついた。

「まあ、いいわ。早く帰ろう」

彼女はそう言うと再び帰り道を歩き始めた。

山坂浩二は黙って彼女の横に並んで家路についた。

歩くにつれて、スーパーマーケットから漏れてくる光の量も少なくなっていく。

彼らを照らすのは街灯の明かりと、夜空に浮かぶ星と月だけになっていった。

二十分ほど歩くと、山坂浩二行きつけのコインランドリーの店が接している道路に入った。

この道に入るまで、彼らの間には一言の会話もなかったが、

「すみません、ちょっと寄るところあるんで」

と山坂浩二が片手で手刀をつくり、それを顔の前で立てながら言葉を発した。

月影香子は、はっとしたように目線だけを左側にいる山坂浩二に向ける。

「ん？ いいわよ、べつに。でも、早くしてよ」

「ありがとうございます」

彼はそう言うと、月影香子を置いて走り出し、五十メートル先のコインランドリーに入っていた。

彼女は山坂浩二の姿が店の中に消えるのを見届けた後、彼女はため息をついた。

「まったく、記憶を失っているとはいえ、いつまで敬語を使ってもりなのかしら」

そう呟くと、彼女はゆっくりと歩き出した。

山坂浩二はコインランドリーの店に入ると、奥にある洗濯機まで歩いた。

彼が利用したその洗濯機はすでに仕事を終え、彼が来るのを静かに待っていた。

「お疲れ様。いつもありがとな」

山坂浩二は洗濯機に向けて言うと、そのトビラを開けた。

大量の衣類が水と洗剤で洗われ、脱水されていた。彼は洗濯機の中からそれらを取り出して抱え込み、店内の中央に置かれている四角テーブル形の腰掛けの上に置いた。

そして、彼はそれらを一つ一つシワを延ばしては丁寧に畳んでいく。

全て畳み終わると、彼は制服のポケットから、それに詰め込んでいた二つの紙袋を取り出し、衣類を入れていった。

全て入れ終わると、紙袋は一時間前と同じように膨らんでいた。

しかし、異なる点が一つ。

紙袋が濡れてしまっていた。

原因は洗濯済みの衣類。

脱水されているとはいえ、まだかなりの水分を含んでいる。

「しまった。なんで紙袋にしまったんだろう」

山坂浩二はため息混じりに呟いた。

「いつもはレジ袋なのに」

彼は二つの紙袋を左手に持ち、レジ袋を右手にぶら下げ、店の出口へと歩き出した。

（まあ、無理もないか。非日常がたて続けに起こったんだから、疲れてるんだろうな）

帰ったら、やるべきことはやってさっさと寝よう。

彼はそう思いながら店の敷居をまたいだ。

店の外では、月影香子が店のドア横の壁にもたれ掛かって立っていた。

彼女は顔だけ山坂浩二に向け、

「あ、浩二」

ほんの少し笑みを浮かべて、

「終わった？」

と尋ねた。

山坂浩二は彼女を見ずに正面を向いたまま、

「あ、はい、終わりました」

と答えた。

すると、月影香子は背中を壁から離し、山坂浩二の前まで歩いた。

また、顔だけを彼に向ける。

「帰ろっか」

彼女は何気ない顔で尋ねた。

「そうですね」

山坂浩二の返事とともに彼らは歩き出した。

銅鏡川沿いの道路まで来ると、人通りがほとんどなく、車が一台通ることのできる道にも車は一台も走ってはいなかった。

やはり二人は無言のままだったが、未来橋が見える所まで来ると、月影香子が口を開いた。

「あつ。わたし、あの橋渡るから」

彼女は未来橋を指差す。

「あ、そうなんですか」

山坂浩二は強弱の無い声で言い、

「じゃあ、そろそろお別れですね」
となんとなく寂しさを感じさせる声で言った。

「まあね。でも、明日も会えるじゃない」

「それもそうですね」

「どうしたの。なんか元気ないわよ」

「そうですか」

「そうよ」

「……………緊張してるからでしょうかね」

「はあ？ どこに緊張する要素があるのよ」

「女の子が僕の隣を歩いていることですかねえ」

「と言ってもわたしよ、わたし」

「でも、昨日会ったばかりですよ？」

「いいや、本当は十年前に会ってるのよ。あんたが忘れてるだけ」

「本当ですか？」

「本当よ」

「……………」

二人の間に沈黙が訪れる。

山坂浩二と月影香子は無言のまま、並んで歩いていた。

そして、坂道に足を踏み入れた。

「あつ、もうこんなところまで来てたんだ」

「あ、本当ですね」

彼らは橋の近くにある坂道を上がっていく。

そして、未来橋までたどり着いた。

「じゃ、ここでお別れね」

月影香子はレジ袋を持っていない左手を腰に当てる。

「……………」

山坂浩二は彼女を見つめたまま立ち尽くしていた。

「あつ、満月の夜の約束覚えている？」

「……………覚えてます」

「…………場所決めてなかったね。どこにする？ わたしはどこでもいいけど」

「…………じゃあ、僕の家の前広場で」

「おっけー。じゃ、集合時間は八時ね」

「……構いませんよ」

「うん。それと明日放課後、ジャージ返しに行くから」

「あ、はい」

「あと、チョコ食べてくれた？」

「あ、まだです。帰ってから食べます」

「そう。感想よろしくね」

「……はい」

「……………」

しばらくの間、二人の間に静寂が訪れた。

「それじゃあね、浩二」

月影香子は手を顔の横で小さく左右に振った後、山坂浩二に背を向けて歩き出した。

「それでは」

彼も自分の家へ歩き出した。

「浩二！」

彼はその声のした方向に目を向けると、そこでは月影香子が橋の上で山坂浩二に向けて腕を左右に大きく振っていた。

「おやすみ！」

彼女はそう叫ぶと橋の上を駆けていった。

「おやすみなさい、月影さん」

彼は彼女が見えなくなってから、彼女が走っていった方向を見つめながら言った。

そして、再び歩き出した。

山坂浩二は家に着くと、電気をつけ、荷物を一度床に降ろした。

洗濯物は狭い部屋の中に全て干し、食べ物や冷蔵庫や棚に入れた。

彼はスーパーで買ってきた三九八円の焼肉弁当をレジ袋から取り出し、こたつの上に置いた。

そして、カーペットの上に腰を下ろし、両足をこたつの中に入れた。

が、なぜかいつもの安らぎが訪れない。

いつもは温かく迎えてくれるのに。

冷えた足を暖めてくれるのに。

電源は入れたはずなのに。

「なぜだあああああああああああああああああああああ
！」

山坂浩二は一人きりの部屋で叫んだ。

そして、彼はもしかと思い、こたつの上の亀裂をキツ、と睨んだ。

昨晚、月影香子が日本刀を刺したことによってできた傷。

彼は身体を乗り出して、その傷を上から覗き込んだ。

よく観察してみたものの、その傷はこたつの内部まではたどり着いていなかった。

この傷が原因ではない。

つまり、

偶然起きた故障。

「……………そ、そんな。なんで今壊れるんだよ。……………ちくしょー」

彼は両手をこたつにつけたまま、うなだれる。

「……………寒いじゃねえかよ」

彼の嘆きが部屋で寂しく響く。

彼はしばらくそのままの体勢でいたが、やがて身体を震わせる。

「うう。やばい、寒い。なんとかしないと」

彼はそう呟くと、両手をこたつから離し、押し入れへと歩き、ふすまを開けた。

中をまじまじと眺めた後、そこから毛布と冬用の掛け布団を取り出し、両手で抱え込んだ。

そして、彼がいつも座っている場所へと運び、床に降ろして毛布を広げ、その上に掛け布団を広げた。

「これで、少しはマシにはなると思っけど」

彼は床に腰を降ろし、両足を布団に潜らせた。

暖かくない。

だが、それも始めのうちだけである。

時間が経つにつれ、段々と暖かくなっていく。

彼は布団を膨れ上がらせながら体をこたつへと近づけ、その上にある弁当のフタを開け、割り箸を袋から取り出して割った。

「……いただきます」

彼は顔の前で手を合わせた後、夕食を食べ始めた。

「……ごちそうさま」

山坂浩二は弁当を米粒一つ残さず食べた後、始めと同じように顔の前で手を合わせた。

彼はこたつの上に一つの小さな紙袋が置かれているを見つけ、

「あつ、そうだ。月影さんからのチョコレートがあっただ」

と思い出したように言うと、腕を伸ばしてその紙袋をつまみ、自分の体に近づけた。

リボンをほどいて袋を開けると、甘い香りが部屋いっぱいに広がる。

山坂浩二は袋の中を覗き込んだ。

そこにあつたのは、球状にされた、柔らかそうなチョコレート。

いわゆる、『トリュフ』というやつである。

それが、十つほどビニールのフィルムに包まれて入っていた。

「うわ、うまそう」

彼は紙袋からそれを取り出し、紙袋を平らにしてこたつの上に広げ、その上にチョコレートを置いた。

「……でもこれ、夏だったら溶けて一つの巨大なチョコになってるよな」

彼は部屋の隅にあるテレビの黒い画面を見つめながら呟いた。

「まっ、どうでもいいか」

彼はそう言うと、球状チョコレートを包んでいたフィルムを剥がし、トリュフを一つつまんだ。

「見た目はいいけど……」

彼はトリュフをまじまじと眺める。

「……味はどうか」

初めての女の子からのプレゼントに、彼は緊張のあまり警戒してしまっているようだ。

そして、彼は球状チョコを口の中に放り込む。

そして、噛む。

静寂。

「……………うまい」

彼は身体を震わせながらもう一度言う。

「うまい」

彼はすぐさまトリュフをもう一つつまみ、口に入れる。

それは、口の中に訪れたその瞬間から、彼の味覚を甘さで満たしていく。

そして、甘すぎない。

「うん、うまい」

彼はもう一つつまみ、口の中に入れる。

隠し味でもあるのだろうか、チョコレートの味しかないのにまったく飽きなかった。

そして、もう一つ。

また、一つ。

そこで、山坂浩二は異変に気づく。

「あれ、このチョコ、塩味がする。……やだなあ月影さん。失敗作を入れるなんて」

彼は口直しにもう一口の中に入れた。

また塩味。

「あれ？ おかしい」

彼は頬杖をついた。

手が濡れる感覚。

そこで、彼は頬杖を止め、その手をじっと見つめた。

かすかに濡れている。

「あ、なるほど」

そこで彼は、

自分が泣いていることに、

初めて気がついた。

あまりにも嬉しすぎて。

月影香子が自分のために作ってくれたことが。

そしてなにより、

彼女の気持ちも考えずに、

彼女に冷たい態度をとる自分が、

情けなかったから。

「馬鹿だな、俺って」

鼻をすすする音。

「絶対俺を馬鹿にしていると思ってたけど」

もう一度鼻をすすする音。

「あれが冷やかしのように見えるのかよ」

見えない。

絶対に見えない。

月影香子の言動。

その全てが、

演技であるはずがない。

山坂浩二が近くにいると嬉しそうで、

顔を赤らめたり、

笑ったりして、

『退魔師』だなんて変なことを言っても、

本当はただの、

女の子。

それ以外に適当な言葉は見つからない。

「明日、謝らないと。それで、もう少し距離を縮めよう」

女の子が怖くても。

他の女の子が近寄らなくても。

彼女だけは、

好意的に接してくれるのだから。

それに、山坂浩二も彼女と接することに悪い気分ではなかった。

彼女と会話すること。

彼女の隣を歩くこと。

慣れないことだったが、楽しかった。

彼女が近くにいることが、心地良かった。

新鮮で、

どこか、懐かしくて。

「懐かしい、か……」

山坂浩二は呟く。

「変なこと言うなあ。俺も」

彼はため息をついた。

確かに、十年より前のことは頭では忘れている。

でも、

彼の心は、

それを覚えていてくれたのかもしれない。

「じゃあ、退魔師のことについてはどうなんだ」

彼の頭にこびりつく言葉。

『退魔師』。

それについては、満月の夜に確かめる以外に方法が無い。

「早く、満月になればいいのに」

彼は初めて『満月の夜』を待ち遠しく思った。

「はやく、なってくれ……」

この時、

彼は、

今まで味わったことのない気持ち湧き上がるのを、

感じた。

第五章 月影香子（後書き）

ようやく、次の章から『退魔師』についての話に突入します。

この第五章で山坂浩二は『すでに月影香子とは十年前に出会っていた』ということを信じました。

月影香子は本当に退魔師なのか、山坂浩二も退魔師だったのか、今後の展開にご期待ください。

お詫び

先日、『ムーン・ライト』とは全く関係の無い小説を続きとして投稿してしまいました。現在は削除済みですが、ご迷惑をおかけしました。今後、このようなことが無いように注意します。申し訳ございませんでした。

第六章 記憶喪失

翌日。二月一六日。

山坂浩二はいつものように朝の用事を済ませて登校した。

そして、昨日の騒動が嘘だったかのように、一年の理系クラスはいつもと変わらない様子であった。

女子生徒たちは山坂浩二には近寄らず、永山と村田は山坂浩二と昼ご飯を食べ、ヘンタイ六人衆は食堂で話に花を咲かせていた。

山坂浩二は昨日との差に戸惑いつつも、いつもの学校生活を楽しんでいた。

そして、月影香子は山坂浩二を訪ねては来なかった。

帰りのホームルームが終わると、彼らの学校では掃除の時間となる。

今週、山坂浩二の掃除場所は一年五組の教室である。

約四十人の一クラスにつき、三つの掃除場所が割り当てられるの

で、出席番号で区切られた三つのグループに別れて掃除を行っている。

教室には村田やヘンタイ六人衆のくせ毛や長髪やオールバックメガネもいる。

山坂浩二は持つ部分が木製のほうきを使って、床に落ちているゴミを掃いていた。

（今日、月影さんと会ってないなあ。ジャージ返しに来るって言うたけど、本当に来るのか？）

彼は小さなため息をつく。

（クラスのやつら、誰一人として昨日のことを言っていないな。…まあ、それはそれで嬉しいんだけど）

彼が使っているほうきが机の脚に当たる。

（なんか、さびしいんだよなあ）

また、ため息。

（昨日はあんなに大騒ぎしたってのに）

彼のほうきが机の脚にまた当たった。

一通り床を掃き終えた彼はほうきを持ったまま教室の隅へと向かった。

そして、机が運ばれていくのを気の抜けた顔をしながら眺める。

くだらない話に花を咲かせながら掃除をしているクラスメート達を見ると、山坂浩二の口から自然とため息が出た。

（男以外ともつと話してえ）

彼は天井を見ながらもう一度ため息をついた。

「ちょっと、山坂！ さっきからあんたため息ばかりついて！
うるさいわよ！」

彼は声がした方向、つまり彼から見て左に顔を向けた。

教室の前の黒板に、黒板消しを右手に持って当てている一人の
女子生徒。

髪は肩にぎりぎりかかる長さで、身長は女子高生の平均的なもの
より十センチほど低い。スカート丈は膝より上にある。

山坂浩二に話しかけることのできる数少ない人物。

やなぎがわともこ
柳川友子である。

「や、柳川さん！？ な、なんなんですか、急に！？」

山坂浩二は相当驚いたようで、身体をびくつかせた後、一步身を
引いた。

だが、彼が立っていたのは壁際。

山坂浩二は後頭部をぶつけてしまう。

ゴンッ！ と鈍い音がする。

そして、彼は両手で後頭部を押さえながらうつずくまってしまった。

「……い、い、い、う」

「……… あんたって、ほんとドジね」

柳川友子は黒板から手を離し、山坂浩二に体を向ける。

山坂浩二は後頭部を押さえてしゃがんだまま、顔を左に向けた。

「…… ほっ といってください」

そして、彼はその体勢のまま、

「いったい何の用なんですか？」

と尋ねた。

柳川友子は、はっとしたように両肩をびくつかせ、

「あっ、それよ。それ」

黒板消しを教卓の上に置き、

「昨日、月影香子が山坂に用があつてこの教室に来たじゃない。あんたたちいつ知り合つたの？」

と尋ねた。

『月影香子』という言葉に、彼は反応し、立ち上がり、柳川友子と向き合つた。

そして、一つひっかかることがあつた。

呼び捨て。

月影さんでも月影香子さんでもなく、

月影香子。

彼はそこに疑問を感じた。

「……あの、月影さんと柳川さんは知り合いなんですか？」

彼はやや弱々しい声で尋ねた。

しかし、柳川友子は眉間にしわをよせ、

「こっちが質問してんのよ。あんたは質問なんかしないで答えなさい」

と、まるで何かに焦っているかのように言った。

「……すいません」

山坂浩二は軽く頭を下げた後、

「一昨日です」

と答えた。

柳川友子は姿勢を崩さず、間髪入れずに再び問う。

「一昨日のいつ？」

「……………夕方です」

「何があつたの？」

「……………未来橋から銅鏡川に落ちて溺れていた月影さんを助けました」

「……………未来橋から……………落ちた……………？ あの香子が？」

柳川友子はわずかながら動揺しているようで、目を細めた。

そして、彼女は目を細めたまま、

「で、その後どうしたの？」

と尋ねた。

「……………えっと、僕の家まで背負っていきました。体が冷えていて、放っておくと危ないと思ったので」

「それで？」

「……お風呂に入ってもらいました」

「その後は？」

「……いきなり下の名前で呼ばれて、十年前に……あの、その……」

山坂浩二は言葉に詰まってしまった。

『退魔師』なんて単語を出していいものなのか。

たと言ったとしても、信じてもらえるはずはない。

彼は言葉の選択に迷った。

柳川友子は彼が言葉を紡ぎ始めるのを待っていた。しかし、ついに我慢できなくなってきたのか、

「十年前になによ？ はっきりさせなさい」

といらいらした様子で言った。

「……すでに知り合っていたそうです」

「へえ。山坂、それ信じた？」

柳川友子は彼を疑うように目を細めて山坂浩二を凝視した。

「始めのうちは信じませんでしたが、今は信じてます」

「ふうん。そう」

彼女はそう言うとお教卓に置いてあつた黒板消しを手に取り、再び黒板に向き直り、作業を始めた。

しかし、彼女は腕を挙げたまますぐに顔だけを山坂浩二に向け、

「あの子、ほかに何か余計な事とか言つてなかった？」

山坂浩二を睨みつけながら尋ねた。

「よ、余計なことつて……なんですか？」

山坂浩二は柳川友子が醸し出す、自分を押し潰すような雰囲気になんて耐えながら尋ね返した。

「……そうね。たとえば……」

彼女は黒板消しを持っていない左手の人差し指を顎に当て、

「『退魔師』、とか」

その言葉を聞いた瞬間、山坂浩二の両肩が一度だけビクッと動いた。

だが、山坂浩二は慌てて体勢を立て直す。

柳川友子はニヤリと笑い、

「なーんてね。なに慌ててんのよ」

と言った。

「はあ、そうですか」

山坂浩二は大きく息を吐き、

「まあ、今日の放課後に借りてたジャージを返しに来るとは言っていましたか」

と、落ち着いた様子で答えた。

すると柳川友子は、はっとしたように目を一度大きく開いた。

「あれ？ そうなの？ ……でも香子、今日学校休んでるみたいよ」

彼女は眉間にしわを寄せ、

「なにがあつたかは知らないけど」

と、やや声を低くして呟いた。

山坂浩二はそれを聞くと、肩を落としてため息をついた。

「……………そうですね」

そして、彼は机が前方に固められた教室を見渡し、

「そろそろほうき係の出番のようなので、失礼します。ありがとうございます」

と柳川友子に頭を下げた後、スペースの空いた教室後方に歩き出した。

柳川友子はほうきを持った彼の後ろ姿を眺める。

「……………あの反応、やっぱり」

彼女は再び眉間にしわを寄せる。

「……………厄介なことになったみたいね」

彼女の独り言を聞いた者は誰ひとりとしていなかった。

放課後、山坂浩二は高校生にありがちな寄り道もせず家に帰り着いた。

昨日買い物をしたのでスーパーマーケットに行く必要はなく、また衣類も大量に洗濯しているため、彼が今日しなければならぬのは夕飯の支度だけである。

彼はこたつの横にスポーツバックを置くとすぐに入り口付近の台所に向かった。

彼から見て、左側に流しがあり、右側に鍋やフライパンを置くところが二つある備え付けのガスコンロがある。

さらに、流しの左横には高さ約九十センチ、横幅約八十センチ、奥行き約五十センチ、二段構造の食器棚が置かれている。

そしてその横には山坂浩二の半分ほどの高さの冷蔵庫があり、またガスコンロと流しの間にはまな板と包丁が立てられており、その手前に炊飯器が置かれている。

かなり詰めて置かれているため、ガスコンロの火が他の物に移らないかどうか心配である。

また、流し台の下方には物入れがある。

山坂浩二はそこからボウルと米を二合分取り出し、ボウルに米と水を入れて米を研ぎはじめた。

ある程度研ぎ終わると、ボウル内で米を水に浸し、風呂場へと向

かった。

体育座りをしてようやく入れるほどの風呂桶をスポンジに水と洗剤をつけて洗った後、蛇口をひねってお湯を溜めはじめた。

彼は部屋へ戻ると、たんすから着替えをとり出し、風呂場へと戻った。

そしてそのまま風呂に入った。

風呂場から出た山坂浩二の服装は、下は黒色のジャージ、上は黒色の長袖シャツ、つまり上下とも黒色であった。

理由は定かではないが、彼は黒色の服装をすると自然と落ち着くそうだった。

彼は濡れた髪を黄色のタオルでふきながら台所へと向かった。

彼は十分に水を含んだ米を炊飯器に入れ、炊飯開始のスイッチを押す。

そして、彼はこたつ傍の毛布と布団を重ねた、こたつ代用のところ

ろまで歩き、床に座ってそれに両足を入れた。

「さぶっ」

彼は体を震わせて呟いた。

「やっぱ、入った瞬間に暖くなるこたつのほうがいいよな」

彼はそう言うと、こたつの上に置いてあるリモコンを手に取り、テレビの電源スイッチを押した。

黒い画面から、夕方のニュース番組の映像に移り変わる。

彼はしばらくボーっとテレビ画面を眺めていたが、ふと何かを思い付いたのか、ジャージのズボンの左ポケットから黒色の携帯電話を取り出した。

そして、携帯電話を操作してインターネットに接続をした。

「……もしかしたら」

彼は液晶画面を見つめながら、

「……『退魔村』ってのが、本当にあって」

毛布の暖かさを感じながら、

「……十年前に山崩れで壊滅したんだったら」

大きく息を吸って、

「……ニュースになっていてもおかしくない！」

携帯電話のボタンを押し始めた。

まずは、

『退魔村 十年前 壊滅』

で検索をかけた。

少しの間があってから、画面が切り替わる。
が、一ページ目に出てきたものにそれらしい記事はない。

「だめか。……じゃあ、次は」

彼は再び携帯電話のボタンを押し始める。

検索欄に打ち込まれた言葉は、

『山村 ○○○○年 山崩れ』

彼は検索に決定ボタンを押した。

わずかなロード時間を経て画面が切り替わる。

いくつかの項目が山坂浩二の目に映るが、それらしきものはない。

だが、画面を下にスクロールしていくと、一ページ目の最後の項目が彼の目を引き付けた。

そこには、

「○○○○年、日吉村で突如発生した土砂崩れについて」

と書かれてあった。

彼は迷わずその項目に決定ボタンを押した。

画面が切り替わる。

そのページには読むのが嫌になるほど長い文章が綴られていた。

山坂浩二は一度読むことをやめようとしたが、自分を奮い立たせて読みはじめた。

そこには、こう書かれていた。

。。。。年四月八日、日吉村で発生した土砂崩れについて。

突然の土砂崩れにより、日吉山の中腹に位置していた日吉村は壊滅。

家屋は全て倒壊。死者行方不明者は五百人にのぼった。

その日は降水もなく、土砂崩れが発生した原因は不明。

また、犠牲者は全て二十歳以上の成年であり、未成年者には犠牲者は一人もいなかった。

未成年者は何らかの情報を得たのだろうか、一人を除いて村から遠く離れた場所に避難していた。

また、一人だけ避難し遅れた未成年者も、倒壊した家屋のそばで発見された。

ただ、この事故には不明な点が多い。

まず、降水の無いなかでの土砂崩れ。

これについては様々な見解があるものはっきりとした原因はいまだ判ってはいない。

次に、成年が全て犠牲になり、未成年者に犠牲者が出なかった点。これについては、何らかの情報を得た成年たちが未成年者を村か

ら逃がしたなどの理由が考えられるが、詳しいことは不明。

さらに、生存者から、『土砂崩れが発生したと考えられる時刻に、日吉村から青い光が見えた』などの証言があるが、信憑性は薄い。

また、犠牲者の身体から刃物で切り付けられたような傷跡が多数見られたが、これについては調査は行われていない。

ここまでの文章には山坂浩二は平然としていたが、次の文章から彼は平静を保てなくなった。

また、余談ではあるが、この日吉村は昔、『退魔村』と呼ばれており、村人全員に退魔の力が宿っていたという話がある。

彼らの祖先は妖怪と人間の間に生まれた子供であるという言い伝えがあり、村には霊的な様々な出来事についての記録が残っていた。

それゆえ、日吉村壊滅の原因は霊的なものであると考える者もいるが、現代社会にその可能性はまず無いと言っていいだろう。

山坂浩二は携帯電話の画面を見つめながら震える。

「……な、なんなんだよこれ。……なんだよ……これ」

彼は携帯電話を操作して、再び文章に目を通す。

「意味わかんねえよ……」

彼は呟いた。

その時！

彼の後ろからドアを叩く音が聞こえた。

「……っ！？」

彼は座ったまま体をひねり、顔を後ろに向けた。

ドアを叩く音が何度も狭い部屋の中で聞こえる。

だが、声は聞こえない。

ドアを叩く音とテレビからの雑音。

「……誰だ？　こんな時間に。近所迷惑だろうが」

山坂浩二は布団から脚を出して立ち上がり、ドアの前までだるそうに歩いた。

その間にもドアを叩く音は鳴りつつける。

その音は段々と強くなっていく。

まるで何かを焦っているかのように。

「……たく、わかってるっつーの」

山坂浩二は顔をしかめて頭を右手でかきながら呟き、

「はいはい。今開けますよー」

と全く抑揚の無い声で言い、鍵を開け、扉を押して開けた。

その瞬間、

彼の部屋に、

人が一人飛び込んで来た。

「っ!？」

その人物が入り込んでくると同時に、山坂浩二は反射的に後ろに大きく跳びのいた。

玄関に入り込んで来た人物は腰を大きく曲げて前屈みになっており、荒い呼吸を繰り返している。

さらに、見慣れた紺色のセーラー服を着ており、髪は通常の体勢ならば腰まで届くほどの長さ。

ただ、腰をほぼ直角に曲げているため、髪は床に届くか届かないかの位置にある。

そして、髪はその人物の顔を隠してしまっている。

しかし、山坂浩二にはこの人物に心当たりがあった。

まさか、……この人は……、

「……………月影さん？」

山坂浩二はその人物を見ながら小さな声で呟いた。

すると、その人物は呼吸を荒げながら顔を上げた。端正な顔立ちをした、見馴れた少女のもの。

やはり、月影香子だった。

「……………じ」

彼女は注意しなければ聞き取れないほど弱々しい声で彼の名を呼ぶ。

「いったいどうしたんですか？ ……………っ!？」

山坂浩二は月影香子を見てみると、あることに気がついた。

彼女の顔の左半分を血が赤く染めている。

おそらく頭から出血しているのだと思われる。

そして、出血しているのは頭部からだけではなかった。

両足のソックスはもとは白だったのだろうが、今はそのほとんどの部分が赤く染まっている。

さらに注意深く見てみると、紺色のセーラー服にもかなりの血液が付着していることがわかった。

山坂浩二は顔をしかめながら、もう一度尋ねる。

「いったい、何があつたんですか!？」

先程よりはやや声量を上げていた。

しかし、月影香子は両手を膝につけたまま、荒い呼吸を繰り返しているだけだった。

また、呼吸も徐々に弱くなってきた。

おそらく、『答えない』というよりは『答えられない』のだろう。

「……どうすればいいんだ？」

山坂浩二は悲痛な表情をしながら彼女を見る。

今必要なのは、怪我の応急手当。

理由など聞いている場合ではない。

彼は月影香子の肩に手を当て、玄関近くのフローリングの床に彼女を仰向けに寝かせた。

そして、部屋のたんすから市販の消毒液とピンセット、大量のガーゼ、包帯を取り出し、彼女のもとへ戻る。

彼女のそばに座り、ガーゼに消毒液をつけ、ピンセットでそれをつまんで、顔についた血を拭き取っていく。

月影香子は両目を閉じて弱々しい呼吸を繰り返している。

顔に付着した血液を拭き終わると、ガーゼを新しいものに替え、消毒液をつける。

セーラー服の右腕の部分をまくると、刃物で切り付けられたような傷が二の腕にあり、そこから流れ出た血液が腕を真っ赤に染めていた。

山坂浩二はその血液を拭き取る。

拭き終わると、彼は包帯を手を取った。しかし、よくよく考えてみると、彼は包帯の巻き方というものを知らなかった。

だが、傷口をそのままにしておくわけにもいかない。

そこで彼はガーゼで傷口を覆い、医療用のテープでとめることにした。

同様に左腕も手当をしていく。

次に脚の傷を手当していく。

ソックスを脱がし、スカートをぎりぎりの部分までめくる。

両脚には多数の傷があった。

深いもの、浅いもの。

彼は血液を拭き取ると、傷口をガーゼで覆い、テープでとめた。

次に、胴体。

彼はセーラー服を見ていると、セーラー服には多数の切り口があり、学校に着て行くことができない状態になっていた。

さらに、ところどころに縫い合わせたり新たな布を継ぎ足したような部分もあった。

彼はこれを疑問に思ったが、首を横に振って気持ちを切り替える。

今必要なのは手当。

彼はセーラー服、その下のシャツを限界の位置まであげた。
やはり胴回りにも多数の傷があった。

彼は先程と同様に、血液をガーゼで拭き取り、傷口を覆う。

「……これで、一応大丈夫かな」

彼はそう言うと、めくり上げていたスカートとセーラー服をもとに戻し、道具を全て手に取ってたんすに向かった。

引き出しを開けて道具を入れた後、引き出しを閉める。

その途端、山坂浩二は急に恥ずかしくなった。

理由は簡単。

彼が先程何をしていたのかを思い出してもらいたい。

そう。

女の子のスカートやシャツをめくり上げていたのである。

当然、普段は見ることでできない箇所の素肌が目につくし、それに加えて、手当のためとはいえ堂々と肌に触れていた。

今までの彼ならば、そのような機会などなかった。

いや、機会があつたとしても、

できない。

不可能である。

なぜならば、

彼は女性が怖いからである。

では、なぜ？

「……まさか、月影さんだから？」

彼は玄関近くで仰向けになっている月影香子を見る。

彼の顔がさらに赤くなっていた。

「……ほんとに何なんだろうな。この気持ちは」

彼は軽くため息をつく。

「……まあ、考えても仕方ない。夕飯の支度でもするか」

彼はそう言うと、脚を動かして台所に向かった。

しかし、台所のそばには月影香子が横になっており、山坂浩二としては気になって仕方がない。

「もしもし、月影さん？」

彼は足元の月影香子に声をかけるが、彼女からの返事はない。

「もしもし」

もう一度呼びかけるが応答はない。

「……………寝たのかな？」

彼は首を少し傾けて呟く。

「こんなところで寝たら風邪ひいてしまうな」

彼はその場にしゃがみ込むと、月影香子の上半身を起こして彼女に肩を貸した。

すると、月影香子はうつすらと目を開け、山坂浩二に触れていな

い右手の人差し指で右目を擦りながら彼に顔を向ける。

「……………ん？ ……なに？」

月影香子は寝ぼけたような声で山坂浩二に問いかける。

「……………こんなところで寝たら風邪引きますよ」

山坂浩二は月影香子を見ずに、顔をまっすぐ向けたまま答えた。

「はい、はい。わかりましたよーだ」

月影香子はまるで子供のようにふざけた感じで言い、立ち上がった。

山坂浩二は月影香子をこたつ代用の布団まで連れてくると、しゃがみ込んで彼女から離れた。

「さあ、さあ、布団に入ってください」

山坂浩二はまるで彼が母親であるかのような口調で言い、布団をめくり上げた。

「……………あ、うん。わかったあ」

月影香子は再び寝ぼけたような声で言うと、毛布とカーペットの間にもそもそと入った。

山坂浩二は掛け布団を毛布の上に被せる。

「うーん。ありがとね、こっじ」

月影香子は目をほとんど閉じた状態で、うわごとのように言った。

「いえいえ。どういたしまして」

山坂浩二は顔を赤らめながらも笑顔で頭をぽりぽりとかきながら言った。

「えへへー。じゃあ、おやすみ〜」

月影香子はやや気味悪い笑い声を出したあと、まるで酔っ払いであるかのように言ってから目を完全に閉じた。

彼女はすぐ寝息を立てはじめる。

山坂浩二はそれを確認すると、立ち上がってそそくさと台所に足を運んだ。

そして、台の流し付近に両手をつけて、荒い呼吸を始めた。

「ハア、ハア、ハア」

彼は左手で胸を押さえ、

「し、死ぬかと思ったあー」

吸い込み。

「心臓バクバクで破裂するかと思った」

そう、彼は月影香子に肩を貸してから彼女が寝付くまで、心拍数が急上昇していたのである。

例えるならば、二百メートルを全力で走り終えたときのよう。

「き、緊張したあ」

それぐらい、

緊張していたのだ！

「今思えば俺って、とんでもないことしていたよな」

山坂浩二は目の前のタイルの壁を見つめながら言った。

「でも、俺があんなことできたなんて」

彼は月影香子に肩を貸して、体の右半分を彼女に密着させていたことを思い出し、

「……………やっぱり、月影さんだから……………」

視線を炊飯器に落として自分に問いかける。

「……………ほんと、何なんだろうな」

彼は眉間にしわを寄せ、

「……この、胸が締め付けられるような感じは」

と呟いた。

山坂浩二は夕飯を適当に済ませた後、押し入れから別の毛布と布団を取り出し、月影香子とこたつを挟む位置にそれを広げた。

その後、宿題を終わらせ、歯を磨き、つけっぱなしになっていたテレビの電源を切り、部屋の明かりを消して布団と毛布の下に潜り込んだ。

「寒っ」

彼は誰に向けてでもなく言い、布団のなかで脚をじたばたと動かし、体を暖める。

一分ほど続けると、ちょうどいい感じの暖かさになってきたので、彼は脚を動かすのを止めた。

そして、彼は目を閉じた。

だが、眠れない。

月影香子が気になって仕方がない。

「……月影さん。結局俺の部屋に泊まっていくことになるんだな」

山坂浩二はこたつを見つめながら、その向こう側にいる月影香子を想像して呟く。

「はあ。まあ、仕方ないか。傷だらけの女の子を無理矢理帰すわけにもいかないし」

彼は体を天井に向け、碁盤状に線が引かれている天井を眺めながら言い、

「あー、もう、どうにでもなれよ」

と吐き捨て、目を閉じた。

まったく眠れなかったが、彼は両目をつむったままだった。

「うつ、…………ひつく」

豆電球の明かりがついた部屋で女性のすすり泣くような声が聞こえる。

「…………ん？　なんだ？」

山坂浩二は閉じていた目を開け、声のした方向に顔を向けた。

多分、月影香子のものだろう、と彼は思う。

すると、再び部屋のなかで女性のすすり泣くような声が聞こえた後、

「…………どこ行つたの？…………帰ってきてよ」

という、震えて弱々しい声が山坂浩二の耳に届いた。

山坂浩二はやや目を細め、

「なんだ？　寝言か？」

とこたつを眺めながら言った。

月影香子の独り言は続く。

「……………ずっと、一緒にいるって言ったくせに。……………絶対帰ってくるって言ったくせに」

嗚咽。

「……………いつまで私を一人にさせておくつもりなのよ」

いつしか、山坂浩二は彼女の寝言に聴き入ってしまった。

そして、再びすすり泣く声。

「……………ううじ」

寝言ではあるものの、名前を呼ばれたことに山坂浩二は反応し、上半身を起こして、こたつの向こう側を覗き込む。

月影香子は彼に背中を向け、玄関のドアに体を向けて横になっていた。

山坂浩二には彼女がどのような表情をしているのかはわからない。

「……………はやく帰ってきてよお……………」

鼻をすすする音。

「……………お願いだから……………私を一人にしないでえ……………」

山坂浩二の視線は自然と下に向いていた。

自分が責められているようで、

自分が悪者のようで、

つらかったから。

申し訳なかったから。

それでも、

「……俺は……覚えてないんだ」

その思いが自然と言葉に出る。

記憶を失う前の自分への責任転嫁。

彼女を置いていったのは、今の自分じゃない。

十年前に月影香子といたことも、

まだ信じてはいないが、自分が退魔師だったことも、

覚えていないのだから。

では、なぜ、

あの時自分はあることを言おうとしたのだろうか。

昨日の昼休み。

彼女と手を繋ぎ、正面から向き合ったときに。

それが。

自然と口から出ようとした。

しかし、

何か変だと思い、言わないように口を閉じた。

身の危険が迫っていたため、口には出せなかった。

「……くそ、わけがわかんねえよ」

山坂浩二は頭を乱暴にがりがりとかいた後、横になって、自分の体に毛布と布団を被せた。

そして、頭まで潜り込み、目を閉じる。

月影香子のすすり泣く声は、
もう聞こえては来なかった。

第六章 記憶喪失（後書き）

今回、退魔師と言うよりは退魔村の壊滅について触れてみました。

話の展開がかなり強引だったと思います。

また、ここまで読んで下さった方はもうお分かりだと思いますが、この物語は『満月の夜』がクライマックスになります。

だらだらと長い話ですが、最後まで読んで下さるとたいへん嬉しいです。

また、今回から少し更新スピードを上げていきたいと思います。

僕自身は現在高三の、いわゆる『受験生』なので、はやいうちに書き終えたいと思っています。

第七章 蜂蜜と食パン

翌朝。二月一七日。

山坂浩二は携帯電話のアラーム音によって目覚めた。

一般的な目覚まし時計と同様の、妙に周波数の高い音が部屋のなかで鳴り響く。

「うつせえなあ。わかった、わかったから。」

彼は上半身を起こし、こたつの上に充電器のプラグを挿して置いてあった黒色の携帯電話を手に取り、ボタンを操作してアラーム音を停止させた。

画面右上の時計は『6：01』を示している。

彼は時刻を確認すると、携帯電話を折りたたんでズボンの左ポケットに入れてのっそりと立ち上がった。

彼は今にも開こうとしている自分の口を右手で隠す。

隠された口は、誰にも見られることなく大きく開き、山坂浩二に朝の到来を告げる。

開いた口は再び閉じ、それとほぼ同時に右手は口を隠すのをやめた。

そして、視界がはっきりとしてきた彼はあることに気づく。

「あれっ？なんで俺はこんなところで寝てたんだ？」

と首をかしげ、眉をひそめながら自分に問いかける。

彼が今立っている場所は、テレビのすぐそばであり、背中側には小さな窓がある。

いつもの山坂浩二は、こたつの部屋の入り口側のそばで寝ているのだが……。

「なんでこんな場所で寝てたんだ？」

山坂浩二は左目だけを少し閉じて、再び自分に問いかける。

そして彼は眼球を動かして部屋を見渡し、

「なんで布団が二つ出てんだ？」

と、空間に問いかける。

「……………昨日、なんかあったっけ？」

彼は頭をぼりぼりとかく。

山坂浩二は寝ぼけているせいか、昨日のことを思い出そうとしてもなかなか頭の中に浮かんではこない。

「……………えっと、昨日は特に何もなかったよな……………」

彼はあくびで大きく開いた口を右手で隠し、

「……なんかとても重大なことがあったような気がするんだけど……」

彼は部屋を歩き、トイレのドアノブに手をかけ、

「………なんだったかなあ………」

と、もどかしい気持ちを抱いて呟き、扉を開いて中に入った。

水の流れる音とともに山坂浩二はトイレのドアを開けて部屋に戻ってきた。この時点で彼がトイレに入ってから約一分が経過している。

しかし、

「いったいなにがあったんだ？」

うつむいて右手で頭を抱え、

「………ああー、思い出せない！」

と嘆いた。

しばらく彼は考え込んでいたが、昨日のことがまったく思い出せない。

「くそ、もういい！考え事はやめ！」

彼は部屋を歩いて、洗面所のドアノブに手をかける。

「……………とりあえず、舌の汚れを落とさないと、気持ち悪くて水も飲めないからな。」

と独り言を言い、ドアを開けた。

いつもの洗面所兼脱衣所の狭い空間と風呂場の扉が、彼の目に映る……………はずだった。

だが、彼の目に映ったのは、

滑らかな肌。

よく締まったウエスト。

筋肉質ではあるが、細い両脚。

両脚と同様に筋肉質ではあるがすらりとのびた両腕。

膨らみのほとんどない胸。

腰まで届く黒い髪。

つまり、

バスタオルで体を拭いている月影香子だった。

しかも真っ裸の！

二人の目が合う。

二人の口が驚きで半開きになる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

無言。

彼女の手から力が抜け、髪に付着した水分をたっぷりと含んだバスタオルが床に落ちる。

彼女の見えるとはいけない上の部分は、運よく彼女自身の長い髪によって隠されていた。

見てはいけないうちを見してしまった山坂浩二は、どうしていいかわからず、直立不動のまま、視線が泳ぐ。

月影香子はしばらく彼を無表情で眺めていたが、やがて彼女の表情が怒りに染まっていく。

眉をぴくぴくと動かし、口元は笑っているが震え、両目は強く閉じられている。

そして、彼女は目を見開き、顔を赤らめてプルプルと震えながら山坂浩二を睨みつけ、腕をゆっくりと動かす。

彼女は左側の洗面所に置いてあった石鹸を左手で掴み、上に軽く放りなげた。

そして落ちてきた石鹸は彼女の胸の前で右手に掴まれる。

月影香子は左腕で上半身のプライベートゾーンを隠しながら、右手を大きく振り上げる。

そして、

「突っ立ってないでさっさと出ていきなさいよおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお！！！！！！」

怒号とともに月影香子の右手から。

石^き_い^{せき}_きが^き発^{はつ}射^{しや}された！

石^い_{せき}は直線を描いて、視線の定まっていなかった山坂浩二の額の
中央に見事命中。

「ぐえ！！」

山坂浩二は後方に飛び、玄関先のフローリングの床に背中から着
地した。

「ふん！！」

月影香子は山坂浩二を見下ろしながら洗面所の扉を乱暴に閉めた。

ボタン！

月影香子の姿は茶色のドアに隠され、見えなくなった。

床に仰向けに倒れている山坂浩二は天井を眺めながら、先程まで考えていた事の答えを見つけた。

「そうだ。月影さんが来てたんだ」

彼は思い出したように呟く。

そして、彼の頭には昨日の出来事が急激な速さで浮かび上がった。
きた。

月影香子の突然の訪問。

血まみれの彼女。

傷だらけの彼女。

ボロボロの制服。

山坂浩二による応急手当。

泣き声混じりの彼女の寝言。

山坂浩二は大の字になって仰向けの状態で天井を眺めていたが、昨日の事を思い出した途端、

「……………ちよつと待てよ」

と言つて腹筋を利用して上半身を起こした。

そして目の前の、洗面所に繋がるドアを見つめ始める。

「昨日、月影さんの身体にはかなりの傷があつたはず」

彼の脳裏に月影香子の身体にあつた無数の傷が浮かぶ。

「……………だつたら」

彼は先程目撃した彼女の裸体を思い出す。

そして疑問。

「……………なんで傷が一つも残ってないんだ？」

彼は眉をひそめる。

確かに、昨日の月影香子の身体には無数の傷があり、程度はまちまちであつたものの、どれも一晩で完治するようなものではなかつた。

また、深い傷などは病院で縫わなければならないほどだつた。

しかし、今日の彼女の身体には傷どころか、その跡さえもまったく見当たらなかった。

山坂浩二はその原因についてあれこれと考えを巡らせた。

しかし、まったく答えが思いついてくれない。

頭に浮かんで来るのは、先程目撃した裸の月影香子の姿ぐらいである。

「……………ちょっと待て。俺は、いったい何を見た？」

山坂浩二は目を見開いて、目の前の扉に問いかけるように言った。

(……………信じられないようなものを見た気がする)

今まで女の子に近寄られもしなかった彼が見たもの。

そう。月影香子の裸。

ここで、彼は初めて『女性の裸を見た』ということは今更ながらに意識した。

純情な彼の顔が真っ赤に染まっていく。

そして、

彼の鼻から血が盛大に吹き出した！

彼は薄れゆく視界のなかで洗面所のドアを見ながら倒れ、床で大の字になる。

彼の表情には、羞恥と幸福と後悔が浮かんでいた。

「ちょっと！いったいどうしたのよ！？なんで血まみれで倒れてんのよ！もう！いつまでも寝てないでさっさと起きなさいよ浩二！意味がわからないわよ！」

山坂浩二は女性の騒がしい声で意識を取り戻した。

彼は仰向けに倒れたままで、肩が揺らされているような感覚を覚え、目をつつすらと開けた。

山坂浩二の視界には冬用の紺色セーラー服を着た月影香子の顔が、彼の顔の近くにあるという光景が映った。

（……………あれ、月影さん？）

彼の意識は朦朧としていた。

しかし、彼は把握しようとする。

自分が置かれている状況を。

だが、彼の目の前には月影香子の顔がある。

そのため、彼の頭は誤作動を起こした。

具体的に言っと……………彼女の裸を連想してしまっ
たのである！

「っ！？」

山坂浩二の目が見開かれる。

そして、

再び彼は鼻血を盛大に放出！

その朱い液体は月影香子の顔に浴びせられる。

「っ！？何よこれ！？」

月影香子は山坂浩二の肩から手を離し、自分の顔にその手を当てる。

そして、手を離す。

そこに付着した液体を見た途端、彼女はその手をにぎりしめ、震え出した。

そして、今にも意識を失ってしまいそうな山坂浩二が着ている黒色シャツの襟を掴んだ。

そのまま彼の体を乱暴に揺らす。

「なんてことしてくれてんのよ！！せっかくお風呂入ったのに！！」

彼女は恨みを込めて叫んだ。

そのまま山坂浩二の体を揺らし続ける。

体、とくに頭を激しく揺さぶらされた山坂浩二は失いかけていた意識を取り戻す。

彼の目の前には血まみれの月影香子の顔があった。

山坂浩二の目が一瞬のうちにして見開かれる。

「っ！？」

彼は自分のシャツの襟を掴んでいる月影香子の手を払うと、腰を床につけたまま少しだけ後ろに下がり、

「い、い、い、……いったいどうしたんですかそれ！？」

と彼女を指差して尋ねた。

月影香子は両膝を床につけたまま、呆れたように笑みを浮かべ、

「あんたが私に向かって鼻血を吹いたからよ……」

と答えた。

そして彼女は両手で床を叩いてから立ち上がり、

「もう！またシャワー浴びないといけないじゃない！」

と、いらいらした様子で言い、洗面所の扉のドアノブに手をかけた。

「……浩二」

月影香子は上半身をひねって後ろを向き、山坂浩二を睨みつける。

「………な、なんでしょうか？」

山坂浩二はあごを震えさせながら尋ねた。

すると、月影香子は目を細め、

「……覗かないでよ」

とやや低い声で言い残し、洗面所の扉を開けて中に入って行った。

ボタン。

山坂浩二の目の前に、再び茶色の扉が現れる。

「……………まじかよ」

山坂浩二はため息をついて頭を下げ、

「舌の汚れが落とせないなんて……………」

と、床に座ったまま両手を体の両端で伸ばして床につけた体勢で呟いた。

「……………まあ、でも。」

彼は顔を上げ、

「どうせ風呂に入ってるんだったら、少しの間洗面所ぐらい使っても大丈夫なんじゃないか。」

と、目の前の扉を眺めながら言い、肘を曲げた後にそれを伸ばすことによる両手の反動を利用して、山坂浩二は軽快に立ち上がる。

そして彼はおそろおそろドアノブを右手で掴み、ゆっくりと手首を回す。

“ガチャリ”という、金属がこすれあう音が部屋の隅々まで行き渡った。

彼は慎重にドアを押しながら、目をドアのすれすれの所まで持っていき、洗面所の様子を窺う。

“キィイ”という、扉の金具が働く音が洗面所内に響き渡る。

山坂浩二の目にはいつもの洗面所の光景が映った。

月影香子の姿はない。

そのかわりに、曇りガラス付きの扉で仕切られた風呂場から、水が弾かれる音が聞こえる。

「……………よし。今なら大丈夫」

山坂浩二は胸を撫で下ろして呟いた後、これまでゆっくりと開いていたドアを一気に押して全開にした。

洗面所には、自由に移動できる場所は畳一つほどの広さしかなく、今の彼から見て右側に洗面台があり、左側には風呂場に繋がる扉がある。

洗面台の横には脱衣カゴがあるが、山坂浩二はそれをあえて見ようとはしない。

彼は脱衣カゴから目を背けたまま洗面台の前に立ち、風呂場と相対するように取り付けられている鏡に映った自分の顔を眺める。

パーツとしては特徴がなく平凡であるが、全体的にはバランスが取れているため、結果的には『中の上』に分類されている。

ただ、今は自分が出した鼻血がところどころに付着してしまって

いる。

また、髪は耳にかかるかかからないほどの長さであり、ところどころで逆立っている。

山坂浩二は自分の顔を見終えると、鏡の前に置いてあった歯ブラシとプラスチック製の青いコップを手に取った。

コップに水を注ぎ、その水で口をゆすいだ後、舌を出し、その上に歯ブラシを優しくあてて汚れを落としていく。

山坂浩二は、ある程度落とし終えると、コップに入っている水で口をゆすいだ。

舌を磨き終えた彼はコップと歯ブラシを鏡の前に置き、蛇口から流れる水を両手ですくって顔にかける。

「冷た！」という彼の声が、洗面所内で反射する。

山坂浩二は冬だというのに冷水で顔を洗うのだから、温水が当たり前のこのご時世では見上げたものだ。

彼は再び顔に水をかけ、「冷た！」という声を出す。そしてもう一度水をかける。

彼は冷水で顔に付いた鼻血を洗い流しながら、自らの身体が暖まっただけを感じた。

人間の顔、特に額の部分には温度センサーが密集しているため、そこを集中的に冷やすことで脳は体温が下がったと感じ、身体を暖

めようとする。

その結果、身体が暖まるのである。

まあ、山坂浩二がこのことを知っているのかどうかは謎であるのだが。

それはさておき、山坂浩二は顔を冷水で十分に洗い終えた後、彼の左側にある、手すりのようなものに引っ掛けてある白いタオルを手を取った。

彼は鏡を見ながら両手を使って、自らの顔をそのタオルで拭く。

顔からタオルを離すと、鏡に映っている彼の顔には鼻血は残っておらず、目やにもきれいに洗い流されていた。

「まあ、こんなもんかな」

山坂浩二は鏡に映った自分の顔をまじまじと眺めながら呟き、タオルをもとの位置に戻した。

そして、彼は両手を高く挙げて体を伸ばしながら、リビングへ繋がるドアへと歩き出した。

「朝飯、月影さんの分も作んなきゃなー。」

山坂浩二はそう呟くと、体を限界まで伸ばし、“うゝ”とうなるように言つと、両腕を下げてドアノブに手をかけた。

その時！

彼の後ろから、風呂場の扉が開くときに出る独特な音が聞こえた。

ドアノブを回そうとしていた手が止まる。

彼の右手は、思うようには動いてくれない。

山坂浩二はドアノブを右手で掴んだままの体勢で、あの音が何を意味するのかを考えた。

いや、考えるまでもない。

風呂場の扉が勝手に開くはずがない。

人の手によって開かれるはず。

じゃあ、誰が？

この部屋には二人の人物がいる。

山坂浩二自身には不可能。

では、扉を開いたのはもう一人の人物になる。

だが、それを確かめるために後ろを見てはいけないことぐらいは

わかる。

少し頭を働かせるだけで答えは導き出せる。

扉を開いた人物。

それは……………。

ドアノブに手をかけたまま、口を半開きにして動きを止めていた
山坂浩二。

背中に悪寒を感じる。

“ひた、ひた”と、後ろから足音が二つ聞こえた。

そして、何かが動く音が洗面所のなかで、山坂浩二の耳に突き刺さってきた。

殺気！

身の危険を感じた山坂浩二は震える右手でドアノブを回し、扉を一気に引いてリビングとの繋がりをつくり、前を向いたままリビング側のドアノブを右手で掴んだ。

そして、リビングに足を踏み入れると同時に前を向いたままドアを全力で閉める！

そして山坂浩二は扉から飛びのいた。

それとほぼ同時に、扉の洗面所側に何かがぶち当たる音がした。

その何かは扉を震動させ、山坂浩二の心をも揺さぶる。

彼は体を扉に向ける。

扉の震動は止まっていたが、彼の心の震動はまだ続いていた。

彼は右手を胸に当て、

「……危なかったあ」

と息を吐くように言った。

まるでラグビー選手がタックルをしたような震動だった。もしあの砲撃をともに喰らっていたら、山坂浩二は五体満足ではいられなかったかもしれない。

彼は恐怖感で全身を震わせながら扉に背中を向けて台所へと歩き出した。

しかし、脚も震えてしまっているため、思うようには前に進めない。

わずか一、二メートルほどの距離が、今の山坂浩二にとっては果てしない旅の道のりのように感じられた。

「朝ごはん、つくんなきゃ」

まるで、砂漠をさ迷いながら水を求めてオアシスを探す人のような口調で彼は呟く。

そしてまた一歩踏み出し、

「月影さんの分まで、……つくんなきゃ」

と、見開かれた目は焦点が定まっておらず、体を左右にぶらしながら歩いている山坂浩二は、うわごとを言っているかのように呟いた。

彼はふらふらと何かに誘われるように冷蔵庫の前に立ち、虚ろな目をしたまま台所の青いタイルの壁を眺める。

そして一言。

「今日はいい天気だなあ」

彼は、窓が取り付けられていない台所の壁を眺めている。

目は生気を失い、焦点が定まらない。

今の山坂浩二には、全てのものがどうでもよく感じられた。

なぜなら、月影香子の言い付けに逆らったから。

いや、正確には見ていないのだから逆らったというわけではない。しかし、彼が洗面所にいたということは事実であるから、月影香子は『山坂浩二に覗かれた』と思って仕方がない。

一度目はハプニングとして認められるかもしれない。

しかし、二度目はさすがに許してはくれないだろう。

山坂浩二にとっては、覗いていないが、月影香子にとっては覗かれたのだから。

だから、彼女が洗面所からこの部屋に帰ってきたとき、

多分、殺される。

その恐怖感に耐えられなくなった彼の頭が。知能が。本能が。必死で自らを守ろうとして現実を歪めていく。

だから、これから何が起こったとしても、心配する気力など残っていないかった。

山坂浩二は輝きを失った目でタイルを見つめながら、大きく息を吸い込む。

口を開き、尖らせる。

そして、

「そーらーはーひろいーなあおーおきいなあー」

ついに壊れた！

山坂浩二は歌を歌いながらしゃがんだ。そして、冷蔵庫の扉を開けて中から卵のパックを取り出した。

そして、卵を二つ手に取ってパックを冷蔵庫に戻してそのドアを閉めた。

山坂浩二は歌い続けながらコンロの前に立ち、フライパンを少し熱した後、そこに油をひく。

虚ろな目をしている山坂浩二は、フライパンの上で卵を二つ割って中身を落としてフタをした。

そして、佇む。

「どーおーせー死ぬんだあーやまさーかーはー」

虚ろな目をして、

「はーだーかあみちやあつてえ殺さあれーるー」

壊れたラジカセのように、

歌いつづける。

その時、

洗面所の扉が開いた。

出てきたのは、ところどころに縫い合わせた跡がある紺色の冬用セーラー服。それを着て、それと同じ色の膝下五センチほどの長さのスカートを穿いている月影香子だった。

彼女の耳に入ってきたのは、どこかのお坊さんが唱えるお経のような、単調で低音の歌。

月影香子は腰に手を当て、台所前に立つ山坂浩二の後ろ姿を眺める。

「ん？どうしたのかしら？鼻歌なんか歌ったっちゃって。らしくないわねえ」

彼女はそう呟くと、

「浩二。何作ってるの？」

と、自分に背中を向けている山坂浩二に話しかけた。

だが、

「……………」

返事がない。

月影香子は、「さっきの声如山坂浩二には届かなかったのかな」と思い、先程よりも声量を上げてもう一度呼びかける。

「浩二。何作ってるの？」

しかし、山坂浩二はお経のような歌を口ずさむだけで、月影香子の声には反応を示さない。

月影香子は、二メートル先にいる山坂浩二の後ろ姿を睨みながら、

「浩二！」

と叫んだ。

しかし、反応はない。

こんなに近い距離で聞こえないはずはない、と思った月影香子はもう一度呼びかける。

「浩二！！！」

百メートル先にいたとしても容易に聞き取れる声だったが、山坂浩二はぴくりとも反応しない。

ただ。歌いつづけるだけ。

あれ？これって、もしかして……………。

無視されてる？

ついに堪忍袋の緒が切れた月影香子。彼女はダンダンと大きな足音をたてながら山坂浩二のもとへと歩き、彼の右肩を右手で掴んだ。ここまでされても、彼はまったく反応しない。

月影香子は齒ぎしりをして、

「無視してんじゃないわよおおおおおおおおおおお
お……」

と大声を張り上げて、山坂浩二の体を強引に半回転させて自らと向き合わせた。

彼女は山坂浩二の顔を怒りのこもった目で睨む。

「あんたねえ！！無視ってんじゃ……………」

途中まで山坂浩二に怒声を浴びせていた月影香子。しかし、睨み続けているうちに彼女はようやく彼の異変に気づいた。

「……………って、どうしたのよ浩二!？」

彼女は山坂浩二の両肩を押さえて、彼の体を揺さぶる。

「どうしちゃったのよ!？」

目は虚ろで。

焦点は定まっていなくて。

口は半分開いてしまっただけ。

身体に力がまったく入っていない。

「ねえ！ねえ！ねえってばあ！聞こえてる！？」

月影香子は山坂浩二の身体を激しく揺さぶりながら、大声で問いかける。

揺らされるがままに揺らされている山坂浩二。

彼は揺らされているうちに、口を少しだけ動かし始めた。

まだ、声は出ていない。

月影香子は彼がようやく反応を示したのかと思い、動き始めた口からどんな言葉が出てくるのか、今か今かと彼の口を見つめていた。

そして、

「……………っ」

声が出た。

山坂浩二の声を聞いた月影香子は、虚ろな目をしたままの彼を揺さぶりながら、

「それから？…それかなによ！？」

と半分脅しているかのように尋ねた。

しかし、山坂浩二は輝きを失った目をしたまま、月影香子に揺らされるがままに頭を前後左右に動かしているだけ。

しかし、そんな山坂浩二も、ついに声を出した。

「……………」

先程と同様の声を聞いた月影香子は、山坂浩二の体を揺さぶるのを止め、彼の両肩に手を置いたまま彼の虚ろな目を見つめる。

山坂浩二の頭はちょうど上を向いたところで停止していた。

そして、

「……………」

ついに返事がっ！？

月影香子は唾を飲んだ。

じくり。

その音は部屋の中全体に伝わっていく。

そして。

彼の口から！？

「つゝきゝかげさんにいゝ殺さあれえろっ」

再びお経のような歌！

月影香子は“えっ！？”とでも言いたそうに、口を半開きにし、目を見開いて山坂浩二の顔を凝視する。

そして、彼の歌にはまだ続きがあつた。

「むゝねゝはあちいさあくゝきゅっきゅっきゅっきゅ」

山坂浩二は歌うのを止め、虚ろな目をしたまま口を半開きにして、ほんの少しだけ笑っていた。

月影香子は山坂浩二を凝視したまま。思う。

おい、こいつ。

いま何て言った？

胸が……小さい？

きゅっきゅっきゅっ？

月影さんに殺されるだと？

月影香子は歯ぎしりをしながら、山坂浩二の肩から右手だけを離れた。そして、その右手の拳を自分の顔の横で握りしめる。

彼女の身体全体がさまざまな感情によって震えている。

「た、たしかに」

驚愕で。

「う、ウエストの細さには自信あるわよ」

屈辱で。

「で、でもね」

哀愁で。

「あ、あんななんか」

怒りで。

情けなさで。

震えていた。

自分のコンプレックスを、

変な替え歌なんかで、

歌われたくない！

許せないという気持ちが、

「言われたかないわよおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお！！！！」

爆発した！

月影香子は山坂浩二の頬を右手で渾身の力を込めて平手打ちをした。

もともと全身から力が抜けていた山坂浩二は、あまりの威力に耐え切れず、空中で身体の頭からつま先までの線が床と平行になって一メートルほど飛び、横向きで床へと着地。

床で横向きに倒れた山坂浩二は、両手を顔の前で伸ばして床につ

け、目を閉じて身体を痙攣させている。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

月影香子は平手打ちを繰り返した体勢のまま動きを止め、目を見開いて静かに山坂浩二を見つめていた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

あれ？

ひょっとして。

……………やり過ぎちゃった？

月影香子の額に大粒の汗が浮かぶ。

冬なのに。

暑くないのに。

寒いのに。

月影香子は困惑の表情で山坂浩二を見つめ続ける。そして思う。

あれ？

そういえば。

なんでこんなことになったんだっけ？

えーと。確か。

リビングに入ったら、山坂浩二が自分に背中を向けたまま歌ってて。

呼んでも返事が無くて。

強引に振り向かせたら。

目が虚ろで。

口は半開きで。

体はふにゃふにゃ。

それで。いきなり歌い始めて。

月影香子に殺されるとか。

胸が小さいとか。

きゅっきゅっきゅっ。とか。

言うからつい“かつ”となって殴り飛ばしたんだ。

でも。あれ？待てよ。

浩二はいつたい。

なにやってた？

確か。台所に立っていて……………！

月影香子は不安に思い、おそろおそろ顔を台所の方向に向ける。

目についたのは。

火のついたガスコンロ。

フライパン。

フタ。

弱火。

あれ。なんだかとっても。

嫌な予感。

月影香子は床を蹴って山坂浩二のもとへ一目散に駆け寄る。

山坂浩二のそばまで来た彼女は、しゃがんで彼の両肩を掴み、揺さぶる。

「ちょっと！起きなさいって！！」

彼女は叫んだ。

すると、山坂浩二はゆっくりと目を開き、

「あれ？月影さん？」

と返事をし、

「どうしたんですか。そんなに慌てて」

と、キョトンとした表情をして尋ねた。

彼の目には輝きが戻り、体から力も抜けてはいなかった。

月影香子はそれを確認すると、ほんの少しだけ安心したが、

「どうしたんですかじゃないわよ！」

と、焦りながら言った。

そして、彼女は台所を指差し、

「あんた」

山坂浩二の、輝きが戻った目を見つめて、

「何作ってたの？」

と尋ねた。

山坂浩二は床に手をつけて上半身を少し起こし、月影香子が指差す方向を覗き込むようにして見た。

その方向にあったのは、ガスコンロ。

その上にはフタをされたフライパン。

そして、フライパンの下で揺らめく小さな青い炎。

（確か、目玉焼きを作ってたような……………）

山坂浩二はしばらくフライパンを見つめたままだった。

作り始めてからどれくらい経っただろうか。

山坂浩二の頭には、そのような疑問が浮かび上がってきた。

彼にとってはほとんど時間は経っていないように感じられた。しかし、それと同時にかなりの時間が過ぎたようにも思えた。

山坂浩二は、彼のそばでしゃがみ込んでいる月影香子をよそに、両手で床を押して上半身を完全に起き上がらせた。

そして彼はそのまま立ち上がった。月影香子は彼の顔を目で追うが、山坂浩二は彼女を見ない。

山坂浩二はゆっくりと、ガスコンロに向けて歩き出した。月影香子は彼の背中を眺める。

ガスコンロの前に到着した山坂浩二は唾を飲んだ。

フタをされたフライパンからは油が弾ける音。

彼はおそろおそろ手を伸ばす。

そして、彼はフタの中央にある黒い突起物をつまんだ。

山坂浩二は再び唾を飲む。

そして、彼は勢いよくフタを取った。

フライパンの中が明らかになった。

彼の目に入ってきたのは、二つの目玉焼き。

長時間の加熱によってガチガチに固まっている。

山坂浩二は目を見開く。ついでに口が半開きになる。

そして、

「わあああああああああー!!」

彼は両手で頭を抱えて絶叫した。

「もう。目玉焼きが固いぐらいでくよくよしないの!」

朝食の準備を済ませた二人は、こたつを挟んで座っていた。

「でも、僕は完熟より半熟のほうが好みなんですよ」

山坂浩二は皿に乗せられた目玉焼きにケチャップをかけながら言った。彼の視線は下を向いており、月影香子を見ていない。

「それにしても、なんで目玉焼きにケチャップかけるのよ」

「おいしいからです」

山坂浩二はケチャップの容器のフタを閉めた。そして、月影香子に差し出す。

「でも味付けがケチャップだけっていうのもねえ」

彼女は嫌々言いつつも酸味のある赤い液体が入った容器を受け取り、フタを開けて目玉焼きにそれをかけ始める。

「まあ、嫌いじゃないけどね」

月影香子はケチャップをかけ終わると、その容器をテーブルの中央に立てて置いた。

山坂浩二は月影香子を見ずに、赤く染まった目玉焼きを一口かじる。

「うわっ。ばさばさする」

そう言いつつも、彼は目玉焼きをもう一口で食べ終えた。そして味噌汁をすすする。

「ねえ、浩二？」

月影香子は呼びかけた。

「なんですか？」

山坂浩二は味噌汁の入ったお椀をテーブルの上に置き、顔を上げた。

月影香子はこたつの上に並べられている朝食のメニューをまじまじと眺めている。

「……食パンないの？」

彼女は箸を皿の上に置き、両手を膝に乗せて尋ねた。

山坂浩二は右手に箸を、左手に茶碗を持ったまま、静かに月影香子を眺めていた。口はもごもごと動いていたが、やがて飲み込む。

そして、口を開いた。

「……まだ……食べるんですか？」

彼は月影香子の手前にある茶碗を眺めた。それには、まるでお供え物のように米が大量に盛られている。

山坂浩二は信じられないといった目を彼女に向け、

「……もう、ご飯は残ってませんよ。月影さんが全部食べちゃったじゃないですか。」

と、冷めた声で言った。

月影香子は彼の発言を聞くと、下がっていた目線を上げ、山坂浩二の目を見つめた。彼の目からは幻滅感のようなものが、彼女には感じられた。

月影香子はキョトンとした目で山坂浩二を見ていた。しかし、彼

から幻滅感が漂う理由がわかると、一瞬にしてその顔が朱く染まった。

月影香子はこたつに両手をつけた。そして身を乗り出し、

「ち、違うわよ！ もっと食べたいたいってことじゃなくてただ食パンとハチミツがあるかどうか聞いてみたただけなんだから！」

と、早口で声を張り上げた。

山坂浩二は身を引いて、

「す、すいません。ないです」

と答えた。

月影香子は体勢をもとにもどしながら「あっそ」と吐き捨てた。そして、腰を床につけると茶碗を持って大量の御飯を食べはじめた。

「……まあ、朝ごはんがお米ってのも悪くないけど」

月影香子は味噌汁をすすり、

「わたし、いつもハチミツ食パンだから。なんか変な感じ」

と呟いた。

山坂浩二は米を飲み込み、

「まあ、僕の昼ご飯の分まで食べてますけどね」

と呟き、

「いつもは、どのくらい食べてるんですか？」

と尋ねた。

「……一斤」

「……一日で、ですか？」

「違うわよ。朝だけ」

「……食べすぎじゃないですか？」

「朝はしっかりと食べなきゃいけないの。それに、朝たくさん食べても全然太らないし」

「……でも、一斤は食べ過ぎだと思います」

山坂浩二は呆れたように目を細め、

「それに、ハチミツもかけてるんですよね？」

と、尋ねた。

「そうだけど？」

月影香子は、まるでそれが当たり前であるかのように答えた。

「……全部に、ですか？」

「そうだけど？」

山坂浩二の問いかけに、彼女は即答した。

山坂浩二はため息をつく。そして尋ねる。

「いったい何キロカロリーあると思ってるんですか？ 軽く千はい
つてると思いますよ」

彼は味噌汁の最後の一滴を飲み干すと、こたつの中央に置かれて
いる皿の上のりんごを一切れつまみ、半分ほどかじった。

月影香子は山盛りの御飯を順調に減らしている。山坂浩二の問い
かけの後、口の中で細かくされた米を飲み込んで答えた。

「まあ、それくらい普通じゃない？」

彼女は口を尖らせ、

「だいたい大きなお世話よ。いっつもばかみたいに動いてるんだか
ら大丈夫なの。人の勝手じゃん」

と、不服そうに言った。

「まあ、そうですけど」

山坂浩二は半分残ったりんごを口にほうり込み、

「ちゃんと自炊とかしてるんですか？栄養バランスが崩れると身体に響きますよ」

と、単調に言った。

月影香子は味噌汁を飲み干し、お椀をこたつの上に置いた。大量に盛られていたはずの御飯はすでに茶碗の中から姿を消している。そして目玉焼きもすでない。

「ちゃんとやってるわよ」

月影香子はりんごに手を伸ばし、

「朝はパン。お昼は食堂で。晩は自炊。晩ごはんぐらいは自分で作ってるわよ」

と言ってるりんごを一切れつまみ、それをほんの少しだけかじった。

山坂浩二は“はあ”という、頷きの反応を示すだけだった。

「だいたい、誰があんたにチョコを用意してあげたと思ってんの？」

月影香子は眉間にシワをよせ、りんごを一切れつまんで尋ねた。

山坂浩二は、はっとしたように目を見開き、

「あ、あの、あれ。ありがとうございます」

と、左手を膝の上に置き、右手で頭をかきながら言った。視線は下を向き、頬は段々と赤くなってきた。

月影香子は目を細め、

「で？」

とだけ言った。

「えーと、その……」

「……」

「おいしかったです。とても」

「……そ、そう？」

月影香子は目線を山坂浩二からそらした。

「あの、顔赤くなってますよ？」

「うるさいうるさいうるさいー！」

彼女は恥ずかしさを隠すかのように声を上げ、

「ど、どんなところが？」

と尋ねた。

山坂浩二は天井を見上げて“うーん”とうなりながら考え、

「……隠し味。ですかねえ」

「別に入れてないわよそんなの」

月影香子は即答すると、りんごに手を伸ばした。

「あれ。そうなんですか。僕の思い違いですか」

山坂浩二は少し落ち込んだように言うと、彼女と同様にりんごをつまんだ。

月影香子はりんごをかじりながら、

「……………まあ、入れたけど」

と呟いた。

「なにか言いました？」

「なんでもないわよ！」

月影香子の顔は赤く染まったままだった。

「「ごちそうさまでした」」

りんごを食べ終えた山坂浩二と月影香子は、顔の前で両手を合わせた。小さな窓からは、朝の光が入り込んでいる。

山坂浩二は両手を膝の上に下ろし、

「あの、ちょっと聞きたいことがあるんですけど……いいですか？」
と尋ねた。

月影香子も両手を膝の上に下ろし、

「ん？いいわよ」

と答えた。

山坂浩二は布団の下で伸ばしていた両脚を自らのもとへと引き寄せ、正座をするかたちになった。

「えーっと。柳川友子さんって知ってますか？」

「……………知ってるけど？」

月影香子は眉間にしわを寄せ、

「ただの知り合いよ。それ以上でもそれ以下でもないわ」

「そっなんですか？」

「そうよ」

彼女は軽いため息をついて、

「とにかく。あの子についての話はしたくないの。だからもういい？」

と何かを隠すように早口で言った。

山坂浩二はどこか不満げに目を細めた。しかし、彼はすぐに目をもとの大きさまで開いた後、

「はい。ありがとうございました」

と、頭を下げて言った。

月影香子は顔の前にちらついていた自らの髪の毛を、左手でそつと払いのけた。

「私にも聞きたいことがある」

「……なんででしょうか」

「なんで。敬語なの？」

彼女はゆっくりとした速さで尋ねた。

「それは………」

山坂浩二は一瞬言葉に詰まり、

「女の子に対してはそうなってしまうんですよ。なぜだか知りませんが、僕はずっと女の子に避けられ続けているせいで、女の子が怖くなってしまったんです。だから自然と敬語になるんです」

と、早口で答えた。

「ふうん。で、女の子が怖いから私にも敬語ってわけね」

月影香子はため息をつき、

「……ヘタレ」

と山坂浩二に向けて言い放ち、

「まあ、昔から情けなかったわね。見た目も頼りなかった。十年経った今でも変わってないわね、あんた」

と言った。

「……まあ、ときどきかつこよかったけどさ」

彼女の呟きは山坂浩二には聞こえない。

「とりあえず、私からの質問は終わりよ」

「……じゃあ、僕から質問していいですか」

「どうぞ」

山坂浩二は深く息を吸って、息を吐いた。

「昨日、月影さんは傷だらけだったじゃないですか。何かあったかは聞きませんが」

山坂浩二は一呼吸置いて、

「どうして今日は傷が無いんですか」

と尋ねた。

月影香子は眉間にしわをよせ、彼が自分の裸を見たことを怒ろうとした。しかし、彼女は深呼吸をして自分を落ち着かせ、答えた。

「……自己回復能力」

彼女は間を置いて、

「私たち、女の退魔師の能力。退魔師についてはこの前話したけど、あれはほんの一部の例にすぎないの」

「あ、あれですか。男は遠距離攻撃と浄化。女は武器を作って、身体能力を上げて、空を飛ぶってやつですね」

「よく覚えているわね」

月影香子は感心したように言った。

「でも本当は、男の霊力は身体の外に作用して、女の霊力は身体の内にも作用するの。ちょっとあいまいなんだけど。例えば、不可視の状態は女も男もなれる、とか」

彼女は一呼吸置いて、

「男はやろうと思えば、結界を張ったり、遠くにいる仲間に意思を伝えたりできるみたい。女は近接戦闘に特化してるんだけど、生み出せる武器は人によって違うの」

月影香子は両手を真横に広げた。

「例えば私は」

彼女の指が震え、

「日本刀」

月影香子は静かにそう告げた。彼女の両手からはうつすらと何かが現れたかと思うと、それはやがて、現代日本では本来の目的で使われなくなったものへと姿を変えた。

銀色に輝く刀身。黒い鍔^{つば}と柄^{つか}。

二本とも同じ外見をしている。刀身の長さはだいたい男子高校生の平均身長^のの半分ほど。

山坂浩二は顔色を変えず、

「なるほど」

と、言いながら感心していた。しかし、しばらくの無言の後、

「でも、危ないので早く片付けてください」

と、目をだらしなく開けて冷たく言い放った。

これにはさすがの月影香子もひるんだようで、抑揚のない胸を自慢げに張っていた彼女は頭（うづへ）を垂れながら、

「はい、はい、わかりましたよーだ」

と、まるで幼い子供のように言って、両手を震えさせた。銀色に輝く二本の刀はその姿を薄くばやけさせ、やがて見えなくなる。

月影香子の両手から日本刀が消えると、山坂浩二は安心したように“ふう”と息を吐いた。

「いやあ、すごいですね。本物の日本刀なんて初めて見ました」

彼は額の汗を拭うような仕草をし、感嘆した。

しかし、月影香子はキョトンとした表情になり、

「なに言ってるの？浩二。あれは靈力で作ったものだから偽物よ」

真横に広げていた両手を床につけ、

「あれは靈力で刀に似せているだけ。成分は鉄とかじゃなくて本物とは全く違うから、『刀のようで刀じゃない何か』って感じね」

と淡々とした口調で言った。

「じゃあ、いつたいなにできてるんですか？」

山坂浩二は口を尖らせながら尋ねた。

「だから言っただでしょ。霊力だって」

「だから、霊力ってなんなんですか？」

月影香子は顎に指を当ててしばらく考え込んだ。

そして、

「……科学の域を超えた存在？」

彼女は頭を傾げて言った。

山坂浩二はそつと頷き、

「……わかりました。要は幽霊といっしょなんですね。科学では説明できないんですよね」

「そう。科学じゃ説明できないの。でも『存在』してるのは事実。だから、科学で説明したかったら霊的科学っていう分野をつくるべきね」

「まあ、普通の人には見えませんからね。だから幽霊の存在も信じないんですよ。基本、人って目に見えるものでないと信じませんから」

「でも、浩二は信じてるんですよ？」

「ええ、まあ。一応満月の夜だけ幽霊が見えますから。」

山坂浩二は小さくため息をついた。

「信じるか信じないか以前の問題ですよ」

山坂浩二は再びため息をついた。月影香子は睨むような目で彼を見つめ、

「じゃあ、なんで私が退魔師ってことは信じてくれないの？さつき武器だって見せたし、この前は不可視の状態になってあげたじゃない」

「だってまだ月影さんが悪霊と戦うところを見てませんから。まだ、僕にとつては、『刀を出して姿を消したりする十年前の知り合い』でしかありませんから」

月影香子はやや目線を落とした。何かを考えているようだ。

少しの間考えた後、彼女は目線を山坂浩二へと向け、口を開いた。

「明日って、満月よね」

「はい。今月は明日、十八日が満月です」

「……明日の集合は、夜八時にこの家の前の河川敷広場がかまわなのよね？」

「はい、大丈夫です」

月影香子はやや間を置いて、

「……私、ずっと気になっていたことがあるの」

「な、なんですか？」

「この十年間、ずっと悪霊たちの襲撃から逃げてきたんだけど」

彼女は少しためらうように一呼吸置いて、

「満月の夜だけ異様な霊力を感じてたの。かなり強力で、悪霊かも、妖怪かも、人間かもわからないようなものをね」

山坂浩二は何も言わず、ただ黙って彼女な話に耳を傾けていた。

「それはね、なんだか、浩二の霊力に似ているの。でも、なにかが違うの。とにかく変なのよ」

「……確かめに行ったりしなかったんですか？」

「悪霊に追われてそんな暇なかったわよ」

月影香子は首を左右に振り、

「もし確かめに行ったらとして、それが浩二じゃなくて敵だったら。私は人生を振り返る時間もなくて死ぬでしょうね」

と、ため息混じりに言った。

「……それほどまでに強力なのよ」

「……………」

山坂浩二は無言だった。

「だいたい、たかが霊が見えるくらいの霊力を持った人間が、悪霊に襲われないなんてありえない」

「……そうなんですか？」

「動物が食べ物を欲しがるように、悪霊は他の存在の霊力を欲しがるの。でも、一般人を襲っても霊力の収穫は無いに等しい」

「……だから、霊が見える程度の霊力を持つ人間を襲えば、簡単に霊力が得られるって訳ですか」

「その通りよ。だから、あんたが悪霊の被害を受けてないことがおかしいの」

「……どういことですか？」

「悪霊だって馬鹿じゃないわ。絶対に勝てないっていうくらいの力を持つ相手を襲ったりしないわよ」

「つまり、満月時の僕は、それだけの霊力を持っているって訳ですか？」

「……その可能性が高いのよ。だから、明日確かめる」

彼女は間を置いて、

「でも、悪霊たちの霊力が馬鹿みたいに上がる時に、やつらを圧倒するほどの霊力をもつ存在なんて、私が知ってる山坂浩二が妖怪くらいだから」

月影香子は床につけていた手を脚の上に置いた。

「……それに、まだあんたに信じてもらってないから」

彼女はやや目線を下にして、どこか淋しげな表情をした。しかし、すぐに目線を上げ、山坂浩二をまっすぐに見つめる。

「だから、明日の約束……」

月影香子は息を吞んで、

「絶対守ってよね」

その言葉は、山坂浩二に“いいえ”とは言わせないほどの力を持っていた。

その後、二人は別々に家を出て、彼らの通う高原高校へと向かった。

この日、二人は学校で会うことはなく、また、山坂浩二は普段となんら変わらない学園生活を送った。

そして、夕方。

アパートに帰り着いた山坂浩二は、階段を上りきった二階の外の廊下で、自宅の玄関のドアノブにビニール袋がかかっているのを見つけた。

「ん？なんだあれ？」

山坂浩二は一番奥の扉まで歩き、そのレジ袋を手にとった。

中には先日月影香子に貸したジャージと、ハチミツの入った手の平サイズのボトルと、袋で閉じられた食パンがあった。

夕日に照らされながら、彼は袋からジャージを取り出した。すると、何かが床に落ちた。

彼はしゃがんでそれを手に取った。

二つに折り畳まれた小さな紙切れだった。

彼はそれを開いてみた。すると、そこには、

『ジャージありがとう。これ、ほんのお詫び。月影香子より』

とだけ書かれてあった。

山坂浩二はほんの少しだけ笑みを浮かべ、立ち上がって自分の部屋へと入って行った。

そして夜。

入浴を済ませ、今日の晩御飯を用意した山坂浩二は、彼はめずらしく二階の廊下へと出てきた。

彼は、廊下の手摺りに両肘を置いて、目の前に広がる銅鏡川とその河川敷広場を眺めはじめた。

「退魔師か」

彼はため息混じりに呟く。

「俺っていつたいたいなんなんだろうな。何者なんだろうな。満月の時だけ霊が見えて、記憶喪失で、女の子に避けられて、月影さんの話を普通に受け入れるなんて」

彼は空を見上げる。

彼の視線の先ではほとんど満月に近い月が、彼らの住む街を静かに照らしながら夜空に浮かんでいる。

「明日、少しでもわかるといいな」

彼は月を見つめながら願うように言った。

「明日は満月。か」

彼は少し息を吐き、

「約束。守らないといけないな」

しばらくの間、山坂浩二は夜空を静かに眺めていた。

第七章 蜂蜜と食パン（後書き）

次からいよいよ満月の話ですね。だんだんとクライマックスに近づいています。

また、プロローグからこれまで、あまり時間が無いためにほとんど推敲せずに投稿しています。後日、時間があれば修正するつもりです。

非常に読みにくく、退屈な物語ですが、最後まで読んでくださると作者としては大変嬉しいです。

大学受験生がこんな小説書いてて本当に大丈夫なんだろうかね？

第八章 満月

翌日。二月十八日。

山坂浩二はいつものメニューとは違い、ハチミツをかけた食パンで朝食を済まし、登校した。朝から甘ったるいものを食べたせいか、彼は胃に不快感を覚えた。

その不快感は授業中も彼を襲い、とある約束が脳内を廻るなか、ただえさえ集中力を欠いていた山坂浩二のやる気を削ぎ落としていった。

そして昼休み。

山坂浩二は、くせ毛以外に特徴がなく見分けがつきにくい永山と村田とで、窓際に列ぶ自分の机を囲んでいた。

彼の机の上には、購買部のチキン南蛮弁当が二つと、握り飯が入ったプラスチックの入れ物が置かれている。

山坂浩二は手の平サイズの握り飯を右手で掴んで頬張り、永山と村田は右手で箸を扱いながら昼食を口に入れている。

山坂浩二は一つめの握り飯を完食すると、目の前にいるくせ毛の二人組を無言で見つめ始めた。

「……………」

二人はそれぞれ自分の昼食に夢中で、食べ物をお口に入れてはよく噛んで飲み込むのを繰り返している。

「……………」

山坂浩二はしばらく無言だったが、やがて口を開き、

「お前らほんとに見分けつかねえよな。永山プラス村田」

山坂浩二は二人を見比べながら笑い、

「お前ら双子みたいだぞ。しかも一卵性の」

と、女性と接するときとは全く違う、男子高校生が友人と何気なく会話するような口調で言った。

すると、二人は一斉に顔を上げ、箸を持ったまま机に手をつけて身を乗り出し、

「「こ、こんな奴といっしょにするな!!」」

と、お互いを指差しながら山坂浩二に向けて叫んだ。

そして今度は、お互いに視線を合わせ、

「だいたいなあ！ 永山が眼鏡からコンタクトに変えたせいだぞ！」

「違う！ 村田がダイエットなんてするからだ！」

二人は唾を散らし合う。

「そういう永山だって入学当初はガリガリだったくせに！」

「太って悪いか！？」

「痩せ悪いか！？」

「だいたい村田がくせ毛だからいけねえんだよ！！」

「じゃあ、 temeエがストパーかけりやいいじゃねえかよ！ 永山あ
！」

「俺にそんな金はねえんだよ！ temeエがやれよ村田あ！」

「金がねえんだよ！」

「なにおう！？」

「ああ！？」

睨み合い、目線で火花を鳴らす二人。

山坂浩二は両方の手の平を二人に向け、

「まあまあ、二人とも。おさえておさえて」

と苦笑しながら永山と村田をなだめようとした。

しかし二人の言い争いは終わらず、その矛先は山坂浩二へと向けられる。

「「もとはと言えば山坂のせいだろうが!!」」

二人の怒声が教室内に響き、クラスメートの視線が山坂浩二に集中した。じろじろ見られることに耐えられなくなった彼は素直に頭を下げ、

「ごめん二人とも。俺が悪かった」

と、誠心誠意に謝罪した。

熱くなっていた永山と村田は山坂浩二の行為に納得し、一度二人で視線を交わした後、机に乗り出していた身体をもとに戻した。

三人の間に静寂が訪れる。

クラスメートたちも、山坂浩二ら三人に目を向けるのを止め、再び自らの昼食に向き合い、昼休みを堪能し始めた。

山坂浩二はプラスチックの箱から握り飯を掴み、かじり出した。具は入っておらず、味付けは塩のみだ。

そんな、味より量を重視した昼食をとる山坂浩二をよそに、永山と村田はチキン南蛮を美味しそうにほお張っている。

山坂浩二は握り飯を食べながら二人、いや、二人の弁当を見る。

……正直言つて羨ましい。

山坂浩二はごくりと唾を呑んだ。

（ああ、だめだ。他人のおかずをもらっちゃ）

彼は必死で自らの欲望を押さえ付ける。

しかし、目の前では山坂浩二を誘惑する物体が、ピンク色のソースで輝いている。彼にはそれらが手招きをしているようにも見えた。

しかし、彼は頭を左右に振って、

（いや、だめだだめだ！ あれは永山と村田の弁当。あいつらだつて金出して買っているんだ！）

自分自身を説得させようとした。

……でも、もう。

我慢できない！

「なあ、永山、村田」

山坂浩二は二人に呼びかける。

「なに？」

「……分けてくれない？ その……」

山坂浩二はタンパク質を豊富に含んだものを見つめ、

「チキン南蛮」

「絶対いや」

即答で断られた。

山坂浩二は炭水化物の塊を口に放り込み、心の中でしくしくと泣き始めた。

（べつにいいもん。チキン南蛮なんていらないもん。双子モドキの食べかけなんていらないもん。……お昼ご飯はおにぎり四つで上等だい！）

山坂浩二は感情を隠しながら握り飯を掴み、それをほお張る。

自らの昼食に夢中の三人は、しばらくの間無言になった。

元肥満児の村田は、チキン南蛮弁当を完食すると、底が浅く四角い容器に割り箸を入れた。そして、弁当にフタをして輪ゴムでとめる。

彼は、最後のひとつとなった握り飯をほお張る山坂浩二を一瞥し、

続いて村田自身の左隣りに座る永山に視線を移した。

永山の弁当には、チキン南蛮が一切れと一口分の冷めた御飯が残っている。

二人の食事がそろそろ終わりを迎えようとしているのを確認すると、村田は山坂浩二に再び視線を向けた。

「なあ、山坂？」

彼は山坂浩二に話しかけた。

山坂浩二は口をもごもごと動かしながら村田に視線を移す。彼の右手には、半分ほどに減った握り飯が収まっている。

村田は決まりが悪そうに言葉を発した。

「あ、あのさ、山坂」

「ん？」

山坂浩二は口にもものを含んだままで喋られる音で返事をした。

「か、勘違いかもしれないけどさ」

「うん」

村田は大きく息を吸って、

「……月影さんと付き合ってるのか？」

「っ!？」

山坂浩二は動揺したのか、口に含んでいたものを一気に飲み込み、右の拳で胸を叩きながらむせ始めた。

「がはつがはつ。……い、いきなりなにを言い出すんだてめえ！」

山坂浩二は少し涙目になりながら元肥満児の村田を睨みつける。

「んなわけねえだろうが！ だいたい俺が女の子と付き合えるわけないだろ!？ なにいつてんだまったく」

山坂浩二は耳を赤くしながら村田に向かって反抗した。村田は目を丸くして左隣の永山と顔を合わせ、

「えっ!？ そうなの？ この前『B・WAXスーパー』からお前と月影さんが二人で出てきて、しかも並んで帰って行ったって誰かが言ってたからさ」

村田はため息をつき、

「もしかしたら付き合ってたんじゃないの？ って思ったただだよ」

と、少しがっかりしたように目を細めて言った。

元メガネの永山は弁当を完食して村田のように白い容器にフタをした。輪ゴムでとめるときに起こるやや高い音が鳴る。

「でもまあ、ちょっとホツとしたかな」

永山は発泡スチロール製の弁当箱を机に置きながら言った。山坂浩二は永山を細い目で睨み始め、

「なんでだよ？」

と、ややいらいらした様子で尋ねた。

「んーと……」

永山は腕組みをし、

「……ム力つくから？」

「理不尽だ！！」

山坂浩二は永山の返答を聞いた瞬間、椅子に音を鳴らさせながら立ち上がって叫んだ。しかし、永山は平然と、

「理不尽じゃない。だいたい、『自分には彼女が絶対できない』って言ったのはどこのどいつだったっけ？」

と、反撃するかのように尋ねた。

「そ、それはあ……」

山坂浩二は言葉に詰まる。

そして、元肥満児の村田と元メガネの永山は、ここぞとばかりに攻撃を仕掛け出す。

「なんで山坂が女に近寄られないか知らないけど」

「かわいい娘が一人寄ってきただけで調子乗られると困るんだよねえ」

「しかも十年前の知り合いだって」

「胡散臭いよなあ」

「あんなにデレデレしちゃって」

「また、処刑されたいのかあ？」

怪しい笑みを浮かべる二人。

山坂浩二は頭をかきながらため息をつき、

「お前らなあ、俺のことは馬鹿にしてもいいけど、月影さんのことは馬鹿にすんなよ。あの人は俺をからかっちゃいない」

と言った。その言葉にはどこか怒りがこもっているようにも聞こえた。

永山と村田は笑うのを止め、山坂浩二を無言で見つめた後、

「ごめん」

と、わずかに頭を下げて言った。

「いや、そこまでしなくていいから」

山坂浩二は二人に顔を向けずに空を見る。

すると、永山と村田は顔を上げ、

「でもさ、やっぱり」

「山坂に彼女ができたらしたらさ」

二人は再び不気味な笑みを浮かべ、

「天変地異が起こるんじゃないの？」

「いや、日本沈没だあ！」

「あはははははははははは」

声をあげて笑う二人。山坂浩二は彼らに顔を向け、軽くため息をついた。

「……またそのネタかよ」

彼の呟きは笑い続ける村田と永山の耳には届かなかった。

そして、その後は何も変わったことはなく時間が過ぎ、やがて掃除も終わって放課後となった。

山坂浩二はトイレで用を足した後、一年五組の教室へと足を踏み入れた。生徒はクラブ活動に行っていたりそそくさと帰宅したりしたようで、教室には一人もいなかった。

また、窓から見える空は朱く染まっている。夕日が気温の下がった教室内に差し込んでおり、並んだ一部の机を照らしている。

山坂浩二は窓際の列の真ん中に位置する自分の机に向けて歩き出した。夕日が顔に当たると彼は目を細めた。

自分の机に着くと山坂浩二はその上に置かれた黒色のスポーツバックに手をつけた。その時、誰かの足音のようなものが教室内に渡った。

「やまさか？」

彼の名前を呼ぶ女性の声。

山坂浩二はスポーツバックから手を離して後ろを振り向いた。

すると、教室の前側の入り口に山坂浩二より頭一つ分は低い身長で、髪は肩にぎりぎりかかる長さの女子生徒が立っていた。スカート丈は校則で膝下五センチと決められているはずだが、彼女のものは膝をまったく隠していない。

その女子生徒は鼻筋が通っていて、目は大きく開かれ、活発な印象を受ける。

「や、柳川さん!？」

彼女の姿を目にした山坂浩二は驚いたようにその女子生徒の名前を言った。

柳川と呼ばれた女子生徒は眉間にしわを寄せ、

「なにもそんなに毎回毎回驚く必要ないでしょ」

と、ため息混じりに言った。

彼女は柳川友子。女性が近寄ることのできない山坂浩二に近づける数少ない女子生徒。山坂浩二のクラスでは唯一の人物だ。

彼女は教室の入り口からゆっくりと歩き出した。机を避けながら、やがて教室の中央にたどり着いた。

ちょうど、山坂浩二と向かい合うかたちになる。

「ねえ、山坂」

「は、はい!」

何気なく山坂浩二の名前を呼ぶ柳川友子に、彼は大袈裟に返事をした。すると、彼女は再びため息をついた。

「……まあ、あんたが女と会話することに慣れてないから仕方ない

んだろうけど。もう少し楽しいたら?」

彼女は微笑を浮かべて言った。

「……す、すいません。無理です」

山坂浩二は申し訳なさそうに目線を下に向けて答えた。そして、彼は下がっていた目線を柳川友子に向け、

「そ、それより。ど、どうして柳川さんは平気で僕と話したりできるんですか?」

と、少しかみながら尋ねた。

すると彼女はそっぽを向いて、

「いや、平気ってわけじゃないのよ。私だってあんたに近づくと不快感のようなものを感じるわ。ただ、私は他の人とは違って耐えられる。ただそれだけよ」

と言った。

「……どうして、柳川さんだけ耐えられるんですか?」

山坂浩二の問いかけに柳川友子はすぐには答えず、しばらく夕日に染まる空を眺めてから口を開いた。

「……さあね。よくわかんない」

彼女の言葉には抑揚がほとんどなかった。彼女は続ける。

「……それに、近づけるのは私だけじゃないでしょ」

柳川友子の言葉に山坂浩二はほんの少し戸惑った。そして、

「……月影さん、ですか？」

「そ。香子。多分、あんたに近づいて不快感を感じない女って言うたら、香子しかないと思うの」

柳川友子はため息をつく。

「まあ、なんでかは知らないけど」

彼女はわずかな笑みを浮かべた。

山坂浩二はしばらくの間口を半開きにしていたが、

「……す、すいません。あの、一つ聞いてもいいですか？」

「なに？ 別にかまわまいけど」

柳川友子はため息混じりに答えた。

「……月影さんと柳川さんって、いったいどういう関係なんですか？」

山坂浩二は眉をひそめながら強い口調で尋ねた。すると、柳川友子は眉間にしわを寄せて右手を腰に当てた。

そして、山坂浩二を睨みつける。

「昔からの知り合い。それだけよ。なにか文句ある？」

彼女の威圧感を受けたが、山坂浩二はそれごとくでは退かなかった。

「そ、それは月影さんに聞きました。ば、僕が聞きたい答えはそれじゃありません」

「……なに？ 私が嘘ついてるって言いたいのか？」

柳川友子は眼光を鋭くして山坂浩二をさらに睨みつける。彼はあまりの気迫に一瞬身を引いた。

しかし、彼は自らを奮い立たせて再び口を開いた。

「そ、そういうわけじゃありません。た、ただ、僕には、何かそれ以上の関係があるように思えるんです」

山坂浩二の言葉を受けた柳川友子は、表情をもとに戻して無言になった。そして、ゆっくりと彼に背中を向ける。

「ねえ、山坂」

「な、なんでしょう」

山坂浩二は身構えた。柳川友子は視線を上に向けて、わずかに笑みを浮かべる。

「あたしさ、いや、正確に言えばあたしたちはね。運命に逆らおうと必死で頑張ってきたの。香子の気持ちを犠牲にしてさ」

山坂浩二は“話をそらされた”と思った。しかし、彼は無言のまま彼女を見つめていた。彼女は続ける。

「でも、あたしたちみたいなちっぽけな存在じゃ、結局時間を引き延ばすことぐらいしかできなかった」

山坂浩二は、彼女がいったい何について話しているのかわからない。彼は無言のままでいた。柳川友子は山坂浩二のほうに振り向く。

「ねえ、山坂」

「……は、はい」

「あんた、満月って好き？」

柳川友子はわずかな笑みを浮かべ、肩にかかる髪を揺らしながら尋ねた。山坂浩二は一度目線を床に下ろしてから答える。

「……す、好きではないです」

「そうなんだ」

柳川友子は目を閉じて微笑んだ。

そして、わずかな静寂が過ぎ去った後、目を開けた。彼女は微笑んだまますぐ前にある机に目線を下げる。

「実はね。あたしも、あんまり好きじゃないんだ」

彼女は山坂浩二に目を向けた。

「なんかさ、全然落ち着かなくて。なんていうか、明るすぎるのよね。無駄に明るいと思う。あんたはどうして好きじゃないの？」

「……僕も、落ち着かないから……ですね」

「そう。じゃあいいや」

柳川友子はそう言うと、右隣りにある机の上に腰掛けた。彼女は両手を机につけて教室後方の黒板を眺め始める。

「……あんたさ、香子と出会ってから随分変わったね」

「……そうですか？」

「うん。なんていうかさ、楽しそうに見えるんだ。それに、あたしが話しかけてもまともに対応できてる。前はできなかったくせにね」

柳川友子は机から腰を離して床に足をつけた。体は教室後方に向けてたまま顔を右に向けて山坂浩二を見る。

「あたしね、山坂にとって、今は人生のターニングポイントなんじゃないかなって思う」

「……そうですか？」

「うん」

柳川友子は一度、ゆっくりと息を吐いた。

「人生つてさ、人との出会いで変わると思うんだ。だから、山坂が月影香子と出会うことは、あんたの人生を大きく変える。いや、もうすでに変わっているのかもしれないわね」

柳川友子はそう言うと、顔を再び教室後方の黒板に向けた。

「多分、人生が変わるのはあんたたち二人だけじゃない。多くの人の生活が変わる」

山坂浩二は彼女の言っていることがわからず首を傾げた。柳川友子は続ける。

「でもね、山坂。そんなことは気にしないで」

彼女は山坂浩二に体を向ける。

「……香子を、大切にしておいて。それはあんたにしかできない」

彼女の目には、心なしか涙が浮かんでいるように見えた。

「山坂。あんたはとっとと帰りなさい」

柳川友子は窓越しに空をみる。夕日は弱まり、薄暗くなってきた。いる。

「もう暗いから」

山坂浩二は後ろに振り向く。空を見た後、体を柳川友子に向けた。

「……いいんですか？」

「いいわよ。それに、あんた満月好きじゃないんですよ。出てくる前に帰りなさい」

柳川友子は笑みを浮かべて言った。山坂浩二は黒いスポーツバツクを肩に掛けると頭を少し下げた。

「それでは、失礼します」

「じゃあね、山坂。気をつけて」

柳川友子は山坂浩二に向けて小さく手を振る。山坂浩二は出口に向かつて歩き、出口のところで柳川友子にもう一度頭を下げた後、走りだした。

山坂浩二の姿は見えなくなり、教室には柳川友子だけが残っていた。

彼女は指を組んで両手を真上に上げて伸びをした。両腕を下ろし、教室後方のロッカーに向けて歩き出す。

「さてと、あたしもいかなきゃ」

彼女はロッカーから手提げ鞆を取って、教室出口に向かう。

「……もう、あたしは逃げない。別の方法で運命に抗ってみせる」

彼女は薄暗くなった教室を後にした。

山坂浩二は走った。

二階の廊下を走り、階段を駆け降り、校舎から抜け、校門を突破した。

辺りは暗くなり、歩道を歩く人や道路を走る自動車も増えてきた。しかし、彼はそのようなことは気に留めずに走り続ける。

途中、何度か自転車とぶつかりそうになり、ブレーキの音が鳴った。彼はそのたびに“すいません”と言って再び走り出した。

そして、第一の信号に差し当たった。二車線道路を横断するのに、かなりの待ち時間が必要だ。

急いでいるときに限って信号は光の色を変えてくれない。

（くそっ！ 早くしろ！ 早くしないと満月が！）

山坂浩二は空を見上げた。その瞬間、彼は目を見開いた。

（う、嘘だろ？）

彼の目に映ったのは、夜空に浮かびながら異様な光を放つ満月。

（冗談じゃねえ！ もう幽霊が見えてしまう！）

山坂浩二は顔を下げ、車道の信号を見る。ちょうどその時、光は青から黄へと変わっていくところだった。

やがて黄色は赤になった。しかし、歩道の信号は赤い光を出したままだった。山坂浩二は齒ぎしりをする。

そして歩道の信号が青く光った。向かい側の人々が文句のあるような目線を向けてくるのを気にせずに、山坂浩二は走り出した。

走行中の自転車との衝突を避けながら、電灯の灯った商店街を走り抜け、二つ目の信号に差し当たる。

山坂浩二が横断歩道の一手前に着いた瞬間、歩行者用の信号は光の色を赤に変えた。そして、自動車が彼の目の前を高速で過ぎ去り始めた。

「くそ！　なんでこんなときに！」

山坂浩二は息を切らしながら、赤く光る信号を睨んで叫んだ。

彼の目の前にある道路は国道。中央には路面電車の線路が走っている。先程の信号に比べてここのは赤い時間が長い。

山坂浩二はただ待ち続けた。

一秒が一分に感じられるほどだった。

信号の色が青に変わると、山坂浩二はアスファルトの地面を蹴って走り出した。向かい側からは人はあまり歩いては来ない。

山坂浩二は国道を抜け、通学に使っている小さな道路に足を踏み入れた。人工の光が急に少なくなる。

「ここからが、本番だな」

山坂浩二は息を切らしながら呟く。彼はその足を止めない。

彼はいつも利用しているコインランドリーの店を通り過ぎた。店内から漏れる光は山坂浩二を一瞬だけ照らす。

彼は街灯の少ない道路を走り抜け、坂道を駆け上がり、坂道を駆け降りた。彼の目には銅鏡川、枝になにもつけていない桜の木々、車がようやく一台通れるくらいの横幅の道路が映った。

山坂浩二は立ち止まって空を見上げた。そこには妖しく輝く満月。夜だというのに辺りは不気味なほど明るい。

彼は顔を戻し、走り出そうとした。

しかし、彼の目の前には、

今日最も怖れていたものが姿を現した。

人のような姿をし、服も着ている。髪は顎のあたりまで伸び、両腕は体の前でだらりと垂れている。

その姿は、透けている。

「……ゆ、ゆうれい」

山坂浩二は顎を震わせながら呟いた。

彼はその姿を見つけると、一目散に家へ向けて走り出した。

幽霊は追ってこない。

山坂浩二は全力で走る。冷たい風が彼の顔に吹き付けてくる。

彼は走りながら辺りを見渡した。さまざまなところに、普段は見えないものが存在している。空中を泳ぐように移動するもの。佇んでいるもの。さまざまだった。

それらの姿は透けて見える。

もちろん、人型のものだけではない。四本足のもの。かたちが定まらず、丸くなったり細長くなったりするもの。その姿もさまざまだった。

それらは、走る山坂浩二に近づこうとはしない。

しかし山坂浩二は何も考えずに、ただ家にたどり着くことだけを目標にして走り続けた。

そして、彼の目には未来橋が映った。橋の上では、等間隔に並べられた街灯が光を放っている。

山坂浩二は未来橋に向けていた顔をもとに戻し、前を見ながら走る。橋の辺りでも、透明なものが何体か空中を泳いでいた。

橋の近くの坂道を駆け上がり、自動車が車道を走っていないのを確認すると、両側に一車線ずつの道路を横切り、坂道を下っていく。

ここまで来ればあと少し。

山坂浩二はさらに走りを速めた。

呼吸は荒くなり、寒いのににもかかわらず、額からは大粒の汗が垂れている。山坂浩二は学生服の袖でその汗を拭う。

そして、河川敷広場のあたりまでたどり着く。やはりそこにも透けて見えるものたちがいたが、山坂浩二はそれらに目をむけない。

彼は、河川敷広場の道路側に植えられている桜の木の列に沿って走る。そして、その列の終わりの前に佇むアパートに向かい始めた。

すぐにアパートにたどり着き、外の階段を駆け上がり二階の廊下に足を踏み入れた。彼は走る。

そして、一番奥の扉の前まで来ると、彼はズボンのポケットを慌てて探り出した。急いだせいか、扉の鍵はなかなか出てこない。

彼はポケットから鍵を取り出すと、それを鍵穴に差し込もうとする。しかし、なかなか差し込めない。

手が震えて鍵が言うことを聞かない。

「くそ！ はやく、はやくしろ！」

彼は震える右手で掴んだ鍵を、何度も何度も鍵穴付近に当て続けた。そしてついに、鍵が穴に入り込んだ。

彼は鍵を回して開けた。鍵を穴から抜き出し、扉を押し開けて中に入った。暗い部屋の中、手で壁を触り、電灯のスイッチを探る。

手を動かしているうちに、指がスイッチに当たり、なにかを弾くような音がすると同時に部屋に明かりが灯った。

山坂浩二は靴を玄関に脱ぎ散らかし、扉をありったけの力を込めて勢いよく閉めた。そして鍵を閉める。

山坂浩二は肩に掛けていた黒のスポーツバックを床に降ろすと、そのまま玄関の扉にもたれながら座り込んだ。

「ふう」

山坂浩二は学生服の袖で額の汗を拭った。袖に取り付けられたボタンが肌に触れる。

山坂浩二は腕を下ろし、左ポケットから黒色の携帯電話を取り出して開き、液晶画面に映る時計を見る。

月影香子との約束の時間まで一時間以上もあつた。

山坂浩二は携帯電話を折りたたんで左ポケットに突っ込んだ。両腕で膝を抱え、膝の間に顔をうずくめる。

彼は震え出した。

「……怖い」

息が荒くなる。

「……怖い」

彼は顔を膝に押し付ける。

「……もういやだ。……幽霊なんて見たくない。……見えなくていい。……見えなくてもいいのになんで見えるんだよ……」

彼の震えは止まらない。

「……な、なんで満月のときだけなんだよ。……そんなのだったら、いつそのこと、いつも見えたらいいのに」

膝を抱え込む力がよりいっそう強くなる。

「……どうしてなんだよ。……なんでこんなに怯えないといけない

んだよ。……意味わかんねえよ。俺っていったい何者なんだよ」

彼の声を聞くものはいない。

孤独感が彼を襲った。

「……月影さん。……助けて」

彼は四日前に出会った女性の名前を、震える声で呼んだ。

その後も、山坂浩二は玄関の扉に背中をもたれかけたまま膝を抱えてうずくまり、震えていた。

何度も何度も携帯電話を開き、時刻を確認したが、時間は思った通りには進まなかった。彼は携帯電話をポケットに入れるのをやめ、手で持ち続けた。

果てしなく長い時間が流れていく。

そして、時刻は19:55。

山坂浩二は携帯電話を左ポケットに入れて立ち上がった。

扉を開け、電気を消し、外へと踏み出す。

満月によって照らされた夜が、山坂浩二のもとに冷たい風を送り込み、彼の体温を徐々に奪っていく。

彼は鍵を閉め、廊下を歩き出した。

山坂浩二は自分でも驚くほどに落ち着いていた。もう、震えてもいない。怯えてもいない。弱音も吐かない。

彼は確信していた。

月影香子は嘘などついていないことを。

彼女は必ずくることを。

山坂浩二は月影香子を信じて、階段を下りる。道路を横切り、道路に沿って並んでいる木の間を通り抜けた。

目の前には、芝生が広がり、その向こうには銅鏡川の水面が満月に照らされているのが見え、対岸には木々がならんでいる。

満月によってなにもかもが暗闇を奪われ、その姿を晒す。暗闇の代わりに青い光が辺り一面を満たしていた。

山坂浩二は佇む。

透明なものが見えても気にしなかった。

彼は空を見上げ、満月を眺める。そうすると、月影香子と出会ったからの日々が思い出された。

一日目は銅鏡川に落ちて溺れていた彼女を川から引き上げ、とまどいながらも家へ連れていき、冷めた体を風呂で温めてもらった。

初対面の彼女に名前を呼ばれてびっくりした。彼女の話はあまりにも非現実的すぎて信じられなかった。

信じなかったらケンカになった。それで、彼女が退魔師だということを実証するために満月の夜に会おうという話になった。

二日目は大変だった。

夢だと思っていたら夢じゃなかった。嫉妬に狂った理系男子たちに追い回された。彼女の身体能力はすごかった。

帰りに捨ててチョコを貰った。夜、スーパーで会って一瞬に帰った。こたつが壊れた。チョコが美味しかった。嬉しかった。

それで、自分と彼女は十年前に出会っていたということを信じた。

三日目は、クラスメートの柳川友子と話した。なにか裏がありそうだった。でも教えてくれなかった。

家に帰って退魔村について調べた。月影香子がきずだらけで訪ねてきた。慣れなかったけど、治療した。

彼女が自分の家に泊まった。寝言が、まるで自分を責めているかのようだった。

四日目は、彼女とどたばたした朝を過ごした。手から日本刀が出てきたときは冷や冷やした。学校から帰ったら、ジャージと食パンとハチミツがドアにかけられていた。

そして今日。

満月。

山坂浩二はこのときだけ幽霊が見える。彼はこのときをずっと待っていた。彼女の言うことを信じたいから。

そして、今がそのとき。

彼は満月を眺めながら月影香子の到来を待つ。

そして、空に一つの黒い点が見えたかと思うと、その点は降下を始め、猛スピードで山坂浩二に近づいてきた。

山坂浩二にはそれがなんなのかわからなかった。

それは、一瞬のうちにして山坂浩二の前のやや離れたところに着地した。

突風が発生し、河川敷広場の芝生が揺れる。彼は顔を両腕で隠した。

その風はすぐに止んだ。山坂浩二は両腕から覗き込むようにして目の前を見る。

そして、そこには。

腰まで届く髪を風で揺らしながら、山坂浩二に横顔を向けて佇む月影香子がいた。片手に一本ずつ日本刀が握られている。

彼女の姿は透けていた。

第八章 満月（後書き）

……やっと。

やっと次からクライマックスですね。ここまで本当に長かったです。

あまり失敗しないように頑張りますが、期待しないで待っていてください。

ちなみに、プロローグを大幅変更しました。（2011年10月2日）

第九章 約束の時

「……やっぱり。やっぱりあんだだったのね。この霊力」

月影香子は左半身を山坂浩二に向けた。そしてため息をつく。

「なんか損した」

山坂浩二は月影香子を無言のまま見つめていた。彼女の姿は透け、両手には銀色に光る日本刀が一本ずつ握られている。そしてその日本刀も透けていた。

「浩二？」

「……はい、はい」

月影香子の呼びかけに、山坂浩二はやや間を置いて反応した。彼女は山坂浩二に体を向けて口を開いた。

「見えるんだね。……満月の夜だけ幽霊が見えるっていうのは嘘じゃないんだね」

「……はい、見えてます」

山坂浩二は返事をした後、

「でも月影さん。それって……」

なにかを尋ねようとしたが、山坂浩二はその先が言えなかった。

月影香子は自らの胸を見下げた後、再び彼に視線を向ける。

「ああ、これ？　これが不可視の状態。これで普通の人間に見られることはないし、あたしが言ったこととか、あたしが出した音とかも聞こえない。便利でしょ？」

月影香子は微笑を浮かべて山坂浩二に問いかけた。しかし、彼はあいまいな笑みを浮かべるだけで何も言わない。

「……なによ？　なんか文句あるの？」

「い、いや、ないです。ありません」

山坂浩二は数回首を横に振りながら否定した。

「ふうん。あ、でも、あんたがあたしに話しかけても、普通の人には浩二が独り言を言ってるようにしか聞こえないから気をつけて。……まあ、今はいいけど」

月影香子はため息をつく。

「あと少ししたら悪霊たちがあたしを追ってここにくるから。今、あいつらの強さは別格だから、五分したらあたしは逃げる。まともになっても、あたし一人じゃ勝ち目ないからね。それに、女だけじゃあいつらをこの世から消すことはできない。だから、五分の間にあたしの戦いを目に焼き付けておくこと。いい？」

月影香子はよほど焦っているのだろうか、間を開けずに言った。山坂浩二はわずかに間を置いて、

「……つまり、今の悪霊は強すぎて、存在を消せなくて、女一人じや太刀打ちできないってことですか？」

と尋ねた。月影香子は一度だけうなずいた。

「そう。だから五分だけ。……ちなみに、満月の夜じゃなくても、あたしには逃げるしか方法がないの」

「……やっぱり、存在を消せないから、ですか？」

「そう。浄化できないから」

月影香子はそう答えると、腰まで届く髪を揺らしながら山坂浩二に背を向けた。彼女は空を見上げる。

「……そろそろ来るわよ」

彼女の声はやや震えていた。

「見てなさいよ。ちゃんと、あたしが『退魔師』ってことを証明してあげるから。絶対に信じてよね、浩二」

「……は、はい。あ、あの……」

「なに？」

「僕は、悪霊に襲われたりはしないんでしょうか？」

山坂浩二は寒さと恐怖で体を震えさせながら尋ねた。彼の質問に、月影香子は背を向けたまま答える。

「そんなわけないでしょ。あんた今、あたしより遥かにデカイ靈力
持つてるんだから。絶対に襲われない」

「……だ、大丈夫なんですね」

「……多分、ね」

月影香子は自信をなくしたのか、あいまいな返事をした。

「でも、たった五分だから。大丈夫」

彼女の言うことに、山坂浩二は小さくうなずいた。

「……もう、のんきにおしゃべりしてる場合じゃないわね」

月影香子は空を見上げながら呟く。

山坂浩二は満月の浮かぶ空を見上げた。すると、月の光に照らされたなにかが、無数の黒い点となって浮かんでいるのが見えた。

月影香子は夜空を見上げたまま、腰を少し落として二本の刀を構えた。

「……来る」

そして、彼女の呟きと同時に。

黒い点となっていたものが二人に向かって急降下を始めた。

山坂浩二と月影香子はその集団を凝視する。やがて黒い点にみえていたものたちの姿が明らかになった。

人型。赤く光る目。服のようなものは着ておらず、全体的に黒色をしている。両手の指の先からはかぎ爪が生えていて、この世のものとは思えないほど歪んだ表情をしていた。

山坂浩二は震え上がった。

（こ、これが悪霊。……まさか、月影さんは本当にあんなのと戦うのか！？）

彼は月影香子の後ろ姿に視線を移した。冷たい風によって腰まで届く黒い髪が揺れている。彼女は構えを崩さない。

そして、五階建ての建物ほどの高さまで悪霊たちが降りてきた。月影香子は腰をさらに落とし、地面を蹴って跳び上がった。

彼女は悪霊たちと同じくらいの高さまでたどり着くと、目の前にいた人型の悪霊を右手の日本刀で外から内へと横一文字に切りつけた。

悪霊の身体から黒いものが、まるでそれが血であるかのように噴き出す。

しかし、悪霊はその姿を揺らがせたただけですぐにもとに戻った。

そして再び月影香子にかぎ爪を突き立てようと襲い掛かる。

月影香子はその悪霊の右手を霊力で作った左手の日本刀で受け止め、それを力づくで払いのける。

そして、彼女を取り囲んでいた悪霊たちを右手の日本刀で一斉に薙ぎ払った。その後すぐに右方向に空を翔ける。

五、六体ほどの黒い姿が切り口を中心に揺らいだが、すぐにその姿を整えて月影香子の後を追いつめた。

月影香子は空中で急停止すると、右後ろに体をねじり、右手の日本刀で追ってきた悪霊たちを横一文字に切り伏せる。

そして、姿が揺らいでいる悪霊の間を猛スピードで突破する。すれ違いざまに彼女はそれらを両手の日本刀で切り払っていった。

山坂浩二は見とれていた。

月影香子と異形のものたちが繰り広げる、満月を背景にした空中戦に。そして、空中を縦横無尽に翔ける月影香子に。

「……すい」

山坂浩二の口から思わずため息が出る。

「……月影さん、……本当に空を飛んでる。本当にあの刀で戦ってる」

彼は空を翔けながら二本の刀を振るう月影香子を眺める。すると、彼は彼女の周りにいる悪霊の数が減るところか増えていることに気がついた。

戦いの始まりに比べて、月影香子が攻撃を防ぐ回数が増えている。

「……月影さんだけじゃ無理なのか。……あいつらを消すことはできないのか」

山坂浩二は拳を握りしめた。

自分はただ見ることしかできない。

何もできない。

それが悔しかった。

月影香子の周りには、始めに比べて約二倍の数の悪霊がいた。それらは切っても切っても消滅せず、距離をとったところでまた別の悪霊が前に現れる。

もう、彼女から攻撃を仕掛けることはできなくなっていた。

防戦一方。

月影香子は悪霊の攻撃を片手の日本刀で防ぎ、もう片方の日本刀で切った後、距離をとる、ということを繰り返していた。

疲労の色が見えてきた。

彼女は息を切らす。

また悪霊の攻撃が彼女を襲った。二体同時攻撃。彼女は両手の日本刀でその攻撃を防ぐ。しかし、逃げられない。

それらの腕を払いのけた直後、二体の間からもう一体の悪霊が彼女に向けて突進してきた。

防御が間に合わない！

その悪霊の拳が月影香子の腹部に直撃した。

強烈な一撃！

耐え切れず、彼女はビル五階建ての高さから真っ逆さまに落下を始めた。

「月影さん！！」

山坂浩二は叫んだ。

しかし、月影香子は頭を地面に向けたまま落ちてくる。

もうだめだ！

山坂浩二はきつく目を閉じた。

しかし、月影香子は地面からわずか二メートルほどのところで後

方宙返りをして両足から着地した。彼女は地に足をつけて体勢を立て直す。

山坂浩二は目を開けた。

「月影さん！　大丈夫ですか！？」

山坂浩二は月影香子のもとに駆け寄った。しかし彼女は山坂浩二に顔を向けない。腰まで届く黒髪を風で揺らしながら空に浮かぶ悪霊を睨み続ける。

「うるさいわね。今の浩二に心配なんかされたくないわよ」

彼女はそう言い残し、空に向かって再び跳び上がった。月影香子の前に異形のもものが立ち塞がるが、彼女はそれを右手の日本刀で切りつける。

その直後、二十体ほどの悪霊が彼女を取り囲んだ。

そして一斉に襲い掛かる！

月影香子は咄嗟の判断で遙か上空を目指して、上方向に飛んだ。上がる。上がる。山坂浩二からは黒い点にしか見えなくなるところまで上がる。

悪霊たちも彼女を追う。

月影香子は上昇をやめ、振り向いた。両目を閉じ、呼吸を整える。満月に照らされた黒髪が風で揺れる。

一瞬の静寂。

彼女は目を開ける。

そして、日本刀を持った両手を真横に広げ。

急降下！

彼女を追って上昇していた悪霊たちに向かって、月影香子はただ突き進むのみ。

そして、彼女と悪霊の集団が衝突！

彼女の二本の刀が、悪霊たちを容赦なく分断していく。

それらの姿が大きく揺らぐ。

月影香子は悪霊の集団を突破した後も降下を続け、やがて山坂浩二の前へと降り立つ。彼女は息を切らしている。

「浩二」

彼女は山坂浩二の目を見つめる。

「は、はい」

「あたしもう逃げるから。あんたはさつさと家に帰りなさい。もう信じたでしょ。あたしが退魔師ってこと」

山坂浩二はうなずいた。

「はい。……今まで疑ってすみませんでした」

彼は頭を下げる。

月影香子は微笑んで、

「いいのよ、べつに」

と言ったが、ため息をついた。

「まあ、ほんとほは浩二も退魔師なんだけどね。女と男の両方の靈力をもった、普段は靈力最弱、満月の夜だけ靈力最強のね」

月影香子は山坂浩二を見つめて言った。彼は何も言わない。

「バイバイ。浩二。……また、今度」

「……さようなら。月影さん」

山坂浩二は手を振らない。ずっと月影香子を見つめていた。

彼女は髪を揺らして山坂浩二に背中を向けた。満月の浮かぶ夜空を見上げる。彼女の視線の先では、悪霊たちがうごめいていた。

月影香子は顔を下げた。

「……浩二」

彼女は右半身を山坂浩二に向けながら言った。

二人の目が合う。

一瞬の静寂。

そして……。

「浩二!!」

月影香子は叫んだ。

山坂浩二は、なぜ彼女が自分の名前を叫んだのかわからず、眉をひそめながら月影香子を見つめる。

「後ろ!!」

月影香子は叫ぶ。山坂浩二は顔を後ろに向けようとした。

しかし。

彼は背中になにかの衝撃を感じ、続いて胸の辺りが熱く感じた。口から温かいものが溢れてくる。彼は自らの胸を見下ろした。

……腕？

腕のようなものが生えていた。

それは指先に長い爪を持ち、腕全体が赤い色をしている。

それが、学生服の第二ボタンを飛ばし、服の間を通過して自分の胸から生えていた。

……生えている？

違う。これは。

貫通している。

背中から胸へ、と。

体を突き破って。

山坂浩二はその腕を、信じられないといった目で見下げる。口から赤黒い液体が勝手に流れ出てくる。

声が出ない。

胸が熱い。

山坂浩二は顔を上げて少し離れたところにいる、月影香子に目を

向けた。

彼女もまた。

信じられないといった目で彼を見つめていた。

山坂浩二は思う。

例えどれだけ力を持っていたとしても。

使えないのならば。

戦えないのならば。

意味がない。

だから。

そんな自分を誰かが。

襲ってみようという気になっても。

不思議じゃない。

だから自分は襲われたんだ。と。

今の自分は。

悪霊にとって。

ただの御馳走でしかないのだ、と。

山坂浩二の胸から腕が引き抜かれた。

口から血が溢れ出る。目の前の景色が霞んでいく。山坂浩二の体からは完全に力が抜け、ゆっくりと地面に膝をついた。

彼は不明確な視界の中でも月影香子を見つめる。彼女もまた、山坂浩二を見つめたまま立ち尽くしていた。

山坂浩二は月影香子の姿をその目に焼き付けようとする。

死ぬことはわかっていた。

もう、生きられないのはわかっていた。

でも。

なぜか。

最期の最後まで彼女を見ていたかった。

目が離せなかった。

しかし。彼の体は重力に従って地面と接触した。うつぶせの状態になり、もう顔を上げることもできない。

力が入らない。

それでも山坂浩二は。

意思の力で右手を動かし、月影香子へとその手を伸ばす。

少しでも二人の距離を縮めようと。

せめて最後に。

彼女に触れたかったから。

彼女の手に。

触れたかったから。

だが。その願いは叶わなかった。

彼の腕は重力に逆らえずに地面に落ちた。

もう。動けない。

意識が薄れていく。

そして。

月影香子の絶叫が聞こえた。

長い。長い絶叫。

だが。もうそれさえも聞こえなくなっていく。

(……つ、き、か、げ、さん……)

彼は心の中で彼女の名前を呼んだ。

それを最後に。

山坂浩二の意識は途切れた。

暗い。

暗い海の底にいるような感じ。

どっちが上かもわからない。

ここは……………どこだ？

……………ああ、そうか。

俺は死んだんだ。

胸に穴が空いて死んだんだ。

悪霊に殺されたんだ。

今まで幽霊が見えても襲われることなんてなかったのに。

……………違う。

幽霊に襲われることがなかったから、

俺は今まで生きてこれたんだ。

襲われたらその時点でもう死んでる。

実際、死んでるし。

……………なるほど。

だからか。

だからあんなに幽霊が怖かったんだ。

襲われたら死ぬことが本能的にわかっていたから怖かったんだ。

だから俺、山坂浩二は死んだんだ。

でも。

やっぱり。

もっと生きていたかった。

人生の終わりがこんなにも唐突に訪れるなんて。

……最悪だよ。

人生を振り返って、その振り返った人生を噛み締めながら最期を迎えたかった。

……もつとも。

噛み締めるほどの人生じゃないけどね。

目覚めたら知らないおばさんが目の前にいた。

その時俺は六歳だった。

自分の名前が『山坂浩二』ということしか覚えてなかった。

両親はいなかった。

おばさんも積極的に俺に近づこうとはしなかった。

……してくれなかった。

寂しかった。

小学校に通うようになってから、男友達はたくさんできた。

楽しかった。

寂しくなかった。

でも。

女の子の友達是谁ひとりとしていなかった。

みんな、俺に近づかなかった。

みんな、俺が歩いていると離れていった。

女の先生も俺に近づこうとはしなかった。

どの女性も俺に近づこうとはしなかった。

つらかった。

ほんとにつらかった。

理由がわからないから余計につらかった。

高校生になっても相変わらずだった。

慣れてても、つらいものはつらい。

柳川さんが話しかけてきたときは、心臓が破裂するかと思つぐらいびつくりした。

でも、柳川さんもあんまり長くは話してくれなかった。

俺に女の子は近寄らないということを改めて感じた。

付き合ってるやつらを憎む気持ちさえ生まれて来なかった。

だって。

いくら妬んだって。

自分には関係なかったから。

でも。つらかった。

満月の夜はもつとつらかった。

その時だけ幽霊がみえてそれに怯えて。

みんなのように満月を楽しむこともできなかった。

自分がわからなくなった。

今思い出してみると、なんだか記憶が薄い気がする。

いい記憶がほとんどなくて、悪い記憶ばかりだ。

……だから、記憶が薄いのだろうか。

人の記憶の割合は、いいものが悪いものより圧倒的に高いらしい。

……だから、記憶が薄いのだろうか。

じゃあ、なんで。

四日前からの記憶が鮮明に残っているんだろうか。

月影さんと出会ってから。

あの人に振り回された。

振り回され続けた。

あの人は何を考えているのかわからなかった。

正直言っ て意味がわからなかった。

なのになんで。

こんなに覚えているんだろう。

……ああ、そうか。

楽しかったんだ。

あの人に出会ってからの日々が楽しかったんだ。

あの人は俺に積極的に接してくれた。

もう。それだけで十分だよ。

それだけで楽しかったんだよ。

あの人が近くにいるとそれだけで。

暖かくなった。

心躍った。

ときどきした。

この気持ちなんなのかわからない。

けど。たしかに言えることがある。

あの人もっと一緒にいたかった。

今さら気づいても遅いよな。

なんで今まで『楽しかった』って気づかなかったんだろう。

気づけよ、俺。

気づけよ馬鹿。

もしかして……これが噂の走馬灯ってやつか。

たいしたことないな。

だって俺の人生だもん。

嫌な思い出ばかり。

人生って、いいことと悪いことの割合は同じじゃなかったの
だろうか。

もしかして、これからいいことが沢山あるのだろうか。

……あつたのだろうか。

だとしたら心残りがあるよな。

でも。俺はもう死ぬ。

……諦めようか。

おとなしく運命に従おう。

……それでいい。

結局。俺があの時、ヘンタイどもに追いかけられた時に、月影さんに言おうとした言葉の意味がわからなかったけど。

なんで俺が女の子に避けられるのかがわからなかったけど。

なんで満月の夜だけ幽霊が見えるのかは、はっきりとはわからなかったけど。

……もう、いいや。

バイバイ。この人生。

バイバイ。みんな。

……さようなら。月影さん。

なんだ？ あれ。

………光？

なんだろう。

なんだか俺を包み込もうとしているみたいだ。

どんどん大きくなっていく。

目の前が白い光で満たされていく。

そして、光が俺を飲み込んだ。

夕日に照らされ、俺は坂道を上っていく。

道は褐色の土からできていて、道の両側には少し丈の高い草が並んで生えている。そして草の向こうには木々が乱立している。

どこだろう、ここは。

………山の中か？

俺は首を動かそうとした。しかし、動かない。他の場所も自分の身体のはずなのに、思った通りには動かない。それに、手足も短い気がする。

夢のような感じ。

俺の身体は、俺を無視して坂道を上っていく。

やがて平らな場所にたどり着いた。

褐色の部分が円形に広がっていて、中央には幹が太く背の高い木が一本、堂々と立っている。広場は草と木に囲まれている。

そして、その大きな木にもたれ掛かって立っている、一人の少女がいた。五歳ぐらいだろうか。あと、髪は腰ぐらいまである。彼女はうつむいている。

どこかで見たような気がする。

俺は彼女に向けて歩いていく。

その少女と二メートルほど離れたところまで来ると、俺は歩くのをやめた。

「……きみが、つきかげきょうこ?」

俺の口から出た音は、女の子のように高かった。

少女は顔を上げて俺を見る。

「……やまさか、こっじ？」

少女は尋ねた。

「そうだよ。よぶときはしたのなまえていいからね」

俺は答えた。すると、少女は木にもたれ掛かったまま後ずさりを始めた。怯えたように彼女は頭を左右に振る。

「い、いや。……こないで」

「どうして？」

俺は少女との距離を詰める。彼女は後ずさりを続けたが、足がもつれたのだろうか、尻餅をついた。

少女は褐色の土に両手をつけ、怯えたように俺を見上げる。

「……だ、だって。あなた、みんながあなたをまものだっていつてる。……まんげつのよるだけ……つよくなるから」

彼女は震える声で言った。

「……ぼくは、まものじゃないよ。にんげんだよ？ それに、つよくなるのはあのとときだけ。いまはさいじゃくだよ？」

俺は続ける。

「それに、きょうこだってつよいんでしょ？ おとなにまけないくらいつよいんでしょ？ なんでこわがるの？」

「……だって……あなたもわたしを、いじめるつもりなんでしょ？」

「……なんで、そうおもうの？」

「みんなが、わたしをいじめるから」

彼女の目に、涙が溜まる。

「……それじゃあ、きょうこもぼくをいじめるつもりなの？」

「な、なんで？」

「だって、ぼくもいじめられてるよ。むらのみんなにきらわれてるよ？」

「……あ、あたしだって」

「それに、おとうさんも、おかあさんも、おにいちゃんもいないよ」

「……あ、あたしだって」

「ぼく……すごくさみしいんだ」

「わ、わたしもさみしい」

俺達の間、つかの間の静寂が訪れる。

「ぼくね、きょうこことペアになれていわれてうれしかったんだよ」

「な、なんで？」

「……ひとりぼっちじゃなくなるから」

「……それだけ？」

「うん。きょうこはどうおもったの？」

「………こわかった」

「はは、やっぱり」

俺は頭をかいた。

「ねえ、きょうこ？」

「……なに？」

「そのかみ、きれいだね」

俺がそう言うと、少女は顔を赤らめて俺から顔を背けてしまった。
彼女は無言のまま、大木と地面の境目を見つめている。

「ねえ、きょうこ？」

俺は名前を呼んだが、少女は反応しない。俺は一呼吸置いた。

「ぼくと、ペアになってくれるかな？」

少女は顔を上げた。驚いたような顔をして俺を見つめている。

「……あ、あたしなんかで、いいの？」

「うん。『たいまし』、がんばろうよ」

「ほんとに？ いいの？ わたしでいいの？」

「いいよ。ずっといっしょだよ。きょう」。いっしょにいてあげるよ」

俺は彼女に手を差し延べた。

「……あ、ありがとう」

少女は両目から涙を流し始めた。さっきまで地面にっていた両手を離し、土をはらって服の袖で涙を拭った。

そして、彼女は俺の手を掴んだ。

立ち上がった。俺と同じぐらいの身長だった。

俺達は見つめ合う。

「……よろしくね。きょう」

「よろしく。………」

少女は少しの間うつむいた。そして顔を上げて俺の目を見つめる。

「ねえ、こっじ？」

「なに？」

「……ずっといつしょにいてくれるんだよね？」

「うん」

少女は笑みを浮かべる。

「約束だよ」

「うん。約束する」

俺達はお互いの手を握って、見つめ合った。

暗転。

目の前には褐色の平らな道、右側には田んぼが広がり、左側には木々が並んでいる。辺りは夕日に染まり、ヒグラシの心地よい鳴き声が聞こえてくる。

なんだろう。地に足がついている感じがしない。誰かが俺をおんぶして歩いているんだろうか。体が揺れている。

……また。夢なのか。

いや、記憶かもしれない。

夢にしては鮮明だし、記憶だったら動くとしても動けないことの理由になる。よくわからないけど。

多分、記憶だと思う。

さっきのやつも記憶なんだろう。

そんなことを考えていると、いつの間にか俺を背負っている人の頭に視線が動いていた。つやのある黒い髪が頬に触れる。

「……ったく、ほんとになさけないわね。こうじ」

俺をおんぶしている人はそう言った。だいたい五歳ぐらいだろう
か。

「……だって、まんげつじゃないもん」

俺の口から言葉が発せられた。やはり女の子のように高い声だった。

「だから、そういうとこがなさないの」

「……だって、ぼく、よわいもん」

「はあ。だいたい、なんであんなやつらなんかにまけてるの？ あいつらだってよわいじゃないの」

「……きょうこはつよいから。……そんなことがいえるんだ」

「うるさい。よわいこつじがいけないの」

「……だって」

「だってじゃないの。あたしがきたから、こつじはたすかったんでしょ？」

「……う、うん」

「なんでしかえししないの？ こつじがよわいから、みんなこつじをいじめるんでしょ？ あたしはしかえしたから、みんないじめなくなったよ」

「……でも、きょうこは、おとなにおしおきされたんでしょ？」

「あれはいいの。あんなの、たいしたことない」

「でも、きょうう、ないてたよ」

「……あれは、……こうじがきてくれて、うれしかったの」

「ぼくがくるまえからないてたよ。いっぱいけがしてた」

「ああ、うるさい！　いいでしょ。べつにないたって！」

「……う、うん」

「だいたい、こうじも、きょう、ないてた」

「……う、うん」

「なんにんいたっけ。じゅうにん？　そいつらにやられてた。こうじはなくてただけだったじゃない」

「……だって、ぼく、よわいから。しかえしなんてできないよ。きょうこみたいにつよくないんだから」

「はあ」

俺を背負っていた髪の毛の長い少女は膝をまげて腰を落とし、俺を背中から下ろした。地に足がつく感じがした。

少女は腰まで届く髪を揺らしながら振り向き、俺と向かい合う。

「いい？」

少女は右手の人差し指を顔の横で突き立て、左手を腰に当てて言

った。

「こうじはよわいからいじめられるの、わかる？」

「……う、うん」

少女は右手を降ろす。

「だったら、つよくなっちゃえばいいのよ」

「え？」

「こうじがつよくなれば、みんな、あたしたちをいじめなくなる」

「む、むりだよ」

「どうして？」

少女は眉をひそめた。

「……だって、ぼく、れいりよくは、さいじゃくなんだよ。まんげつときぐらいしかつよくなれないんだよ」

「……はあ」

顔を少し下に向けて、少女はため息をついた。

そして、再び俺と目を合わせる。

「れいりよくだけがつよさだって、かんちがいしてない？」

「……そうじゃないの？」

少女は首を左右に振る。

「ぜんぜんちがつね。たたかいかたとか、きもちとかがたいせつなの」

「そ、そうなの？」

「そうよ。だから、こうじもつよくなれる」

「ほ、ほんとに？」

「それに、こうじだけのちからだってあるでしょ？」

「え？ なにそれ。わかんないよお」

「あんたねえ、自分のことなのにおぼえてないの？」

「……わかんない」

「はあああ」

目の前の少女は大きくため息をついた。

「……おとことおんなのちから。どっちもつかえるんでしょ？」

「あつ。そうだね。……でも、弱いよ」

「ちからのつよさはかんけないの。どっちもつかえるなんてひきようよ」

「そう……かな」

「そうよ。こうじはつよくなれるんだから。ぜったいにつよくなれるんだから」

「……ほんとに？」

「うん。だから……」

少女は両手で俺の右手を包み込む。そして、俺の目を見つめて微笑んだ。俺の心臓は動きを早め、その鼓動は全身に伝わっていった。

「まんげつのよるじゃなくてもつよくなって」

少女は俺を見つめ続ける。

「あたしを守れるくらい、つよくなって。ふたりでたすけあえるくらい、つよくなって」

少女は目線を下げた。

「……おねがい」

しばらくの間、無言のまま俺は立ち尽くしていた。

そして。

「うん。わかったよ。きょうこ。ぼく、がんばってつよくなるよ」

少女は目線を上げ、対等な高さで俺の目を見る。

「ほんと！？」

「うん。約束するよ」

少女はにっこりと笑った。

「約束だよ。こうじ」

少女の笑顔は、幼い俺の心を引き付けていた。

暗転。

夜空に満月が浮かび、辺りは青い光に包まれている。目の前には、桜の咲き誇る山が見えている。

……また、記憶か。

俺はそう思いながら首を動かそうとしてみた。しかし、動かない。やはり、自分の身体を自分の意思では動かせないみたいだ。

でも、感覚はある。

感情もある。

なにか棒のようなものを俺は右手で握っている。

あと、よくわからないが、身体から溢れ出していまいそうなほど大きな力が、今の俺に宿っている感じがする。

……そしてなぜか。

悲しい気持ちになった。

それだけじゃない。

怒りも感じる。

憎しみも感じる。

何かの使命感を感じる。

そして。

誰かへの罪悪感で胸がいっぱいだった。

俺は一步、前へ進んだ。

すると、なにも持っていない左手を誰かに掴まれた感じがした。
しかし、俺は前を見続けていた。

罪悪感が、更に増した気がした。

俺の後ろから、噁り泣く声が聞こえる。

……多分。女の子のものだろう。

聞き覚えのある声だった。

「……うう……ひつく……い、いけないで」

俺は左腕を引っ張られた。身体は動かない。

「……いけないで。……おねがいだから……ひつく……いけないで
よお」

だめだ。

俺はそう思った。

「こうじがいくんだったら、わたしもいつしょにいく。……だから
……おいてかないで。……ひとりでいくななんてだめだよお」

俺の後ろにいる少女は泣きながら、必死に俺を引き止めようとしている。

罪悪感が込み上がってきた。

俺は口と目を固く閉じた。そして、開いた。

「だめだよ。きょうこをつれていくわけにはいかない。きょうはまんげつだから、むらはぼくがまもらなきゃ」

「だめ！　いかないで！　いくんだったらあたしもいく！」

少女は叫んだ。俺の目から、涙が出そうだった。

「だめだよ。きょうこがきたら、ぼくはきょうこをまきこんじゃうから。あぶないから。……来ないで」

俺は必死に涙を堪えていた。

「そんなんだつたらこうじもあぶないよ！　おねがいだから！　あたしをつれて行って！　いかないで！」

少女は泣き叫んだ。

俺は一度目を閉じた後、左手を掴まれたままゆっくりと後ろに振り向いた。見慣れた少女がそこにいた。

その少女は涙目で俺を見つめていた。俺を引き止めようと、俺の左手を握り締めながら見つめていた。

胸が締めつけられる思いがした。

苦しかった。

俺は、少女の小さな両手を振りほどいた。彼女の顔を見ないように、俺は目を閉じて彼女に近づいていく。

右手に握っていた棒のようなものを地面に投げ捨てる。

そして、少女を抱きしめた。

力いっぱい抱きしめた。

「……ごめん」

俺は少女の耳元でささやいた。

それ以外の言葉が思いつかなかった。

俺は彼女から離れた。その直後、俺は左の拳を少女のみぞおち付近に叩きこんだ。彼女は苦しそうに声を上げた。

そして、少女の身体から力が抜けていくのがわかった。

崩れ落ちそうな彼女を、俺は抱き留めた。抱きしめた。もう彼女の意識はないだろう。俺は届かないと思いつつも、少女の耳元で口

を開いた。

「……ごめん。きょうこ。ぼくはいかなきゃいけないんだ。きょうはまんげつだから、きょうだけぼくはむらでさいきょうだから、ぼくがいかなきゃ」

俺は少女を力強く抱きしめた。

「……ごめん。きょうこ。……ぜったいにもどってくるから。やくそくする。ぜったい、もどってくるから」

搾り出した声は震えていた。

届くはずもないのに。

でも。

「……やくそく……だよ？」

少女の声が、聞こえた。

ほとんど無意識に言ったようだった。

堪えていたものが溢れ出した。頬が濡れる感覚がする。嗚咽。俺は精一杯の力を込めて少女を抱きしめた。

「……うん……やくそくする」

そこで俺の視界は闇に包まれた。

あれ？

なんだ？

この記憶。

なんだろう。

なんかとても。

なつかしい記憶。

失ったはずの記憶。

謎に包まれた自分の、

記憶を失う六歳以前の、

信じられない自分の過去。

でも。嘘だとは思えないな。

夢とは思えないほどの明確さ。

あの視点。あの景色。あの感情。

月影さんと一緒に生きて行こうと、

あの時俺は言葉とともにそう誓った。

でも実際のところどうだったんだろう。

必ず戻ってくると約束したはずの自分は。

その後十年間、彼女の事を忘れていた。

初めて会った時。いや、再会した時。

あの人はどれほど傷ついただろう。

十年間探し求めた自らの相棒が。

自分の事を忘れていたなんて。

あのときの彼女の気持ちは。

馬鹿な俺にはわからない。

いや、想像もできない。

強がっていたんだよ。

あの時は、必死に。

さとられまいと。

悲しみを全て。

自分の中に。

しまつて。

耐えた。

ただ。

俺は。

気づかなかったただだったんだ。

ごめん。

月影さん。

交わした約束。

今思い出したよ。

二つ目は『ずっとそばに居ること』

これは、守れてないね。

十年間もできてない。

約束を破った。

はは。最低。

俺って。

最低。

二つ目は『強くなること』

ごめん。

これも守れてない。

俺はずっと弱かった。

女の子に避けられて。

何をやっても平凡で。

自分をあきらめていた。

六歳以前の記憶を失って。

血の繋がらない人に育てられて。

満月の夜だけ幽霊が見えてしまって。

そんな自分がわからなくなって。

ただ、怯えていた。

それだけだった。

約束を破った。

またかよ。

俺って。

最低。

三つ目は『必ず戻ってくること』

これは、

今からでも。

できるんじゃないだろうか。

死の淵から戻って来ること。

月影さんのもとに戻ってくること。

でも、胸にぽっかり穴が空いて。

出血多量で意識を失って。

普通の人間にできるか？

……無理だろうな。

でも。仮に、

俺が。

退魔師だったなら。

彼女の言う通りに退魔師だったなら。

満月の夜だけ反則的に強くなるのなら。

自己回復能力を使えば、

可能かもしれない。

だから俺は願う。

自分が退魔師であることを。

自分が退魔師の力を取り戻すことを。

そして、彼女を助きたい。

いや、助ける。

だから。

どうか。

月影さんの言うことが。

本当であってほしい。

ただ、彼女を助きたい。

だから思う。

俺は退魔師。

俺は月影さんの相棒。

俺は男と女の両方の力をもつ退魔師。

俺は満月の夜だけ最強になる退魔師。

俺は魔物を浄化したい。

俺は彼女と共に。

戦いたい。

ただ。

それだけ。

だから。

もう一度。

願わせてもらう。

俺は退魔師になって。

あの人を助けたいと。

強く願う。

ドクン。ドクン。

心臓の鼓動が聞こえる。

なんだろう。この感じ。

久しぶりのような。

懐かしいような。

この。

力がみなぎってくる感じ。

鼓動。拍動。躍動。興奮。希望。

だめだ。抑えきれない。

我慢できない。

もう。

待てない。

今日は満月。

とてもきれいな満月。

あの人は。

満月の夜じゃなくても強くなってる。

言っただけ。

それは、難しいね。

でも、頑張るから。

満月の夜じゃなくても強くなるから。

でも、今日は満月。

だから。

今日だけは。

今日だけは満月に頼らせて。

お願い。

そうだ。俺はまだ死んでいない。

こんなところで死ぬわけにはいかない。

やり残したことがたくさんあるから。

できなかったことがたくさんあるから。

ここで死んだらあの世で後悔する。

だって、やっと自分がわかってきたから。

少しはわかるようになってきたから。

だから自分をもっと知りたい。

謎だらけの自分をわかりたい。

なぜ女性に避けられるのか。

どうして満月の夜だけ幽霊が見えるのか。

いったい、十年前になにがあったのか。

柳川さんと月影さんの関係とか。

わからないことがたくさんある。

だから、それを知りたい。

でも。わかったことだってある。

月影さんは俺の大切な人ということ。

月影さんは退魔師ということ。

そして。

俺は退魔師で。

俺は彼女の相棒だということ。

ありがとう。月影さん。

あなたは俺の暗い人生に差し込んだ、

一縷の光だった。

楽しかったよ。

だからね。

もっと。

あなたと一緒にいたいよ。

楽しい時間を過ごしたいよ。

これから。ずっと。

だって。俺は約束したじゃないか。

ずっと一緒だよって。

だから。今からそれを守ろう。

今からあの人のところに帰ろう。

そして。強く生きよう。

退魔師として。

彼女のパートナーとして。

強くあろう。

ああ。……なるほど。

あの言葉の意味がわかったよ。

絶対に俺から言わないといけない、

あの言葉。

言わなきゃ。

言いに行かないと。

言いに行こう。

彼女を助けてから。

面と向かい合って言おう。

今行くよ。

月影さん。

いや。

香子……。

気づけば立っていた。

山坂浩二は立っていた。

青白い光の爆発と一瞬の爆風の後、地面に倒れていたはずの山坂浩二は、両足を地につけて立っていた。

彼を包み込む青白い光は、まるでそれが炎であるかのように揺らめいている。ときには山坂浩二の二倍ほどの高さまで届くこともあ

った。

五つあったはずの学生服のボタンは全て弾け飛び、学生服の裾は光の炎に合わせてはためいている。

そして、山坂浩二の右手には錫杖しやくじょうが握にぎられている。それは山坂浩二の身長よりも頭一つ分長い。

頭をうつむけたまま山坂浩二は地に立てられたその錫杖に体重を掛けた状態で、震える左手を前へ突き出した。

彼は頭を上げた。彼の目に映ったのは、空中で戦いを続けている月影香子と大量の悪霊。そして、月影香子は山坂浩二を見ていた。

呆氣にとられたような。

驚いたような。

とにかく複雑そうな表情をしている。現状を把握しきれていないのかもしれない。しかし、無理もない。

死んだとおもった山坂浩二が立っている。

胸に空いていたはずの穴が塞がっている。

莫大な霊力の放出。

退魔師としての山坂浩二の象徴。錫杖。

そして、山坂浩二は左手を月影香子に向けて突き出している。

山坂浩二は考えた。

浄化の仕方を。

悪霊を本来あるべき場所に還す方法を。

山坂浩二は考えた。

黒い霧のようなものが悪霊を取り巻いている。

黒。悪霊の黒。邪悪な黒。

ならば、黒の反対。

……白。

白のイメージ。

山坂浩二は自身の体を駆け巡る莫大な霊力を左手に集約し始めた。

全て白のイメージで。

黒を取り払うイメージで。

山坂浩二は月影香子に視線を移した。彼女は空中に浮かんでいるだけ。そして、そんな彼女を悪霊たちが包囲している。

彼は口を開いた。

「香子！」

月影香子は驚いたような表情で山坂浩二を見つめた。

山坂浩二はもう一度叫ぶ。

「そこから離れて！」

月影香子は一瞬動きを止めたが、すぐに頷き、周りの悪霊を薙ぎ払い、遙か上空を指して飛び上がった。

山坂浩二は左手の先から白い浄化の霊力が放出されるイメージを持った。そして、集約した莫大な霊力を解き放つ！

白い光を放つ、巨大な球状の霊力の塊。それは、夜の闇を引き裂き、やがて二十体ほどの悪霊を包み込んだ。

破裂！

悪霊を取り巻いていた黒い霧は、白い光によって取り払われていく。そして悪霊たちはその姿を維持することができず、弾けとぶようにして姿を消した。

粉となった白い残骸が雪のように舞い降りる。

悪霊がいなくなったと思った矢先、また次の悪霊が十体ほど現れた。しかし山坂浩二は怯まない。

錫杖を強く握り締め、地面を蹴って跳び上がった。

わずかな霊力の放出によって彼の体は宙を自由自在に駆け巡ることができた。山坂浩二は悪霊の集団の中央に到達。

そして右手に持った錫杖で周りの悪霊を薙ぎ払った。

悪霊の黒い姿が大きく揺らぐ。

山坂浩二は再び白のイメージを持った。体中の霊力が浄化に特化していく。

そして放出！

全方位に解き放たれた浄化の光は悪霊たちを包み込んだ。それらは本来の居場所に帰り、雪のように舞う光の粉を残していく。

山坂浩二は息を切らしていた。先程から霊力の消耗が激しすぎる。すべて莫大な力に頼っているだけだった。

でも、それ以外に方法はない！

山坂浩二は空を見上げた。遙か上空では、月影香子と悪霊の大群集が激戦を繰り広げているのがわかった。

明らかに月影香子が不利だ。五十体ほどの悪霊を相手に、彼女は二本の刀を振り回しながら逃げているようにしか見えない。

助けなきゃ！

山坂浩二は霊力を放出して空を駆け上がった。彼を包み込んでいた霊力の炎は小さくなり、もうわずかしかない。

しかし、山坂浩二は確信した。

これは無駄な霊力の放出が抑えられているだけだということを。彼の体内には、莫大な霊力がまだまだ残っている。

いつの間にか、山坂浩二を包み込む光には、青白いものだけでなく赤色のものまで混ざり込んでいた。

しかし、山坂浩二は気に留めない。

ただ、月影香子のもとへと向かう。

そしてたどり着く！

山坂浩二は月影香子を追う多数の悪霊に、青白い霊力の光弾を左手から撃ち込んだ！

何発も。何発も撃ち込んだ。

悪霊たちの動きがしだいに鈍くなっていく。

そして、白のイメージ！

山坂浩二は一体ずつ、白い浄化の光を差し向けた。それらは確実に悪霊を包み込み、本来在るべき場所へと導いていく。

霊力の雪が舞い降りる。

山坂浩二はその雪を浴びながら、遠くで佇んでいる月影香子に向けて叫んだ。

「香子！　お願い、手伝って！」

山坂浩二は激しい呼吸を繰り返していた。途切れ途切れに言うことしかできなかったが、それでも彼は叫んだ。

頼んだ。

月影香子は困惑したような表情をしていたが、やがて山坂浩二をまっすぐに見つめて首を縦に振った。

そして彼女は山坂浩二のもとへと向かった。空を翔る彼女は、笑っているようにも見えた。

山坂浩二も彼女のもとへと向かう。

そして、二人は互いに手を伸ばせば届くほどの距離まで近づき、

無言のまま空中で見つめ合った。

そうしている間にも、二人の周りには悪霊たちが集まってきており、攻撃する機会をうかがっていた。

百体ほどはいるのだろうか。それらは一人を球体の中心にするようにして取り囲んでいる。

二人は頷き合った。

「浩二」

「なに？」

二人は口を開いた。

「悪霊を浄化するには、浄化の霊力が悪霊の霊力を上回ってないとだめだよ」

「……わかった」

山坂浩二は頷いた。

その時。

悪霊たちが二人に向かって一斉に襲い掛かった。

悪霊と二人の距離が徐々に縮まっていく。

絶望的な数の差。

それでも二人は。

笑っていた！

山坂浩二と月影香子はお互いに逆方向へと分かれ、悪霊たちを迎え撃った。山坂浩二は錫杖を手に。月影香子は二本の刀を手に握り締めて。

立ち向かった。

山坂浩二は錫杖で悪霊たちを横一文字に薙ぎ払った。それだけで五体ほどの悪霊の姿が大きく揺らいた。

すかさず白のイメージ。

彼は左腕を内から外へと振りながら、左手の先に集めていた浄化の霊力を悪霊たちに向けて放った。

白い光の波が、悪霊たちを包み込んだ。

消滅。

山坂浩二は息を切らしながら少しの間だけ安堵した。

しかし。それもつかの間。

新たな悪霊の集団が山坂浩二に迫ってきた。先程の三倍はいる。彼は舌打ちをした。

（やっぱり。力の消耗が激しい）

山坂浩二の額には汗が浮かび上がっている。彼を襲うのは疲労。力技でしか戦えない彼にとっては当然の報いだった。

（浄化は靈力を大量に使うみたいだ……）

山坂浩二は錫杖を両手で持って構えた。

（……だったら）

山坂浩二は悪霊に向かって空を翔けた。

（限界まで靈力を削り取る！）

山坂浩二と悪霊の集団が激突した。

月影香子は満月に照らされた空を縦横無尽に翔けながら、悪霊た

ちの攻撃を防いでは反撃し、そして距離を取るということを繰り返していた。

彼女は山坂浩二のように悪霊を浄化することはできない。悪霊の数が減っているのは、すべて山坂浩二の浄化によるものだった。

しかし、彼女は劣等感などを持たない。

なぜなら。

（霊力を削り取るのが私の役目！）

月影香子は危険を冒さず、一体ずつ確実に霊力を削り落としていく。力技の山坂浩二と比べて、彼女の戦いは見ているものを魅了するほどの美しさがあった。

月影香子は空を翔け回った。

彼女の役目はただ一つ。

悪霊たちの霊力を削って山坂浩二に浄化してもらうこと。

ただ、それだけで構わない。

山坂浩二は錫杖を振り回し、悪霊の霊力が弱まったところで浄化を行うということを繰り返していた。

月影香子と比べて、彼の戦いは荒々しい。莫大な霊力に頼ること
しかできず、無駄な霊力の消耗が激しい。

それでも彼は戦う。

ただ、月影香子を助けるために戦う。

山坂浩二は目の前にいる悪霊を錫杖で撲りつけ、左手を突き出し
て浄化の光を放った。

悪霊は霊力の雪を残してこの世から去っていく。

山坂浩二は左腕の袖で額の汗を拭った。冷たい風が彼の額から熱
を奪いとっていく。山坂浩二は息も絶え絶えになっていた。

(……まだ、力が沸き上がってくる)

山坂浩二はまだ戦う気でいた。

しかし、彼の周りには悪霊の姿はない。山坂浩二が力技で全てを
浄化していた。

彼は辺りを見渡した。

月影香子の様子をうかがおうとした。

しかし、彼女の姿はない。

「あれ？ 香子は？ 香子はどこだ」

山坂浩二は自分の戦いに夢中になり、助けるべき彼女の姿を見失ってしまっていた。後悔が彼を襲った。

「まさか。死んだとか、ないよな……」

彼は夜空に浮かぶ満月を見上げた。見る者を高揚させるそれは、ただ静かに、山坂浩二を照らしているだけだった。

「香子……」

彼は自らのパートナーの名を呼んだ。しかし、反応はない。

山坂浩二はうなだれた。

その時！

「浩二！」

山坂浩二は後ろを振り返ると同時に顔を上げた。

遙か上空に、二本の刀を持って空を翔けてる月影香子がいた。腰

まで届く長い髪が揺れている。満月に照らされて揺れている。

「香子！」

山坂浩二は叫んだ。

彼女の名前を呼んだ。

（よかった……）

彼は安堵した。

しかし、それもつかの間だった。

悪霊の大群が月影香子の後ろを追ってきているのを山坂浩二は目で捉えた。

彼女が危ない！

彼はそう思った。

しかし、すぐに違和感を感じた。悪霊の動きが鈍い。

これは、追われているのではない。

（まさか……）

山坂浩二は月影香子に視線を向けた。彼女はほんの少し、笑っていた。

「浩二！」

彼女は叫んだ。

（香子は追われているんじゃない……）

山坂浩二は月影香子を見つめていた。遙か上空を翔ける彼女は、山坂浩二の真上を通るときに叫んだ。

「お願い！ 浄化して！」

山坂浩二は首を動かしながらその声を聞いて確信した。

（悪霊を弱らせてくれたんだ！）

山坂浩二は錫杖を持ったまま、両手を重ね、悪霊の大群に向けて両手を突き出した。月影香子を追って飛行を続ける悪霊たちに狙いを定める。

体中の霊力を両手の先に集中させていく。

白のイメージ。白のイメージ。

山坂浩二の額に汗が浮かぶ。

月影香子は遠く離れたところで大きくUターンをした。そして、斜めに降下しながら山坂浩二に向かってくる。悪霊たちも山坂浩二に向かって直進してきた。

月影香子は山坂浩二の前まで来ると、一度彼と目を合わせてから

無言のまま彼の後ろにゆっくりと移動した。

そして。耳元で。

「頑張つて。浩二……」

ささやいた。

その瞬間、彼の霊力が一気に高ぶった。そしてそのほとんどが両手の先を集まって、浄化の霊力に変わっていく。

悪霊の大群は、斜めに降下しながら山坂浩二に向かってくる。

山坂浩二は悪霊の大群に向けて斜め上に両手を突き出している。

彼は無数の赤い目に怯えたりはしない。

ただ、使命を果たすのみ！

山坂浩二は目を閉じた。そして静かに告げる。

「お前らがここにいない必要なんてないだろう？」

山坂浩二はゆっくりと目を開けた。

「この世界にいと苦しいだろう？」

山坂浩二は満月を背に迫ってくる悪霊にむけて両手を伸ばす。

「だから……」

静寂。

「苦しくない場所に還してやるよ……」

そして。

彼の両手から。

浄化の光が放たれた。

それは、夜の闇を切り裂いて。

苦しむ悪霊たちを包み込んで。

彼らを本来の居場所へ還していった。

靈力の雪が降った。

満月の光を反射しながら地上へと降りていった。

山坂浩二は倒れ込むように地面に背中を向け、降下を始めた。ゆっくりと地上に向かう彼は、少し上にいる月影香子に向けて左手を伸ばした。

月影香子は呆気にとられた表情をしながらも、両手に持った二本の刀を青白い光を放つ靈力に戻した。そして、下にいる山坂浩二のもとへ向かい、彼が伸ばした手を、左手で握ろうとした。

一度目はかすった。思った通りには握ることはできない。

でも。二度目は。

ちゃんと握ることができた。

二人は、少しだけ時間が止まったような気がした。

山坂浩二は微笑み、錫杖を青と赤と白の光を放つ靈力に戻して自分の体に取り込んだ。月影香子と同様に手ぶらになる。

二人はそのまま、ゆっくりと落ちていく。

やがて、二人は河川敷広場へと降り立った。

もう、悪霊の姿はなく、ただ、風が二人の頬をなでていくだけだった。風が、二人の髪を揺らしていくだけだった。

二人は向かい合った。

その瞬間。

月影香子の表情が崩れた。

両目から涙が溢れ出てきた。

「じゅじゅ……」

彼女は嗚咽を漏らした。

「じゅじゅ……」

涙が彼女の頬を伝っていく。

そして。

「わあああああああああああ！！」

彼女は叫び出した。

泣き叫び出した。

山坂浩二に飛びつき、彼の胸に顔を埋めて泣き叫んだ。

山坂浩二にしがみつこうようにして泣いた。叫んだ。

「わあああああああああああ！！」

彼女が流した涙は山坂浩二の胸を濡らしていく。

彼女は泣き叫び続けた。

山坂浩二にしがみついて泣き叫び続けた。

山坂浩二の胸に顔を埋めて泣き叫んだ。

山坂浩二は両腕を垂れたまま、ただ静かに空を見上げた。

あんなに強く振る舞っていた彼女が。

悪霊に怯えず、勇敢に立ち向かっていた彼女が。

一度も涙を見せたことのなかった彼女が。

今。こうして泣いている。

泣き叫んでいる。

どれだけつらかったのだろうか。

どれほど寂しかったのだろうか。

山坂浩二にはわからない。

でも。

自分よりは辛い思いをしてきたことぐらいはわかった。

ごめん。香子。

信じてあげられなくて。

ごめん。香子。

冷たい態度を何度もとって。

ごめん。香子。

ずっと、一人にさせて。つらかったよね？

ほんとにごめん。

山坂浩二は青い光に照らされた空を見上げたまま、まるでそれがうわごとであるかのように謝った。

月影香子は反応しなかった。血で赤く染まり、胸の部分に穴が空いている山坂浩二のシャツにしがみついて泣き叫んでいる。

でも。届いただろう。

彼の言葉は届いただろう。

そして、山坂浩二は思う。

今こそ、あの言葉を言おうと。

あの約束を果たそうと。

「香子……」

山坂浩二は彼女の背中に腕を回して彼女を抱きしめた。悪霊と激

戦を繰り広げていたあの姿からは想像もできないほど細く、頼りない身体をしていた。

彼女は、とてもいい香りのする、

ただのか弱い、女の子でしかなかった。

さっきまで大声で泣き叫んでいた月影香子だったが、その声は今
はもう小さくなり、彼女の鼻をすする音が聞こえるだけだった。

山坂浩二は月影香子を抱きしめたまま、背中を丸めている彼女に
向けて言った。

「……ただいま」

山坂浩二は彼女から手を離し、いまだ泣き止まない月影香子を見
つめながら、一歩下がった。

彼の身体には、まだ彼女の温もりが残っている。月影香子はその場から動かず、ただ両手で目をこすって涙を拭っただけだった。鼻をすする音が聞こえる。

月影香子は涙を拭い終わると、まっすぐに山坂浩二の目を見つめ始めた。彼女の目は、まだ少し赤い。

それでも彼女は山坂浩二を見つめる。

そして、精一杯の笑顔を山坂浩二に向けた。

「お帰りなさい……浩二」

山坂浩二は笑みを浮かべる。

満月の光が、^{ムーン・ライト}見つめ合う二人を優しく包み込んでいた。

第九章 約束の時（後書き）

エピソードは二日後、水曜日に投稿します。

《第一編》エピソード いつかきつと……

翌日の昼。

山坂浩二と月影香子は二人並んで銅鏡川に沿う道路を歩いていた。昼ということもあってか、何台かの自動車が二人のそばを走っていく。

山坂浩二は学生服を着ていて、黒色のスポーツバッグを肩に掛けて背中に回している、というお馴染みの格好をしている。

月影香子は紺色のセーラー服を着ており、黒色の手提げ鞆を左手にぶら下げている。スカートは膝を隠し、腰まで届く髪は下ろされていた。

二人はそれぞれ、山坂浩二が右側を、月影香子が左側を歩いている。二人は決まりを無視して道路の左側を通行していた。

月影香子が鞆を持ったまま、両手を高く挙げてのびをした。

「あー疲れた。土曜補習って、ほんとにめんどくさいよね」

彼女は歩きながら、隣にいる山坂浩二に向けて言った。

「……同感」

山坂浩二はズボンのポケットに両手を入れて、前を向いたまま、目をだらしなく開けて答えた。

「まあ、午前中で終わるつてのは嬉しいんだけどね」

「でもめんどくさいじゃない。一つの授業につき六十分よ。普通のやつより十分も長いのよ。ほとんど嫌がらせよ」

月影香子は両手を頭の後ろで組んで、山坂浩二に顔を向けた。山坂浩二もゆっくりと彼女に顔を向ける。

「じゃあ、補習が八十分授業の三年生とかはどうなるんだよ。……しかも、今は受験対策とかなんかで夕方までやってるらしいよ」

山坂浩二はため息をついた。

月影香子は目を見開いて山坂浩二を見つめる。

「……は、八十分？ いやよそんなの！ 無理ムリムリ。絶対やだ」

「受験生なんだから仕方ないでしょ」

「でもやだ。受験生なんていやだ。うちの学校、たいしたことないくせに進学校ぶるからいやなのよ」

「でも、一応……県内公立高校じゃあ、突き抜けてるんだけど……」

「それがなんなのよそれが。関係ないわよ」

月影香子は不満を言う。山坂浩二はため息をついた。

「香子……。この前の校内模試、何番だった？ そんなに文句言うんだから結構上の……」

「下から二番目」

「……え!？」

一瞬。二人の時間が止まった。山坂浩二は目を見開く。

「下から二番目って、おい。……なにやってんの？」

山坂浩二は信じられないといった目で彼女を見つめながら尋ねた。それに対して月影香子は表情を変えない。

平然としている。

「……だって。勉強する時間なんてほとんどないのよ。勉強してないんだから当たり前よ、あ・た・り・ま・え」

月影香子は前を見ながら鼻で笑う。

「担任がうつとうしいのよ。もっと勉強しろだって。悪霊に追われて勉強する時間なんてなかったんだから」

月影香子は眉をひそめた。

「……だいたい、そういう浩二は何番なのよ」

彼女は目を細め、横目で山坂浩二を見ながら尋ねた。山坂浩二は右手を顎に当て、しばらく考えた後、

「……だいたい、真ん中ぐらいだったかな」

と言った。月影香子は目線を前に向け、再び鼻で笑う。

「まあ、浩二らしいっちゃ浩二らしいわね」

「あつそ」

二人は無言になり、ただ歩いていくだけになった。未来橋近くの坂道を上り、道路を自動車が走っていないか確かめ、車道を横切った。

山坂浩二が坂道を下ろうとした時、彼は左腕を掴まれた。ポケットに入れていた左手がポケットから出ていった。

山坂浩二は後ろに振り向いた。自分とほとんど身長が変わらない月影香子が腕を左手で掴み、山坂浩二の目をまっすぐに見つめていた。

頬が少し赤みがかった。

「……あ、あのさ、浩二。せっかくだからさ。あたしの家でお昼ご飯食べていきなさいよ」

彼女は目線を山坂浩二から左下に向け、

「ぐ、偶然帰り道でいっしょになったんだからさ」

と言った。

山坂浩二は月影香子を見つめる。月影香子は再び山坂浩二

に目線を向けた。彼女は顔をさらに赤くしながら眉をひそめる。

「……な、なによ？」

山坂浩二は鼻で笑った。

「『偶然』、ねえ。……俺には香子が、校門で待ち構えていたようにしか見えなかったんだけど」

ニヤニヤ。山坂浩二は笑う。

すると、月影香子は顔をさらに赤く染め、山坂浩二の左腕を掴んでいた手を離れた。そして、両手をにぎりしめて身体の横で伸ばし、顔だけを山坂浩二に少し近づけた。

山坂浩二は少しのけ反る。

「うるさい！ 偶然ったら偶然なのよ！ 別に二十分も待ち構えてりしてないんだから！ 偶然なの！」

山坂浩二は顔を赤くしながらも、引き攣ったような笑みを浮かべた。

「……二十分。待ったんだ」

「待ってないわよ！」

月影香子は身体を左側に向けながら、右手で山坂浩二の左手を掴んだ。そして、顔を赤くしたまま未来橋を渡り始める。

山坂浩二も彼女につられて歩き出す。

「お昼ご飯強制！ 食べていかないと許さない！」

「えっ、えっ、ちょ、ちょっと香子！？ 待つて。待つてよ」

「いや、待たない。浩二の意見なんて聞かないんだから！」

月影香子は山坂浩二の腕を引っ張りながら歩く。

山坂浩二は一度ため息をついた後、素直に彼女に従った。

未来橋には片側一車線道路があり、その両端には車道とほぼ同じくらいの幅をもつ歩道が通っている。

手摺りの部分は太く、朱い。歩道の車道すれすれのところに、街灯が左右対称で等間隔に並んでいる。

さらに、橋の右側の遠く離れたところには水色の橋が見え、左側の遠く離れたところには茶色の橋が見えている。

また、未来橋は緩やかなアーチ状になっている。そのため、山坂浩二と月影香子は今坂道を歩いているような気分になっている。

橋の中央まで歩き、ようやく下り道になるかと思われたとき、月影香子は足を止めた。つられて山坂浩二も足を止める。

月影香子は振り向いて山坂浩二と向き合った。

「ねえ浩二」

「なに？ 香子」

「昨日はありがとう。助けてくれて」

月影香子は微笑みを浮かべた。山坂浩二は顔を赤く染める。

「そ、そんなにたいしたことじゃないよ。……力に任せて、ただ、暴れるだけ暴れただけだし……」

山坂浩二は彼女から目をそらした。月影香子は首を横に振る。

「ううん。そんなことないよ。……浩二が襲われたときにねあたし、勝手に浩二が死んだと思ってね。それで、自棄^{やけ}になって悪霊を斬れるだけ斬ってた」

月影香子はまっすぐに山坂浩二を見つめる。

「……そしたらね。なんて言うのかな。霊力の爆発？ みたいなのが起きて、気づいたら浩二が立ってたんだ。……私、信じられなかったけど。嬉しかった」

山坂浩二は月影香子に視線を向けた。彼女の目には、少し水のようなものが溜まっている。月影香子は続ける。

「それで、一緒に戦ってくれて嬉しかった。香子って呼んでくれて

嬉しかった。『ただいま』って言ってくれて嬉しかったよ」

微笑みを浮かべる彼女の目から、一粒の水滴が流れ落ちた。でも、それ以上は落ちてはこなかった。

「……ねえ浩二？」

彼女は山坂浩二をまっすぐに見つめる。

「思い出してくれたの？」

二人の間に、わずかな静寂が訪れる。

その後、山坂浩二は口を開いた。

「……ちょっとだけね。戦いは、身体が勝手にやってくれた感じ……かな」

山坂浩二は目線を下げ、自らの右手を見つめる。

「もう、今はあんなに大きな力は残ってない。……昨日のに比べたら、今のは、ほんの残りカスぐらいかな」

山坂浩二は目線を上げた。月影香子は微笑みを浮かべたままだった。

「それが浩二なの。……月に一度、もつと言えば、三十日に一度の最強。……それが浩二なんだから」

月影香子は山坂浩二を見つめる。

「……これから、浩二も悪霊に襲われちゃうんだね。……でも大丈夫。あたしが浩二を守ってあげるから」

山坂浩二は無言のままだった。月影香子は続ける。

「ええと、あと、その……」

ためらい。風。そして。

「待ってるからね」

山坂浩二は首を傾げた。

「……えっ？ なにを？」

月影香子は首を横に振る。

「うっん。なんでもない」

彼女はそう言うと、山坂浩二に背中を向けた。腰まで届く、長い、黒髪が、風でなびき、揺れる。

月影香子は歩き出した。山坂浩二も、彼女を追ってゆつくりと歩き出した。自転車が一台、二人の横を通っていった。

山坂浩二は歩きながら再び自らの右手を見る。

（……待つてゐるって、もしかしたら『満月の夜じゃなくても強くなる』って約束のことなのかな。……二人で助け合えるぐらいに、俺が、強くなることなのかな）

山坂浩二は前を歩く月影香子に目を向けた。腰まで届くほど長く、艶やかな黒髪。その先端が彼女の歩調に合わせて揺れ、髪と髪の間を開けたり閉じたりするのを繰り返している。

山坂浩二は再び視線を下げて自らの右手を見つめた。

（結局、満月の夜だけ幽霊が見えたのは、俺が満月のときだけ最強になる退魔師だった頃の名残だったんだ……）

では、何故自分は力を失ったのか。何故、記憶を失ったのか。何故、香子以外の女の子に避けられるのか。

わからないことがいっぱいある。

退魔師についてもよくわからない。退魔村についてもよくわからない。……ただ、自分はよくわからないまま力を手に入れ、戦い、そしてこれからは悪霊に追われる運命にあるのだろう。

……でも大丈夫。

一人じゃないから。

だって、香子がいるから。

霊力是最弱でも、くじけない。

(……強くなるう)

山坂浩二は右手を握り締め、目の前の月影香子に視線を移した。

月影香子は歩きながら青く、雲一つない空を見上げた。

そして、後ろにいる山坂浩二に聞こえないように、小さな声でもう一度呟く。

「……待ってるからね」

二人の物語は、まだ始まったばかり……。

《第一編》エビローグ いつかきつと……（後書き）

……えつと、一応、これで『ムーン・ライト《第一編》』は終了です。やっと、物語の一割が終わりました。

『ムーン・ライト』はまだまだ続きます。

さて、この《第一編》のテーマは、簡単に言つと『よくわからない』です。

もう少し踏み込んで言いますと、『自分がわからない』、『相手がわからない』、『物事の全体像がわからない』です。

この物語は三人称ですが、今回は山坂浩二に沿うかたちにさせて頂きました。

キーパーソンである月影香子からの視点は、できるかぎり省きました。

そのため、かなり薄い物語になってしまいましたし、拙い文章力のためにテーマが上手く表すこともできませんでした。

ほんとは、もう少し『山坂浩二の自分探し』を表現したかったのですが、先程も言いましたとおり、可哀相なほど文章力がありませんので表現できませんでした。

それでも、ここまで読んで下さった方には感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、次からはバトルものになっていきます。

そして、次はバトルものの第二話では定番の展開になります。そして、月に一度の最強から、一転して霊力最弱となった山坂浩二の戦いを描きます。

また、退魔師と退魔村についても触れていきます。月影香子からの視点も増やします。

そして、気になる『あの人』の正体も明かされます。

期待しないで待っていてください。

山坂浩二と月影香子の物語とともに、作者の成長も見届けて下さると嬉しいです。

とりあえずは大学受験に向けて勉強しなければなりません。一旦投稿は中止させていただきますが、合格できたら再開する予定です。

最後に感謝の言葉を。

友人のK君、T君。このようなくだらな作品を、応援して下さい。ありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

お気に入り登録して下さい。あなたの存在が励みになりました。おかげさまで無事、《第一編》を書き終えることができました。本当にありがとうございます。

そして、この作品をここまで読んで下さった方に最大級の感謝を。

『ムーン・ライト』はまだまだ続きます。これからも読んで下さると嬉しいです。

よろしければ、感想もよろしく願いします。

それでは、また会いましょう。

……ヘンタイ六人衆の出番は増えるのかな？

2011年 10月26日 武池 柁斗

この物語はフィクションです。実在の人物、団体等とは一切関係ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3014s/>

ムーン・ライト

2011年11月15日15時51分発行